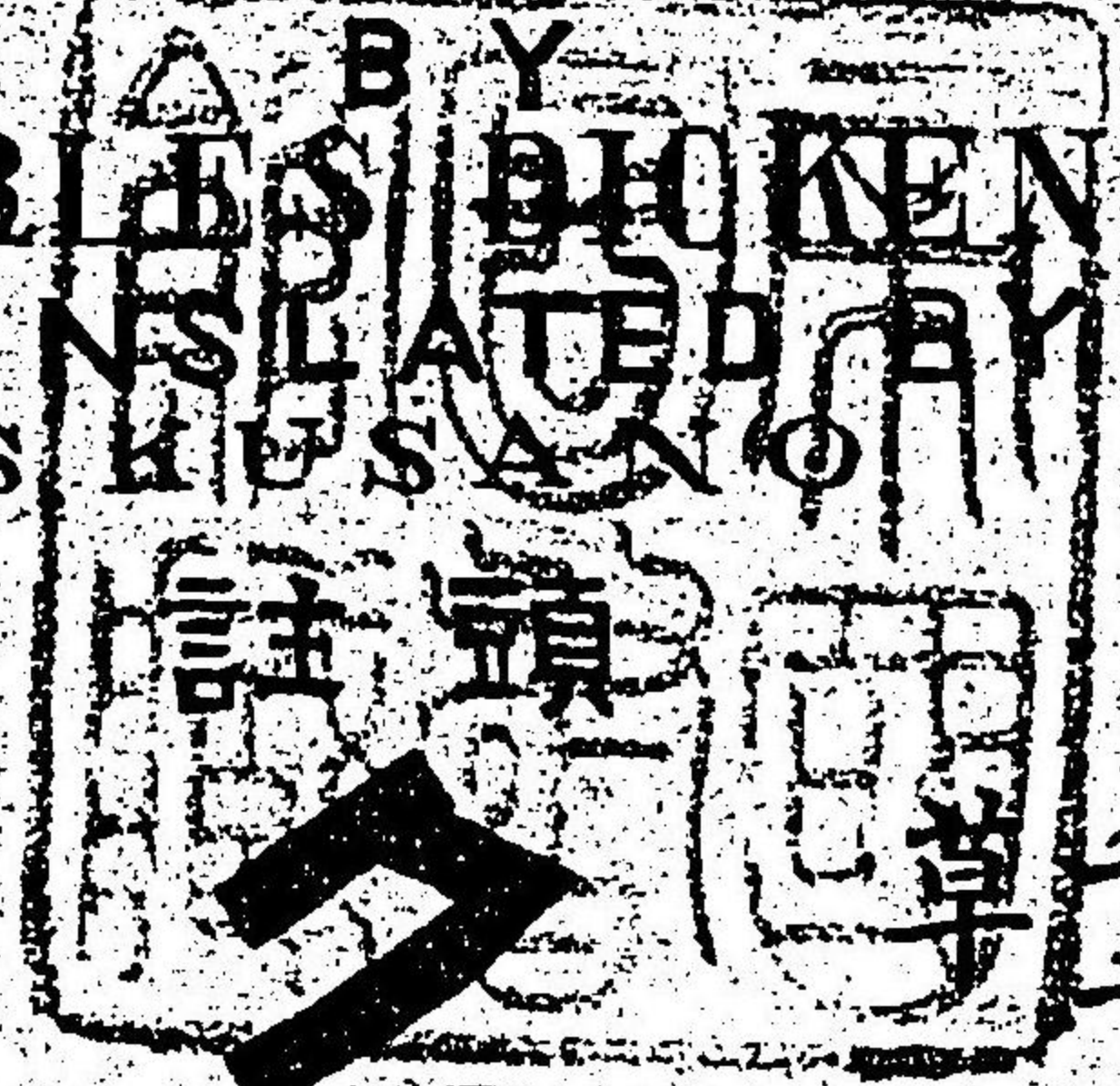


II-3T80

96-10

A  
CHRISTMAS CAROL,

BY CHARLES DICKENS.  
TRANSLATED BY  
S. H. SANO

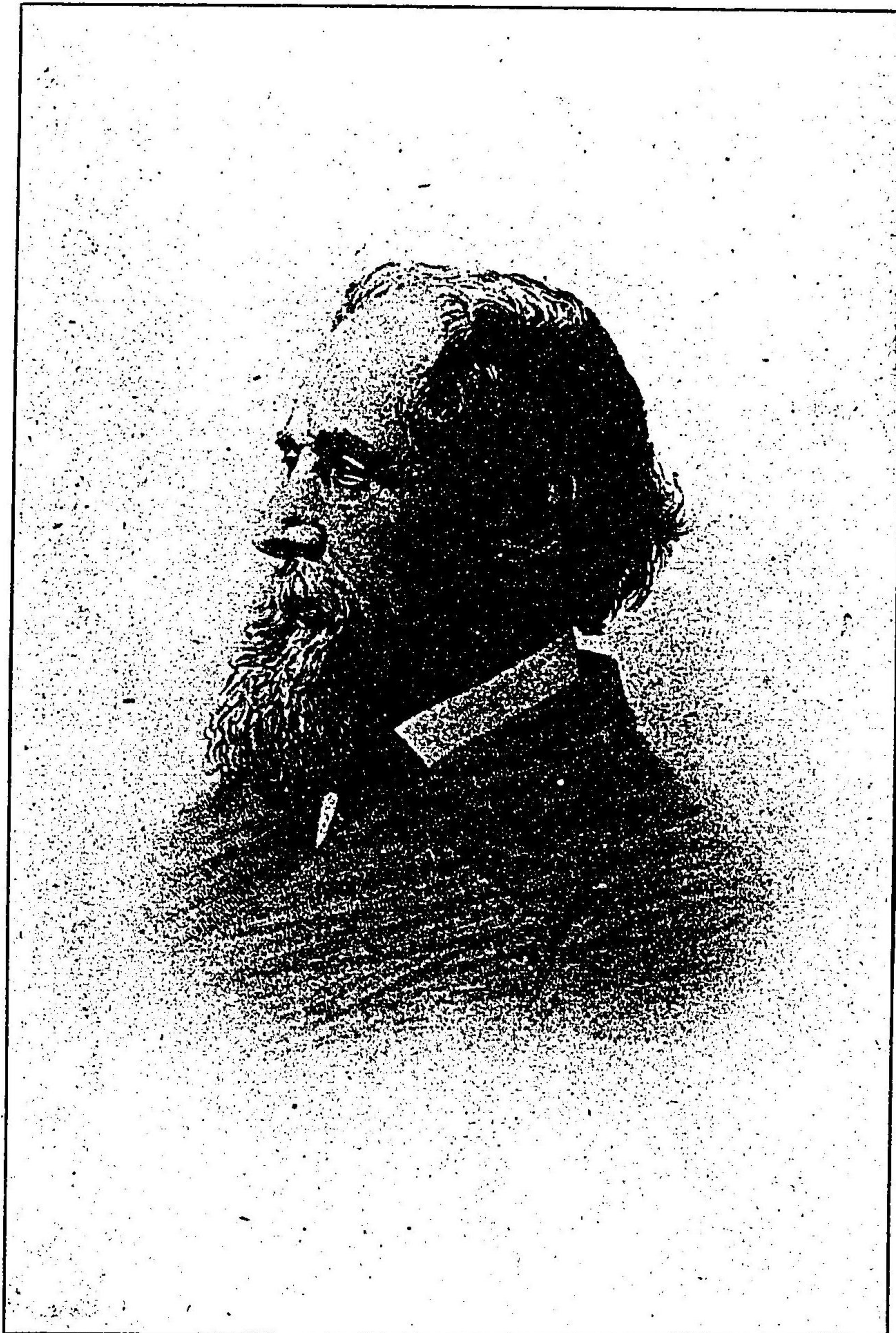


クリスマスカール

チャールズ・ディケンズ 著  
野柴二 譯

尚文館發行





Charles Dickens.

チャールズ、ダッケンス

(東京) 丸善印刷局

### チャールズ デッケンス 小傳

チャールズ デッケンスは一千八百十二年二月、ハムプシャヤ州のランドボウドに生れき。父はボウツマウスにおける海軍局の書記ありしが、チャールズの九歳お達せし時、其の職を解かれしかば、龍動ふて貧しき生活を送りぬたり。さればチャールズは未だ十二歳にあらざるに親戚なる一靴墨製造所に遣られたり。しかるお間もあく父と斯の親戚の間お不和生じてチャールズは生家お呼び返され、カムデン、タウンの小學校に入るを得たり。かくて三年の後、父は議院の報告係りと爲り又チャールズはグレース、インにおける一狀師のおとど雇はれたりしが、彼は自ら速記を學びて一千八百二十八年にはドクターズ、コンモンにお聘せらるゝに至れりけり。それより二年の間、法學お身を委ね、十九歳の時遂に父お繼いで議院の吏とありぬ。さて一千八百三十一年より三十六年の間には順次、“The True Sun” “The Mirror of Parliament” 及び “The Morning Chronicle” を著せり。この終りの年（一千八百三

十六年)、“Sketches by Boz”も出版され、同年又彼の有名な“Posthumous Papers of the Pickwick Club”世に出でぬ。三十七年、彼はマンローの“Miscellany”を版行せり。翌三十八年、“Oliver Twist”及び“Nicholas Nickleby”現はれ、四十年は“Master Humphrey’s Clock”を發行せしに、初號の發賣部數七萬以上より多しと云ふ。尙ほ“The Old Curiosity Shop”及“Barnaby Rudge”をも同年の著なり。四十二年亞米利加へ遊び、歸國して其の“American Notes”を書けり。翌年、“Martin Chuzzlewit”の第一篇を出し初め、又非常の成功を得たるクリスマス、カロールを著しぬ。 Dickens 此の年龍動よりデニソアへ轉じ此所にて彼の『マーチン、チャップルウソッド』を終へぬ。四十四年、彼は龍動めて一有給官吏たらんと爲せしが成功せざりき。この頃、“Daily News”を發行して主筆たりしが幾程もなく退社しき。さて四十六年には“Dombey and Son”を、四十九年には“David Copperfield”を、五十二年には“Bleak House”を、五十五年より同じ七十年には“Little Dorrit”を、

くお書きぬ。是れより先き五十年は“Household words”を、定期刊行物を發行して五十九年に及び、同年これを廢刊して、代へて“All the Year Round”を出しき。又“Hard Times”は五十四年の作にして、“Tale of Two Cities”は五十九年の作なり。一千八百六十年より翌六十一年にかけては“Great Expectations”を、六十四、五の兩年には“Our Mutual Friend”をものしぬ。さて又五十八年より七十年に渡る間、彼は引き続き英國及び米國の讀書社界に其自著を興へたり。(米國へ再遊せしは一千八百六十七年ありき。)しかるに倦怠なき其の勤勉は太く其の健康を害し其の絶筆“The Mystery of Edwin Drood”の未定稿を残してロチェスター近傍のガンドシルプレーヌへ没しぬ。時正は七十年六月。

## 自序

或意味に於て、今日は西歐文學繁昌の時代なり。外國文學の流行は祝すべきなり。然れども、一も二もなく唯新らしき報道をのみ與へ、ゴルキイ、シエンキエウイッナ等の名前ばかりを書き並ぶること、浮華輕佻の嫌ひ無しと言ふべからず。斯の如きは實に吾人を避易せしむ。故に、最近海外文壇の消息を傳ふるに共に近代の名家の、忠實にして眞摯なる紹介、記述、翻譯の方面に精進すべきなり。

思ふに、明治藝術の最も秀でたるものは小説なるべく、露伴幸田氏の作及び故一葉樋口氏の作など、後世に傳ふべき寶什ならん。而かも滑稽、諧謔等の側に於て缺くる所あり、單調の弊あ

るは惜むべし。

再び言ふ、外國文學の流行は祝すべきなり。流行其宜しきを得て我文藝の單調を破し、之れを豊富ならしめば更に祝すべきなり勇あり、信あるの士、外國文學の鼓吹に努めんかな。

三十五年初夏

草野 柴二 識

二

併言す、クリスマスカロルの翻譯、既に文學士淺野和三郎氏の手に出でたりと。予、田舎に在り、未だ其高著を得るの期を得されども、思ふに其好なる翻譯ならむ。柔にこの名譯在り、予のもの、粗惡拙劣なるも何ぞ關心するに足らんや。





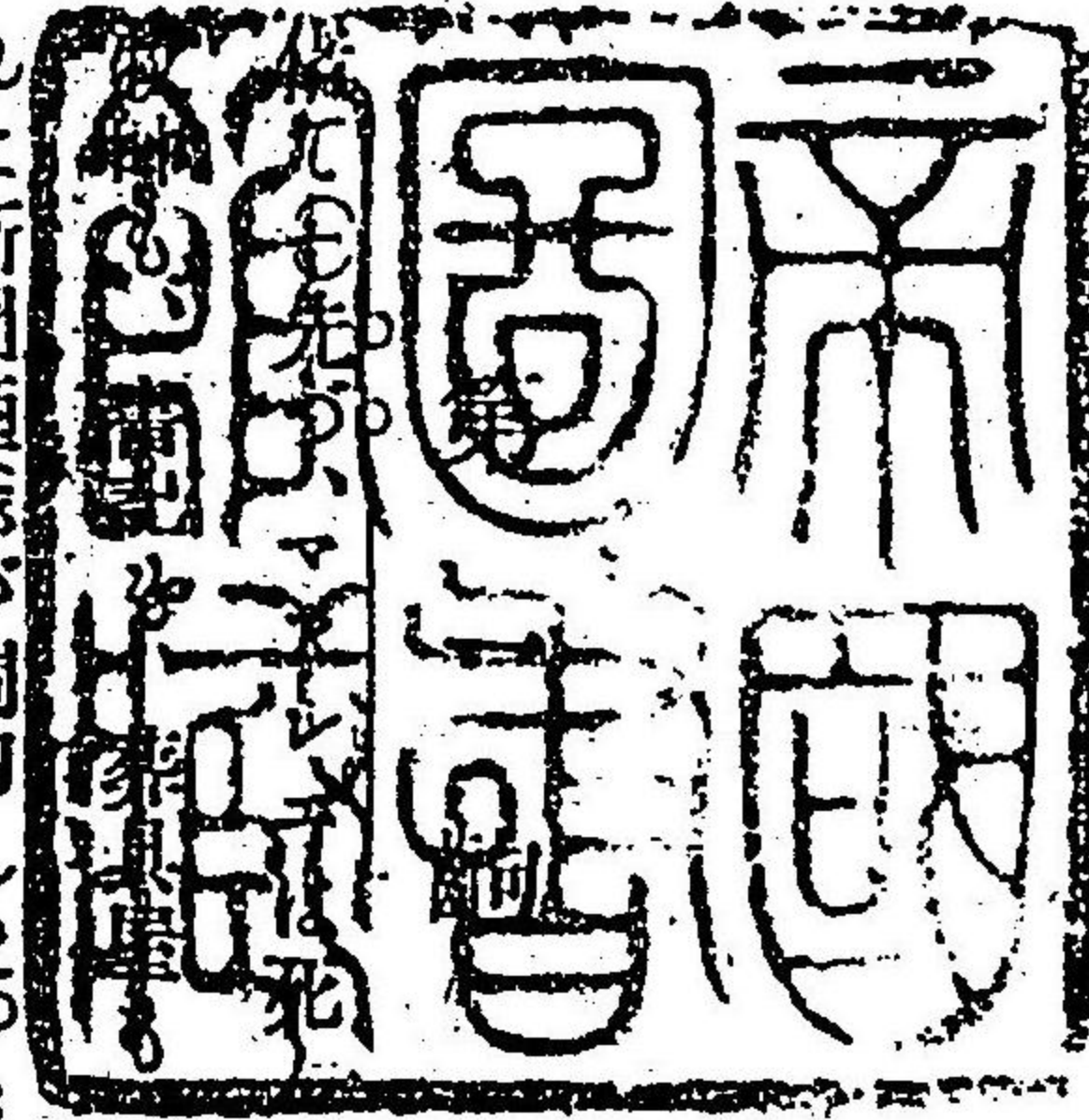


(開新堂出版) クリスマス、カロール及チヤアルス、ディケンズによる。上の日本語はヘーシにして其下の算用数字は行數なり。(1) 九一 To begin with, 第一に言ふべきことは、世の先づは少し意が弱いが其代り固點を打った。(2) 九一五 To be good upon Change, 商業上信用をよむ。(3) 九一六 To put his hand to anything, 調印する。any-thingは手形類。(4) 九一七 Door-nail, ヒキテと譯したが好い譯では無い。西洋館の入口には門錠といふ物がある。來訪者が案内を乞ふ時此の門錠を引さあげて手を放せば上のヒキテに當つて鐘然音

マアレエの幽霊

クリスマス、カロール

チャアルス、ディケンズ作  
草野 柴二 譯



マアレエの幽霊

でたつた。それは毛頭疑ひないことで、寺の喪主も衆んな其の死亡届は調印した。それには斯固陋爺が調印した。で、斯固陋爺の名前は、其の尙も好んで記名調印したものは、商業取引所も十分信用せられたのであつた。(2)(3) 老マアレエは(+)銀鈕のやうに死朽ちてゐた。

注意してれくが、著者は強ち自分の智慧で、特ふ銀鈕が磨り切れた物だから、と言ふのでは無い。自分一個では寧ろ鐵器商の棺を打ちつける釘を最も死朽ちたものと言ひたいのである。けれども祖先以來の該

を出す。米客毎に門錠を叩きつけられるので、叩かれ朽ちておる。そこで dead as a door-nail といふ。熱湯が出来て多く死に切つた義(4)  
 九一四 Country's done for 國が亡びせ(5)  
 九一五 For I don't know how many years, 此の for は how many years に續く。何年になるか知れぬほど久し(6)  
 九一六 Executor 遺言執行者。  
 Administrator 遺産管理者。Assign 財産譲受人。Residuary legatee 後継者。(7)  
 九一七 Cat up. 心を上げた。(8)  
 九一八 undoubted bargain 大儲け。(9)

十一五 「ハムレット」  
 有名なる悲劇(千六百二年)。(10)

十一五 New to the business, スクルーシの商賣を知らぬ者。(商業に不馴れなる)云ふ句(11)  
 十一六 Grindstone, 砥石。これは日本の砥石とは餘程仕掛がちがふて、一寸説明が困難であるが此文の意は、奉公人を苛酷に使ひまわす残酷薄情者なる人といふ。尚ほスイントン三の十八章に此回紙の粉を挿んだ比喩譯がある。(12)

は神聖冒すべからず、著者の穢れた手で動かすとはならぬ。そんなこととして見ろ、忽ち(5)亡國だ！そこで、マアレエは銀鈕のやうに死朽ちておつたど、語氣を入れて繰り返すのを容るして貰はう。  
 斯固陋爺は其の死を知つてゐたか。勿論！どうして知らずあられるものか。斯固陋爺とマアレエは(6)何年か知れぬ程長く組合人であつた斯固陋爺は其の唯一の(7)遺言執行者であつた、唯一の遺産管理者であつた、唯一の財産譲受人であつた、唯一の後継者であつた、唯一の朋友であつた、唯一の喪主であつた。而かも其の斯固陋爺は此の(8)御愁傷よれども動顛するおのことはなく、葬送の其の當日、立派なる商人として(9)ドカ儲けをして大祝ひをやつたのである。  
 マアレエの葬送と言へば自分は又破題の一句ふ立ち返つてくる。マアレエの死んでゐたことは毛頭疑ひ無い。是れは明瞭を覺けてもらはねばならぬ。そうでもないといふ今から物語らうとする話お何の、ヘンテツも無

か。若し芝居の幕が開く前に、(10)ハムレットは死んでたつた、と言ふことを充分知らんでは、父の亡霊が風靡さい夜陰に、たのが砦のほとりを飄然吟行うたとして、同じ年頃の他人が我が息子の恐懼心を、どうでも驚かしてくれうと風の多い、例へばセントパウルの墓場を闊ふ乗じて突つ切つて行くやらのものであらう。  
 斯固陋爺は決して老マアレエの名を塗り消さず、其の後數年は其の店の戸ふ其の儘になつてゐた、——「斯固陋爺、マアレエ商館」の商館は斯固陋爺とマアレエを二人の名で世間に知れてゐたので(11)斯固陋爺の商館を云ふことを知らぬ者は、時ふ因つて彼を斯固陋爺を呼び又時に因つてマアレエを呼んだのである。が、何れを呼ばれても彼は返答した、——どちらでも全く同じことなのであつた。  
 あゝ！併し彼奴、(12)苛い、ひどい、ひどい男であつた、斯固陋爺！引つたくりの、扭ぢ曲りの、掴みどりの、搔つ浚ひの、暴利

十一 31 External heat and cold Sc. スクルーは冷静酷薄、人情の無き男故身外、寒暑の氣候を感じない。(13)

十一 32 No falling snow Sc. 5かなる雪も蓄財に是れ餘念なきスクルーには及ばない。 Snow 人 personally した。(14)

屋の、我利く亡者であつた！ 燈石のやうに硬つてく尖ンがつてゐるが、その癖火打鎌を打ちつけても柔温かな火は出さうせもせぬ。こつそり隠れて、獨りぼつち縮かまつて後世大事ふ蓋を閉め切つてゐる牡蠣見たいな男。其の心の冷たさは老癭を凝らし頬肉を皺め、鰐の鼻をひん揉ぎ、膝の骨を削り取つた。目を赤むくれふして唇を蒼黒くした。それでもつて齒軋り聲を出して悪る狡しく喚き立てるのだ。頭にも眉も顫舞にも冷たい鐵線はりせんのやうな霜が置きわたしてゐる。始終自分持ちの極寒を背負つてゐるので、眞夏の空ふも店頭冷やしければ、クッスマスの時でも一度一分その極寒を緩めはしない。

(13) 外部の暑さ寒さも彼には何の感じも興へ得あかつた。どんな温氣も彼を暖めることは出来ず、どんな寒さも彼を凝らすことは出来あかつた。いかな風も彼の猛烈にはせてもく。いかに降りためるが目的の(14)雪でも斯固陋爺の熱心よはまるつた！ 篠を乱して降りしき

十一 3 Open to treaty 頼み受ける。(15)

十一 3 To have him to get the advantage of him (スナマーシに打ち勝つ)。(16)

十一 3 "Came down" handsome-ly to pay, give with admirable liberality (情氣なく拂ひ又興へる)。(17)

十一 12 Blind-man's dog. 西洋人は伶俐なる犬を盲人の道案内に用ゐる。(18)

十一 16 An evil eye. 意地わるい人に見られると病にかかり又運が悪くなる、この迷信があつた。うれから有難なる感化を興へる目を斯くいふに至つた。(19)

る雨もイツカナ(15)聴き容れぬ斯固陋爺はどでは無い。意地悪る天氣も彼には甲冑かぶとを脱いだぬ。唯一つ大雨、大雪、酷い雹や霰の彼に(16)打ち勝つて誇り得たことは、何時でも(17)惜し氣なく愉快ふ撒きちらすことで、これは斯固陋爺の掛けても及ばぬどころであつた。

道で出逢つたどて誰一人莞爾顔で「やあ、斯固陋爺さん、如何なさいました？ 些とお立ち寄りあすつて」を、足を止める者は嘗つて無い。乞食すら一文遣つて下さい、は頭かぶから言はぬ。學校通ひの小供でも時間を聞かうとはしない。男でも女でも何處其處への道は、と聞いたことを斯固陋爺の一生ふ一度も無い。盲者の道案内する(18)犬ですら斯固陋爺は見知つてゐると見えて、向ふから彼のくるのを見れば、我侗主をぐい／＼門路いんぐちや横丁ふ引ばりこんで「盲者の旦那、(19)不祥な目を開いてゐるより、全く見ぬかい方が、いつそ優しですわ」を言ふ風に尾を掉つてゐる。

十一—21 "Nuts" = something that gives particular pleasure (特別な愉快を與へる物) (20)  
 十一—23 Christmas eve. 十二月廿四日の夜(所謂クリスマス夜の宵祭りの時) (21)

十一—31 ruddy sneers. 赤い汚點 (燭火がキリを照して薄くほの紅く見せしめ) palpatile—that may be felt. (觸はれしめさる) (22)

十二—3 Obscuring everything. いろいろの物を黒め

蔽ふてゆく。(23)

十二—7 A sort of tank 風呂桶的の火槽 番頭(clerk)の部屋は狭く、小く暗くして陰気故かく。(24)  
 十二—7 Copying letters. 字を写す。(25)

十二—13 to part = to dismiss(別れを) 暇を出す。(26)  
 十二—14 Comforter. 長袖巻(27)  
 十二—15 A man of strong imagination, 詩文學者は想像力強大で螢の火を見ても大椿火山を思ひ出して身があつた。(28)  
 十二—17 God save you. God の前に may を入る。(29)

併し何を斯固陋爺が構ふものか！恰も其の欲するところなのだ。人情とかいふものを持つてござるお方は退いたくをさめこみながら、浮世小路の世間さまを押し分けてヌタ／＼行つてしまふのは彼も取つて博識家のいはゆる(20)「特別の大好物」であつた。

或る時のこと——一年中での祝ひ日といふ(21)クリスマスの晩、斯固陋爺は帳場に控へて忙しく勘定やつてゐた。寒い木枯らしが肌を劈いて、其の上飄の深い天氣だ。外の街上では、両手を胸のところへ支へて、敷石ふ足を磨り温めて、息を撥ませながら往來する物音が聞へる。市の大時計は今しがた三時を打つたのであるが、既に餘程寒い——けふは終日陽がさ／＼なかつたので。で、隣家の窓から、肌を迫つてくる濁つた霧の中を(22)悪る赤い朱を點つたやうに蠟燭の燃へるのが見える。霧は隙間や鍵穴から家内へ溢れこんでくる、又外では、極々狭い横丁であるに、向ふ側の家は僅か薄濛朧を見ざるばかりお濃い。暗

黒色の雲が低く下りてきて、(23)ありと有る物を蔽ひ隠すのを見るや、時候の神様が直ぐ其處で大仕掛お蒸氣を醸して、御座るかと思はれる。斯固陋爺の帳場の戸は閉いてあつた。これは番頭が向ふの陰気な、小(24)風呂桶見たいお小部屋で「(25)書き物をしてゐるのを見張るためなので。主人が抱へてゐる火鉢おは輕少な火があるばかり、併し番頭のは更に大に輕少で、ホンの石炭一塊のやう。けれども石炭箱は主人が自分の部屋に堅く保管してゐるので、つき足すことは出来ぬ。それで番頭が火斗でも持つてきたが最後、氣の毒ながら是れはどうでも(26)れ分離話しがもち上がるのであつた。それも番頭は(27)白襟巻を捲きつけて、蠟燭の燐で暖まらうとしたが、(28)無限永恒の大想像力を持つ天才で無いからそれは失敗に終つた。

「伯父さん、クリスマスお目出たう！(29)」と、愉快な聲が聞けた。これ

十二—19 Came upon. 出しぬけに  
来た。(30)  
十二—21 Bath. 不  
興、輕成を現す叫  
聲。(31)  
Humbug! hughcar  
(nonsense.)

十二—31 Come. 呼  
びかけるの語、モ  
シ。(32)  
十三—1 On the spur of the moment. 一朝の思ひつゝか  
ら、一時の感發に

よ(33) (33) Out upon  
130 away. 世人が  
クリスマスをお  
了見か分らぬ、  
輕蔑する叫聲。(3  
4)  
十三—30 A time  
for paying.....  
クリスマスには一  
年中の勘定をして  
受け廻ひをするの  
であるが捌は素貧  
乏で勘定が出来ま  
す。(35)  
十三—0 A time  
for balancing.....  
帳面を精算して取  
るべきものは受取  
り拂ふべきものは  
拂ふ時。(36)  
十三—15 pudding.  
食後に食ふ菓子。  
小麥粉に牛乳、玉子  
などを混じて造り  
熱く煮いた所に火  
酒をフリかける火  
酒が青炎を放つて  
燃ゆる所を食ふ。  
この pudding は

は斯固陋爺の甥の聲なので、(30) 不意に飛びこんできたから、これで主人は初めて気が着いたのである。

『(31) ふん、馬鹿くしい！』と、斯固陋爺が言ふ。

竊と霜どの中を馳け歩いて、この斯固陋爺の甥は總身から煙の立つほど暖たまつた。顔は美しい紅色ふなり、眼は燦然してゐる。で、息を又吐つて吐いて、

『クリスマスが馬鹿くしい！さうれ言ひのぢや無いでせう、屹度、伯父さん？』

『さうだ！クリスマスがおめでたい？何故おめでたい、貴様どんな理由が有つておめでたい？貴様、素寒貧だらう。』

甥は小氣味よく返答した、『(32) あ、何故貴方は陰氣臭い、うれぢや？どんな理由があつて恠ぎこむのです？伯父さん、貴方は大金持でせう。』

(33) 一寸小出しの宜い返事がないので斯固陋爺は又『ふん』と鼻でやつて、『馬鹿くしい』を續けた。

『伯父さん、憤怒つちやあ不可ない。』

『憤怒らんでか、斯んな没分曉漢の中ゐるて。クリスマスが目出たい！何が！(34) 馬鹿くしいクリスマス。貴様おやクリスマスはどんな時

だ？(35) 錢も無いのに勘定拂ひをせんけれやあらんと言ふだけだらう。年を一年取りあがら一時間たりとも金持よはならんと言ふことがわかるだけだらう。(36) 帳合をして見ると、此の一年十二ヶ月の間、収入

ものは鏝一文あくて、恐ろしい懸けを衝きつけられる時だ。クリスマスの有り難味味が此のほかは何がある？』

尚ほ忌々しげに伯父は續けた。『己の一存なるなら「結構なクリスマス」を口にして歩き廻る筈野郎を、(37) クリスマスの料理の中ふぶちこんで、煮からかして、胸元に(38) 狗骨木の枝を衝つ通して埋めてや

oose とはクリスマスに欠く可らざる尚ほわが正月の雑煮餅のやうなもの。(37)

十三—15 Holly, ivy, mistletoe 西洋諸國では必ずクリスマスに飾りに用ゐる。尚ほわが正月の松、ユツリ葉の如くである。(38)

十三—22 To leave none 關係するを放棄してこれ。(39)

十三—23 澤山町いことがあるだらう、あつたよ、物を嘲つて反語を云つて居る。(40)

十三—25 I dare say 多分、恐らくは。(41)

十三—26 Christ-mas among the rest. クリスマスも其の一つだ。(42)

十三—27 以下、クリスマスは基督の

なのだ、埋めてやるとも!』

『伯父さん』を、辯じかけた。すると伯父は厳しく、『いや、貴様は貴さまの流儀でクリスマスを祝へ、己は己でやる。』

『やる? だつて貴方は祝はないぢやありませんか。』

『ぢや構ふか、(39)放棄つて置け。クリスマス祝ふを(40)御前にや澤山善いことが有るだらうよ。是迄とても澤山有つたよ、喩。』

斯固陋爺の甥は熱心ふ説き出した。——

『それは別に儲かつたと言ふことはありませんが、善いことをしたかと思ふことは澤山有ると(41)思ひます。(42)クリスマスが其の一つです。(43)で、私はクリスマスが回つてきませんが、何時でも、——夫れも附屬するものが引き離されるとすれば、クリスマスはひん神聖なる名、神聖なる起源に對する尊敬は別としても、——實に結構な時だと思ひます。クリスマスは親切を盡くし、慈善を施して、人の苦痛を思ひ

誕生を祝すより起つた祭りである、此神聖な來歴があるから又相當の尊敬が付いて居る。此附屬物をクリスマスより引き放して見てもやはり結構の時である。スクリューの甥は此所に熱心にクリスマスへの尊敬を守すべきことを伯父に説いて居るが、此小説は耶穌教の博愛主義と俗語を以て巧妙滑稽に描出したものゆゑ此のところは主眼なのである。單に姉妹姉妹の情話や男女の情話を言ひ出す我小説とは雲泥の相違がある。(43)

十三—33 By one consent.....皆申し合したやうに平生は隠してゐる胸襟を充分に披いて慈善を爲し神の

やる愉快な時です。一年三百六十五日の長い間で、男も女も(44)申し合せたやうに、不斷押し匿してゐる胸を奥底なく披いて、卑賤の者も自分と同じ死出の道伴れである。卑しい者は卑しい者で別に行く路があるのでは無いと言ふ考への起るのはクリスマスの時ばかりです。それですから伯父さん、私は一文一錢の錢貨はあくとも、クリスマスは結構だと思ひました。これからもさうだらうと信ずるのです。そこで伯父さん、クリスマスはね目出たうございませう!』

例の風呂桶の中あつた番頭は覺えず拍手喝采した。が、はつて気がつくせ、此奴は(45)場所柄が悪るかつたので、いきなり火を掻きまはす。すると、燈の光宜しくせいで最後の火種を未來永々消してしまつた。『おら、もう一遍言つて見る。クリスマス祝ふがいと、(46)暇を出すぞ。』

斯固陋爺は更ふ甥の方に向き直つて、

悪運を有りがたく思ふ(44)  
 十四—30 Impropiety 不都合、不適當(45)  
 十四—11 You'll keep... 貴様がクリスマスを守るに乾度免職してやる。(46)  
 十四—15 Come! 是れは單に呼びかけるのではない、何卒入らうしやいの意。(47)  
 十四—17 He would see him... のマシメの所には damned (地獄に落つれて) が略してある。精神の語めを思入る事かぬ。Yes, indeed he did. 實際、banned を替つた。(48)  
 十四—22 the whole length. Damned as 少しも略さず其全体を言つた(49)

『貴様は餘ほで有力い演説家だ、何故國會議員よならんだらう喃。』  
 『伯父さん憤怒つちや不可ません。(44) 入らうしやいな! 明日私のとこへ一所に召上りふきて下さう。』

(45) 貴様が先づ地………たら行かうぜ斯固陋爺は言つた。實際さう言つたのである。些どの憚りもなく(46) 口に出して言ひ切つたのである。先づ貴さま(47) がドン底まで落ちたら行かうぜ言つたのである。  
 『併し、何故? 何故です?』

『何故貴様は女房を貰つた?』  
 『私、彼女に惚れましたから。』  
 『貴さま彼女に惚れたから!』

世界中で「クリスマスお目出たう」より一層も二層も馬鹿げた話があつたら(48) 是れ一つといふ風な伯父は唸り出したのであつた。さて頓て『左様なら!』

十四—61 in that extremity. 地獄に落ちる事さふ極所、此一段の意は「スクリューはたてんなどが多つても朝の家には行かぬ」(50)  
 十四—23 As if that's the whole of it. 何故(51) in love (52) Good afternoon! マシメは面倒くやへなつたので「マシメうなち」を言つて朝を追かくやへする(52)  
 十四—24 that = fall in love = marriage. (53)  
 十四—25 with all my heart, 眞底か(54)  
 十五—1 party 貴方を私を喧嘩したことは無い、よしあつても貴方が仕掛けたので私から仕掛けたとはなし

『S、うら不可ません伯父さん。貴方は私が結婚したい以前でもれ出で下すつたことはい。何故(50) それを今來ないを仰ある理由をささるんです?』  
 『(51) 左様なら!』  
 『私、何も貴方お強請はしさい、何も貴方にお願ひはしません。何故陸まじくされないいでせう。』  
 『左様なら!』  
 『貴方がさうまで堅く聴きあさらないのは私、(52) 實以て残念です。私決して貴方に(53) 喧嘩しかけた覺にはありません。併し私、クリスマスを祝さうぜ(54) 思へばこそお招きしてゐるのです。そこで私何處までも此の機嫌でクリスマスを迎へます。ですから伯父さんクリスマスお目出たう!』  
 『左様なら!』

私は喧嘩の仲間入をしたとはない。  
 In homage to, クリスマスに尊敬を表す。(55)  
 十五—8 Notwithstanding 伯父に不要想された、うれにも係はらず。ステクルーシの物は伯父は感心せぬけれど、クリスマスの夜に諷つては神に對して禮を欠く故ムシを押へて歸つたのである。否、伯父を飽くまでも感化して善人とせんとするのである。其のとは後章に詳しく書いてある。  
 (56) 十五—15 Bedlam. 癡狂院ステクルーシは世人のクリスマスを守るのを不思議に思ひこんな世の中におるより、クリスマスを守る人の居らぬ)スト

『そして又、新年ためであう!』  
 『左様なら!』  
 (56) それも係はらず、一言の腹立ち聲も上げず、甥は部屋を出て行つた。出口のせいで番頭に賀詞を述べると、寒さは震ひてはゐるが、斯固陋爺より遙かお温情な番頭は懇に挨拶を返した。これを聞きつけた斯固陋爺は諷いた。  
 『彼所も同じ間拔がある。番頭奴、一週十五志取つて、女房子があつて、それでためであうを囁つてゐやがる。あゝ、己は(57)癡狂院に入りたう。』  
 この(57)狂人は斯固陋爺の甥を送り出して、又他の二人を迎へた。見るも爽快した(58)福相の紳士で、帽を脱つて事務室の前にお立つたが、各々手は帳簿と紙片を持つてゐて、そして斯固陋爺お辞儀したのである。

ラムにでも入つてしまいたいと言ふ自分が気がちがうて居るかと思つた。(57)  
 十五—17 portly 福々し。(58)  
 十五—19 This runic = clerk.  
 (59) 十五—22 Referring to 引合せる (見)(60) Have I the pleasure..... 貴方はステクルーシさんですか、マアレエさんですか。(ト寧ろニムと挨拶) (61)  
 十五—26 We have no doubt..... 吾々はマアレエの寛大が其生残せる仲間(ステクルーシ)に因て能く代表せられることを疑はない。(62)  
 十五—31 Credent-ial 證書、寄附帳。(63)

マアレエの幽霊

人名簿を(64)見ながら一人の男、  
 『御當家は斯固陋爺、マアレエ商館さんでございますな。失禮ですが貴方は(65)斯固陋爺さんでございますか、マアレエさんでございますか。』  
 『マアレエは七年前に死みました。今夜が丁度七年ぶりでございます、斯固陋爺が答へる。  
 『(66)ね慈悲深い當今の館主さんも、いやもうそれは確かよ故のお方其儘の御氣質でいらつしやいます。』(67)寄附帳を取出す。  
 無論其の儘だ、マアレエも斯固陋爺もそれや皆心は同腹中だもの。不吉か「ね慈悲深い」を聞いて斯は澁い顔をしてゐるが、頭を震つて寄附帳を突つ返した。  
 男は鋼筆を取り上げながら、  
 『(68)一年のうちでも此の祝祭の時は、さし當つて難澁してねります



十五—32 This festive season. クリスマスは十二月廿四日から正月六日まで。(64)  
 十六—6 Common necessities 日常の必需品(衣食住)。Common comforts 一通りの安樂。(65)  
 十六—5 Prison 牢屋。Union work-house 共同授産場(貧民の)。Treadmill 磨臼(貧民の仕事場)。Poor law 貧民條令。以上皆スツルージの強忍酷罰にして貧民は是等の場所を追ひこんでしまふが好まぬことを示す。クリスマスは金を出して救助するなどは思ひもよらぬと云ふのである。(66)  
 十六—8 Under the impression that

貧民に、私共聊でも特<sup>はるごし</sup>施與を致して遣はしたいのでございませう。  
 (65) 日用品も事飲いてれる者が何千人をございまして、又さなくも普通の樂みを飲いてれます者も何萬人とございませうので、はい。』  
 『(66) 牢屋はござらんかな?』と、斯固陋爺が聞く。  
 『牢屋! — は澤山よ。』又鋼筆を下にたいた。  
 『で、共同授産場は? 相變らずやつてられますでな?』  
 『相變らず』と、答へて、『却つてやつて居りませんから、を申したいのでございませうが……。』  
 『踏磨も盛んにあ? 貧民條令もそれぢや?』  
 『はい。どちらも大層盛んに。』  
 『あ、さようでござるか。初めのお話ぢや、以上色々の物に、何か故障があつて常の通りやることもやつてたらんのかと、私心配しました。が、さう聞けばねら喜ばしう。』

云々を感じて、思ひつ。(67)  
 十六—21 To raise fund. 金を才募する。(68)

十六—23 Want is keenly felt..... クリスマスに富裕な者は飽食暖衣逸居するゆゑ貧民は一層わが飢寒を感じやう。(69)  
 十六—24 To put down 書き下す。(70)

十六—26 Anonym. 匿名。(71)  
 十六—28 That is my answer. この答へは前の行のto be left alone.(72)

『監獄も貧民條令も數萬といふ大勢には、クリスマスらしい心もちも裝飾も致させることは覺束をいと(67)存じまして、私共有志の者が寄附金(68)を募つて貧民に幾分の飲食物並びに衣服などを給與しやうと努めてれるのでございませう。で、特に今日ケ様なことを思ひ立ちましたのも、わけて只今はクリスマスのごとで、富裕の者が思ふまゝのこを致すにつけても、(69)貧民は一層難澁を感じますからで。さて貴方さまのた寄附は如何はを(70)書きこんでよろしうございませうで。』

『何でも書きこまんで。』  
 『では、(71)匿名をね望みおの?』  
 『構はんでないて貰ふ望みおの。わしの望むせをどのお尋ねだによつて、(72)それが私の返答でござる。わしはクリスマスに自分を面白うせんから、情け者を面白がらすことも出來ん。わしは今言つた

十六ー 32 Badly off.  
貧困者(73)  
十七ー a Surplus  
Population. 餘計な  
人口。スクルーシ  
の酷薄、ア、聞く  
だに戦慄せしめる  
では無いか。期う  
云ふ人が日本の政  
治家経世家には有  
りはすまい。(74)  
カク  
カク

十七ー 14 People  
run about.....暗  
くなりかける。立  
ン坊のやうな貧民  
が松明をトボして  
貴人紳士の馬車の  
前に立つて道案内  
しイクラかを買ふ  
のである。ロンド  
ン市の濃霧は有名

なものである。  
(75)  
十七ー 19 Struck  
the hours and  
quarters. 各時間  
鳴るのみならず、  
一時間中の十五分  
毎に打つ時計があ  
る。各時間で、十  
五分過ぎると鈴が  
一つ打ち、廿分  
で二つ打ち、卅分  
で三つ打ち、四十  
五分で四つ打つ。  
そして暫らくた  
いで大鐘が時間を打  
つ。此の鐘造の町  
時計は東京にも二  
三ヶ所ある。(76)  
十七ー 31 Poulter-  
ers and grocers'  
trades.....クリ  
スマスの前夜、其の  
飾り物で八百屋、  
鶏屋の店が奇麗  
に飾りつけてゐる  
様子を滑稽的に面  
白く描いてある。  
此節の描寫ロンド  
ン大市の繁盛なク

牢屋などを維持するのに金を取られておる、うれだけで十分を浪費ちや。ちやから(75)困る者は其處に行くがよいです。』  
『其所に大勢は參られませんか。尤も又其處へ行くほどから死ぬ方が優しだや皆思つてれります。』  
『死ぬ方が優しならううする方が可い。すれや(76)餘計な殺潰しが減りますの。その上.....いや、御免被らう、わしもう知らん!』  
『併した知んあざらんといふことは』と、男は追ひかけた。  
『それや私の手障ることござらん。自分自身の務をやるで十分、他人のことも關涉せんが宜しい、私のが引さらす手間をとる。左様なら、皆さん!』  
我れ等の旨意を述べ立てるのは徒爾なことぞ、明瞭見切りをつけて二人の男は引き下がつた。斯固陋爺は仕てやつたりといふ風で、例時より一層上機嫌ふ又勘定を始めた。

此の時雲霧を暗黒とはますく深くあつたので、(75)風に煽られる火把を持つた立ン坊鉢の者が馬車馬の前ふ立つて道案内せんと呼はり回つてゐる。始終ゴシック式の窓から悪猾く斯固陋爺を瞰視してゐる粗糙な古鐘の在る寺院の古い塔も見になくあつた。で、遙かの雲際で(76)時鳴鐘を十五分を打つたが、其の震動が長く後に引いて、宛かも恐ろしい寒さに齒の根をがたぐさすかのやう。いよ／＼嚴寒とあつた。本通りの横丁の隅では數人の労働者が瓦斯管を繕つてゐて、大火鉢に烈火をいけておるが、其の周りには破布を下げた乞食どもが集つて手を焙ぶりながら嬉しさうふ炎の前に目をぎよろつかしてゐる。おいてきばりを食つて獨りぼつちの水樋は、溢れる水がだしぬけに凝つて、あな恨めしやの水と變化した。店さきよ並べてある狗骨木の枝や覆盆子は窓から映す洋燈の熱ふはせ弾けてゐるし、それから其の店の光りは道行く人の蒼白い顔を真紅ふ染める(77)鴉鳥屋、荒物屋の店頭

リスマス前夜の町人、物の光景眞に目に見る様で甚だ巧妙なものである。(77)

十八—5 fnced 罰金を科した。(78)

十八—7 farrel 最上階即屋根裏の襦袢部屋。(79)

十八—11 Saint Dunstan. セントダNSTAN は鍛冶屋であつた。サタンの訪ひくるので久しく悩まされておたが或る鍛冶用の鉄火箸でサタンの鼻を挟み切つた、といふ昔話がある。(80)

十八—17 Serogee's key-hole. 誰か事務所に居るかと思ひ且つは一入好く内に眼の開けるやうに、小供がスクルージの戸の鍵穴に覗きこんだ。(81)

は華麗に飾り立てて、見る目眩めき見世物のやう、——二言目には血眼ある殺風景な「商賣」を殆んど信せられぬ。鴉鳥屋、荒物屋は燦爛たる滑稽を現した！市長閣下は其の宏壯ある官邸内に在つて、市長たるクリスマスを迎へるやうに幾十人の料理番、大膳職を下知してゐられる。そして、一小裁縫師の、この以前の月曜日お泥酔(泥酔)して途中で血の雨を降らしたため、五志の(5)科料を命ぜられた男すら、(7)部屋の中で明日の献立てに跳ね回つており、蒼ちびれの女房は赤ン坊をしよ曳いて牛肉を買ひにと突つ走つた。

いよくの霧、ますますの寒さ！——刺し通すやうな、押被ぶせるやうな、噛みつくやうな寒さ。いかな悪魔も例の焼火箸の代りよ、斯ういう寒さで、(8)セントダNSTAN といふ鍛冶の神に鼻柱を剪まれたら太聲を上げて吼え立てるのであらう。(9)短小鼻をした小兒の、——屍が犬に食はれたやうに——飢へた寒氣が蝕ひこまれ咬みつかれた

十八—22 Kuler. 製圖用の定規、是れで小供を測らうとした。(82)

十八—27 Admitted the fact. 店を開す時刻の來たと。(83)

十八—33 fair 公平。(84)

十九—2 Till be bound = I am certain. (確かにの俗語、野卑といふではないが決して雅語でもない。(85))

のが、祝ひの唱歌を唄つて二三文も貰はうと、斯固陋爺の鍵穴に舞ひこんだ。が、「旦那さんためであらう」を唄ひかけると、斯固陋爺が非常な勢ひで(8)定規を握んだので、小さい唱歌手は震ひ上つて、例の鍵穴を主人お能う似た霜を霧とに明け渡して逃げ出した。

終に帳場を閉ぢる時刻が來た。溢々斯固陋爺は座を立つたが(9)瘡癩で見てゐると、待ち構へてゐた風呂桶の中の番頭は急遽蠟燭を吹きさけして帽子を被つた。

主人、——「お前、明日は終日暇が欲しいのだらう、な？」

『はい、御都合宜しくば。』

『都合宜くは無いで、それや又(8)不公平だ。もしわしが其のためには半クラウンの給料を差し引いたら吝嗇(吝嗇)なことをしたと思ふだらう、(9)屹度。』と言はれて番頭は淋しげに笑つた。

『その癖、仕事をせん者ふわしが一日分與へても、今度はわしが酷い

十九-14 Dangling below his waist. 腰の下までタラリと下がっている。(86)  
 十九-16 Twenty times. 何も二十遍と限つたのとはなく、唯々の番頭がクリスマスの宵といふので其遊び興じた快活の様を崩したのである。(87)  
 十九-81 pelt—to move on rapidly. (88)  
 十九-81 Mind-man's buff 控遊戯(チニチアム)。(89)  
 十九-20 Tavern 旅舎兼酒店、スクリューは此處に下宿してゐるのである。(90)

目に逢つたとは思やせんのだ。』  
 夫れはそうでも一年に一度のことをと番頭が言ふぞ、  
 『十二月二十五日がくる毎に人の懐中を搔浚ふには不足を言ひ譯だ、』  
 と言ひながら大外套の鈕子を願のところまで掛けて、  
 『だがお前、どうしても終日暇が欲しいのふ相違ない。其の代り翌る朝は特別早く出てくるのだぞ。』  
 番頭と語をつがへて斯固陋爺は謔々言ひながら出て行つた。瞬く間お商館を閉ざして番頭は長い白頸巻の兩端を(86)腰の下まで垂らして、嬉々として雪遊びをする小供等の跡を蹤いてコオン、ヒルを(87)二三十遍も上下して戯れたが、これはクリスマスの宵祭りといふ嬉しさもあるである。うれから(89)捉迷戯をせうを思つて宙を(88)飛んでカムデン、タウンのわが家へ歸つたのである。  
 斯固陋爺は例の陰氣極まる(90)下宿屋で陰氣極まる夕飯を食つた。新

十九-21 Evening. 日没から暗くなる迄をイブニング。(91)  
 十九-24 Up a yard. 他の家に取り囲まれた空地。(92)  
 十九-25 Little business to be. いかにも場所不適當に見え。That one could help fancying.....作者は此處に家を駆け回る能力のある動物として話してゐる。(93)  
 十九-36 Let out 貸す。故に「貸家」の Let out house to let to S. S. (94)

二十一-4 Knocker. 門鍵(九頁七行「原書」の註を見よ)。(95)

聞紙を皆讀んでしまつてからは、(90)寝るまでの時間を貯金通帳の調べに紛らして、偕て寢所へ入つた。下宿してゐるのは、彼の死に行いた仲間のマアレエの住んでゐた一排への部屋で、(91)内庭の中のボンゼをした淋しい建家である。であるので是れは屹度、(92)此の建家が腕白盛りであつた頃、他の家仲間と隠れン坊をして、出口を失くして此所に馳けこんだものを想像するはかは無。——(93)何の必要で此所へ在るのかわからぬので。今では充分古くて充分荒れてゐる。斯固陋爺の外に誰も住む手はあくて、他の部屋は悉皆事務所(94)貸し渡してゐる。内庭は大層暗くて、何所に何の石があるまで知つてゐる。斯固陋爺すら、盲探しに手さぐりするほど。霧を霜をば家の黒い古びた門ふかゝつて、「時候の神さま」が慥ぎこんで扉の側み立つてござるかと思はるゝばかり。  
 借此の家の(95)門鍵ふは、うれが非常ふ大きくあつたといふほか少し

二十一 fancy. 想像力。スケルシの想像力に乏しいとはロンドン市の何人にも芳らぬ。錢勘定よりほか知らぬ守錢奴には想像力なきいふ詩人交響的の屬性は無論皆無。(96)

二十一の Corporation. 首府の主体(法律上から見れば首府を組成せる人民の全体) Alderman. 市長(等る區長) Livery. ロンドン府の役人(制服を着たる者) (97)

二十一 Without its undergoing... 門錠のイマレエの面を變するや何等の手續をも經ずしてイソンの間にか變じてゐた。(98)

二十一 Bad Jobs-learn a dark color. 暗く穴倉の

も變つたことは無いのは事實である。又、斯固陋爺が其所に住つてゐた間、晝夜それを見ておつたことも事實である。且つ又、斯固陋爺がいちも(96)想像力なきいふものを持たぬことは、龍動大市の何人よりも大膽な言ひ分であるが——(97)渾身銅臭の會社員、大商人も譲らぬいふことも事實である。今日の午後、七年前マアレエの死去したことを口にした以來、彼が此の仲間の男お更に考へ及ばさあかつた、こやも又御承知を願つて、斯固陋爺が戸の錠前を鍵をさしてむせ、彼の門錠は(98)何の手續をも經ず門錠では無くて——トマアレエの顔を化けてゐた。能くこれを説明する人があらば承りたす。

マアレエの顔——庭のうちにお在る他の物のやうお見透かされぬ陰影ではなくて、暗い窓の中の(99)腐つた海老のやうに周りお燐光様のものを放つてゐる。怒るでもなく狂るでもなく、有りし昔のマアレエで、幽的眼鏡を幽的顔おチョコンを載せて、斯固陋爺を目守つてゐる。

中に在る腐敗したカニ。(99)

二十一 Ghostly spectacles, イマレエは生前眼鏡をかけてゐたので斯う云ふ。

二十一 hot-air stove. ホットアアストーブの上に立上る熱した蒸氣は恰も微風の爲る様に輕微な者を揺動させる。これは暗に、マアレエの顔は冥土から來たのゆゑ其の身のまわりに陰風を持つてゐることを示す。(100)

二十一 That, and its livid color. 此のThatは目の据つて動かぬと。以下の代名詞は皆上交のface(顔)を受けぬ。(101)

二十一 Screw-bolt. (102)

二十一 Nuts. (103)

毛髪は(100)熱した空氣が輕微な物を漂はすやうお懸け立つてゐるのである。で、目は大きく開いてゐるが全く据つてゐる。(101)其様子も、蒼白い顔色で凄いのであるが併し、顔であるのに顔の何處其處のためをいふより何をも言はぬをころに其の凄さが在るやうである。

斯固陋爺が凝然と此の怪しの者お目をつけると、又それは門錠であつた。

彼は驚きはせぬ、幼いから身の毛いよ立つ恐ろしさは知らぬのである、を言つては嘘言だ。併し彼は一旦退いた手を再び鍵おかけて乱暴に扭ぢ上げ、内に入つて借て蠟燭を點じた。

が、戸を閉ざす前一寸躊躇つて立ち止まつた。そして大方マアレエの辨髪が廊下に突き出してゐて、威嚇されることを初めは思つたらしく恐々後を振り返つたのである。けれど戸の後には門錠の附いてゐる(102)螺旋(103)螺旋止ばかりで他お何の異變も無しので、(104)『ガムナー』

二十一—8 Pooh! 可笑しむに吹き出す。(104)  
 二十一—9 a hang. ぶたんを音する。(105)  
 二十一—17 Driving a coach and six .....非常に廣大な家といふのを誇張的に、六頭立の馬車を其家の階上に引きあげられる。(106)  
 二十一—18 Or through a bad Young Acts of Parliament. 英國の辯護士曰く予は近時制定せられし國會の議案を通過して六頭馬車を驅り得べし。此意は、此の法令たるはた無能薄弱にして、有力の辯護士ならば容易に其法網を潜りて逃避し得るとなり。此の法令は人民を

吹き出して(105)ばたんを閉めきつた。  
 雷のやうに家中に戸の響が響き渡つた——二階の部屋も床下の酒倉の酒樽もそれ／＼の共鳴をしたかのやうに見えた。斯固陋爺は共鳴をどみ臆を冷やす男で無いので、戸を閉め廊下を通つて二階へ上がった。蠟燭の心を剪りながら徐々(そと)と。

(106) 餘はど古びた梯子段の六頭立ちの馬車を曳き上げると言はうか、(107) 此頃新たに國會を通過した惡法網を潜り抜けると言はうか。これは餘りに漠然とした比喩であるが、(108) 自分の意は、棺桶を引く車を横にして壁の方へ軌(レール)を向け階欄の方に棺桶の扉を向けて、うれで易々と其の梯子段を引き上げられる——斯固陋爺の此の梯子段は優ふさうする廣さがある、さうしてもまだ餘地があるといふつもりである。彼が濛朧と我が前に(109)運轉棺車が進んで行くを見たのは恐らく此の爲めであらう。街路に在る瓦斯洋燈數個の光りでは餘りよく通路を照ら

束縛するものなれども更に其効力なしなり。Young is recent (近時)の意なれども亦消釋的に前文の old に照應せたり。(107)  
 二十一—6 But I mean to say.....作者は可笑しむを以てスケルージュの梯子段の非常に廣きことを誇大に言へり。此の梯子段は實に棺の幅の廣さありて道路を行く如く押し上げらるのみならず又實に棺の長さ以上の廣さなり。(108)  
 二十一—4 Locomotive, hearse, わざと大きく運轉車といひしなり、自ら可笑味あり。(109)  
 二十一—2 Dip. 鱈の油。(110)

さない、とすれば斯固陋爺の(110)燭火では餘はど暗かつたことをは想ひやられる。

それふは(111)毫も構はず彼は上つて行つた。(112)暗黒はロンドンで安價(やす)い斯固陋爺の好物だ。けれども其の重い戸を閉づる前ふ何事も無いかと部屋／＼を歩いて見たのである。(113)さうも、さうして見たいといふだけは十分例の面構へを慮(おぼ)へてゐたのだ。

居間、寢室、納戸——總て須らく其の有らざるべからざる通りである。卓の下ふは誰も居らぬ、長椅子の下にも誰も居らぬ。爐底の鐵網(かたどろ)みは小さい火が在る。匙も盆も用意してある。そして鐵網の上には粥を煮る小さい淺鍋が——斯固陋爺は風邪に罹つて頭痛がしたので。

寢臺の下にも誰も居らぬ、戸棚にも誰も居らぬ。不斷着が怪しうに壁みか／＼つてゐたが其の中ふ誰も居らぬ。納戸も常の通り。古い暖爐の避火網(ひよけ)も、古靴も、二つの魚籠(いさご)も、三本脚の洗面架(あらい)も、一本の火把(ひよけ)

二十一—26 a but-  
ton. 着る (111)  
二十一—28 Dark-  
ness is cheap. 暗黒  
(洋燈をつけず、蠟  
燭を點さず) は安  
價である。 (112)  
二十一—32 He had  
just enough.....  
若しマアレエの面  
を門鍵に見たこと  
を、全く忘れてお  
たなら斯う方々を  
見回すこともなか  
つたらうが併しそ  
うしたいと思ふだ  
けは面を覚えてお  
たのだ。 (113)  
二十一—11 double  
locked himself in  
西洋の月には手丈  
夫にするため錠を  
二個附したのであ  
る。 (114)  
二十二—24 Apostles  
putting off to sea  
.....古き和蘭の死  
にはパイプルの中  
の逸話を繪に描きあ  
り、其中に使徒が

單艇に乗りて海上  
に滑り出つる所あ  
り。此に著者が  
butter-boat と言へ  
るは此の繪中の單  
艇に和蘭諸工の描  
ける奇妙なる形を  
ける艇を可笑味をつ  
けて斯く云へるに  
て、之を實際航海  
に用ひは滑稽なる  
べし。 (115)  
二十三—1 a  
disused bell.....  
今は使用せざる鈴  
スクルーシの部屋  
にかけてあり、こ  
れは何の用に供す  
るためなりしや今  
知る可からずと雖  
も此の鈴たる此家  
の最上階の一室に  
糸もて通じあり。  
故にそれを曳けば  
鈴が鳴り出すなり  
。 (116)

も。

十分満足して戸を閉め錠を下ろした——(115)二重の錠を下ろしたが是  
れは常に無いことであつた。斯う不意撃に逢ふ心配を取り除けて、彼  
は頸巻を外づし、不斷衣を上草履と寝帽を着けて偕て粥を啜らうや火  
の前に坐したのである。

火は實に微温く衰弱いので、寒さ身を切る此様な晩おは何の多足おも  
爲らぬ。で、こんな一握みの焚き物から暖かいせいふ感じを毛筋ほと  
も引き出すよは直ぐ其傍お摺り寄つてそれに抱き着かねば徒爾であつ  
た。爐は古い物で、其の以前和蘭人が作つたもの、總じて奇怪な和蘭  
石で出来てゐて聖書の話しを繪ふした意匠。ケインもアベルも描いて  
ある、フェエロオの女もシイバの后も、裝毛袴のやうな雲に乗つて天  
下る天使もある、アブラハムも、ベルシヤザアもある、(115)又單艇の  
形をした乾酪の皿に乗つて海に浮び出す使徒も描いてある。——斯

固陋爺の心を惹く種々雑多の繪模様。而かも七年前に死ふ行いたマア  
レエの顔が古預言者の杖のやうに現はれて總ての模様を呑んでしまつ  
た！若し滑かな石が初め無地で、斯固陋爺のきれく思想を其の上  
に描き出す力があつたなら其の石毎お老マアレエの顔が現はれたので  
あらう。

『馬鹿な！』を斯固陋爺は言つて部屋を向ふまで歩いた。數戸往返して  
又腰を下した。頭を椅子お憑かせかけると(116)一つの鈴が不意と目お  
入つた、——今は使はぬが此部屋に掛けてあつて、何おしたのか分らぬ  
けれど、此の家の天井裏の一室に引いてある、其の鈴が。視てゐるう  
ちにそれが揺れ出したので、魄の動顛するばかり驚いて、奇怪お、何  
とも言はぬ恐怖を感じた。最初はそらうと揺れて音も出かいほどであ  
つたが、直ぐ鐘々と鳴り出した、家内の鈴が残らず鳴り響いてきた。  
是れは半分間か一分間であつたらうが、併し一時間のやうにも思はれ

二十三—12 Clank-  
ing noise: 鎖を引く  
音の音  
(117) さいふ音  
二十三—13 deep  
down below. スー  
ツ下の穴倉の方  
だ。(118)

二十三—26 Flame  
leaped up. 今や消  
えんとする格がバ  
チリを弾けた。  
(119)

二十三—28 Pigtail.  
今より以前には西  
洋人も支那人の如

く頭髪を長く伸ば  
し頭の所にて束ね  
たるなり。(120)  
二十三—29 The  
tassels on the latter  
bridling. 靴の房が  
逆立てるなり。今  
より四五十年前に  
は奇妙な飾りを用  
ひて今人には可笑  
しく思はる。此殆  
んど膝迄も達する  
長靴のさきにつけ  
たる房も其一つな  
り。(121)  
二十四—5 Marley  
had no howels. 足  
れは臍腸を持たぬ  
といふ文字通りの  
意味で、人情が無  
いとよ比例的の  
意味で二通りに用  
ひたり。bowels は  
heart と同義語に  
して後のハートは  
心臓とも情(ナサ  
ケ)とも用ひ(122)  
二十四—10 The  
very texture.....  
アマノコの幽霊の

たのである。鈴は鳴り出した時のやうに皆一時に鳴り止んだが、續いて深い底の方で誰か(118)例の酒倉の酒樽の上を、重い鎖を引きずつてゐるやうに(117)ツツラン／＼といふ音が聞える。するぞ斯固陋爺は兼て、幽霊の出る家には鎖を引きずる音がするを聞いたことを思ひ出した。

轟くやうな音がして窓の戸が開いた。を思ふと階下の床上に尙ほ烈しい物音が聞えて、梯子を上つてきて、蔦地に此の部屋の戸口よ来たかのやう!

『何、馬鹿か! 誰が信するものか、』とは言つたが、猶豫なく重い戸をすうツと透過して、部屋に入つて、我が目の前よ立つたときは顔色が變つてしまつた。入つてくると同時か、今や消えなんとしてゐた(116)殘燈の炎はバチリ弾けて『あゝあア、マアレエの幽霊!』と云ふやうであつたが、遂に消えた。

正しく其の顔! 寸分違はぬ其の顔!! 例の胴服、肉襦袢、長靴を着けた(120)辨髪のマアレエ。(121)靴あつけた流蘇は襟もどの辨髪とせもに逆立つてゐる、上衣の笹縁も臍頭の髪も。引き摺つてゐる鎖は軀の中はどに掛つて、長いのを尾のやうに捲きつけた。で、斯固陋爺が仔細に視るぞ、其の鎖は弗箱や、鍵や、蛇錠や、會計簿や、證書や、鋼の重い財篋で作られてゐるのであつた。そして其の軀は透明であつて、つく／＼打ち眺め、又短胴服を透かして見ると上衣の背部に在る鈕子が二つ明瞭見ゆる。

彼は屢々人が、マアレエは(122)心臓なしたといふのを聞いたのであるが、併し今までは決して信じあかつた。

否、今でも信じない。幽霊をよく／＼見通しても——自分を顔を突き合してゐても——死んだ冷たい目に見詰められてぞく／＼しても——其の頭から願ふ巻きつけた布の(123)織り目ぞへ見わけても、(此の巻き



願から願にかけて  
巻ける巾の織目さ  
へ目についたが  
(123)

二十四—g. Particular (for) (or 'to')  
a shade. 此句は著  
者 for to to shade  
とに縁懸合構なる  
諸々の意味を持た  
せられたは直覺的に  
原文を讀めば無限  
の面白味あれども  
一々其字の意義を  
理窟責に研究して  
は興味甚だ薄し。  
今英人某氏の註釋  
の「もろもろ」を記さ  
るに、particular to  
a shade なる句は  
普通 excessively  
particular の意味な  
れども亦 Shade は  
は Ghost (幽霊) の  
意あり、又 for is  
on account of, for  
the sake of 若は in  
view of the fact  
that you are の意  
味あり、然るに to

は二種の意あり  
し、particular to a  
shade については普通  
even with regard  
to の意味なれども  
亦 toward の意あり  
。ストールは人  
間にしてマアレエ  
は (ghost) (shade)  
なれば今ストール  
に you are parti-  
cular toward a  
shade と言ひては  
理窟に外るべし、  
何となれば此場合  
にては「誰である」  
を問はずして「あ  
つたか」と問へど  
口やかましく言ふ  
は ghost なればな  
り云々。要するに  
他國人には此句の  
面白味を解しがた  
し。予も我手加減  
にて可い位に「マ  
カシおきたり」  
深く原著者の名句  
を穢したるを附す  
(124)

布は以前見たことをは無かつたのである)——而かも尙信じないで我が  
五官を疑つたのだ。

『やあ、何ぞわしに用かな?』を、斯固陋爺は日頃の用心深い冷淡を調  
子で。

『澤山!』——マアレエの聲、もう疑ひあく。

『お前は誰さんか。』

『誰だつたかと尋ねるさ。』

『ちや、誰さんであつた?』と、聲を上げながら斯固陋爺は、『幽霊ゆし

ては、これや微細さ。』

幽霊ゆしては(123)口喧ましうと言はふせしたのであつたが相應しいや  
うふ斯う言ひ代へたので。

『娑婆ゆるた時分はね前さんの仲間、ゼエニツプ、マアレエでありまし  
た。』

『ね前さんは——ね前さん、腰掛けられますでな?』を疑はしく尋ね  
る。

『掛けられます。』

『それさや、さうしてな。』

斯んな臆癖の無い透き通しの者が、椅子に着くといふことを能く爲し  
得るかと怪しんで、若し爲し得ぬ場合よは其の説明を求めて、一番窘し  
めてやらうの斯固陋爺の質問であつた。けれども幽霊はそんなことを  
は慣れきつてゐるやうに爐の向ふ側へ腰を下ろした。

『た前さん、わしを幽霊とは思はん!』を、幽霊が斯固陋爺に目を注  
いだ。

『それや思へん。』

『わしが眞の幽霊をいふことはね前さんの目が何よりの證據であらう。  
まだ外へ何が要りますか。』

二十五—11 Note  
 of Gravy than of  
 grave. スケルムシ  
 は其耳目實際幽霊  
 を聞見せるに係は  
 らず剛情にも之を  
 以て我胸の不例よ  
 り起れる主観的の  
 或物なりと言へる  
 なり。彼は自慢高  
 言せんとして此に  
 Gravy (肉汁) と  
 Grave (墓) とにフ  
 るなり肉汁の如き  
 多脂の食物は胃の  
 不消化を來し従つ  
 て腦を害して主観  
 的怪物を現出す。  
 然るに眞の幽霊は  
 墓より來るものな  
 れば斯の Gravy &  
 Grave と同一種の  
 洒落を云ひたるな  
 り。(125)

『知らん。』

『何故又れ前さんは我が耳目を疑ひなされる。』

斯固陋爺——『さればな、詰らんことが耳目を惑はすもので、胃の腑  
 ふ鎖細お滞食があるぞ、連れて耳目も狂うてきて、あらぬ聲も幽霊を  
 聞く、白い布も變化と見ゆる。お前さんはわしの消化れぬ牛肉の片で  
 あらうも知れん、芥子の粉であらうも知れん、それをも生煮の馬蹄  
 菓でがあらう。何であれ、どう思ふてもれ前さんは(126) 檜葉より生  
 身ふ縁がありさうじや。』

彼は輕口を利くせいふ男でも無かつた、又此の場合に決して眞心から  
 滑稽を感じたのではない。妖怪の聲が骨髓に染み渡るやうなので、自  
 分の氣を散らして戰慄を沈めやう手段に些と浮きくせんとした。  
 —事實を言へばかうで。

二十五—20 Play  
 the very dance  
 with him 甚だしく  
 舞をされる。(126)  
 二十五—28 The  
 reason just assign  
 即ち上述の、一秒  
 間たりとも(127)  
 リした所で幽霊に  
 面するに忍びぬと  
 54 威(127)

二十六—1 To  
 swallow this.....  
 木や竹や金で出來  
 ておる楊枝を呑め  
 は胃腸を損ねて腸  
 に及ぼし即ち主観  
 的(眞ならぬ)怪  
 像を現出すと、彼  
 は云へるなり。(128)

一瞬時でも静閑した中へ、白けた光りのある据つた目を眺視てるの

は、斯固陋爺には(126) 悪魔のワキを勤めるやうに思はれたのだ。幽霊  
 の身の廻りふは冥土に吹きすすむ陰風を持つてゐたのでそれは物凄  
 いことであつた。尤も斯固陋爺自身には分らなかつたが、まるで身動き  
 もせぬのに幽霊の毛髪、笹縁、靴の流蘇が揺れ動いて、煖爐から立ち  
 上る熱した蒸氣に煽り立てられたやうなので、このとは明かである。

『お前さん、此の齒楊枝が見ゆるであ。』と斯固陋爺が言つたが、(127)  
 是れは上に述べた理由をそれから、よし一秒時でも妖怪の物凄  
 い睇視を餘所ふむけたいからで、うれで猶豫なく被せかけたのだ。

『見える』と、幽霊が答へた。

『お前さん見てはおらんが。』

『見える、うれでも。』

『あ、わしが(128) 是れを呑みこみさいすれば、わしの一生涯、全く自  
 分の脳頭で作り出した變化を躰を纏はるゝのぢや。馬鹿を、いや、た

わい無し！』

此の時妖怪は冷まじき叫びを上げ、陰気な凄い音をさせて鎖を振つたのである。斯固陋爺は眩惑して倒れぬやうにと椅子に嚙り付いた。が、此の怪しの者が、部屋の中では熱過ぎるせいふ風に例の頭ふ巻いてゐた布を取り去るといふと、下顎は胸のせころまでぶら下がつた！斯固陋爺の仰天抑もどんなであつたらう。

彼は膝を折つて合掌して、

『(129)ひやあ、あ、あ……！恐しの怨靈や、何故わしを惱ますのぢや、あ……？』

『(130)娑婆氣の多い斯固陋爺、尙ほしもわしを疑ふか。』

『疑ひは致しませぬ、確かと彼の世のれ方と相違ござりませぬ。が、何ゆゑ人魄が此の世に参りまするか、何ゆゑ私のせこへはお出でござりまするな？』

二十六—14 Mercy: 驚愕の叫聲 (129)  
二十六—16 Man of the worldly mind. 精神的の所産 (靈魂) を拒否する唯物論者 (貨物、有形物のみを信ずる人。 (130))

二十六—20 It is required of every man. 云々のことは人は皆爲さる可

らざることをなり。 (131)

二十六—22 The spirit within him... 人は單に自己の利得のみを考へず常に同胞兄弟の身の上をも思はざる可なり。 (132)  
二十六—23 If that spirit goes not... 若し人の精神が此世に在る間に他人の爲めを圖らなかつたら死して後に其靈魂安息を得ず人間界を廻り歩かねばならぬ様神様に命せられてある。 (133)

廿七—7 Laboured on. 此のイットは鎖なり。鎖をこ

マンナの幽霊

幽霊——『我が人若の魂魄が、(131)世の同胞間に立ちまぢりて、隈なく四方を旅するは(132)免れ方なき務めなり。(133)而魂魄現し世ふ、然爲さざらん其の時は、死んでの後に又再び、現れ出づべき定業あり。あら悲しや、我れは此の世を漫行うて、爲さば爲りまん事どもを、前き生にては、爲さで終りし証しを立て、罪亡しする定運ぞや。』

再び幽霊は一聲叫びを上げて、其の鎖を漂るふ見ゆる手を振つた。『鎖を掛けておるでなさらりますが、それは又如何したわけで、』とぶるくもので尋ねる。

『我は吾が前世より作りし鍵鎖を懸けたり。こは一鎖は一鎖、一尺は一尺づつ作り立てたるにて、自ら好んで帯ぶるなり、いやと吾が心から纏ふのぢや。これがね前ふ怪しいか。』

斯固陋爺はますます震ひ上つた。幽霊は追ひかけて、

『汝自ら纏へる鎖の重さを長さを知りおるか。七年以前の今宵、まッこ

しらへた即ち慾を  
湧いた。(134)

の如く重くして長かりしぞ。其の後せても(135)汝はそを作つたれば、いと恐しの鎖ぞや。』

斯固陋爺は五六十丈程もある大鐵鎖で捲きつけられてゐることを思つて床の上の我身を見回したが何も見ぬ。

『ゼエホップ殿、ゼエホップ、イヤレエ殿、もつとお話下され——どうぞ面白い話をして下され、ゼエホップ殿』を歎願する。

『何も無い。』。エヘチザア斯固陋爺、そは餘所の吾等にあらぬ他人が持つてくることぢや。話したいことも話されぬ。わしに許されたのは今束の間、何處にも留まるべからず、躊躇ふべからず、休むべからず。わしの魂婆では——聞けよ(135)帳場の外へは出でざりませ、狭き(136)兩換口を出でざりませ。さればわが前には惱ましい旅路がある。』

物を考へる時、洋袴の衣囊かたしに手を入れるのが斯固陋爺の癖であつた。

二十七 〇 My  
spirit never roved  
..... 我が存生中  
は金儲けにのみ従  
事して少しも他人  
の爲めを思はずり  
ま。(135)  
二十七—12 Money-  
changing hole 兩換  
口(郵便局の爲替  
受取口の如き)。(136)

今亡靈ゴーストの言つたことを思索するふもどうしたのであるが併しやはり俯向して、跪ひざまつてゐた。

『それは定めしお忙がしいことぞござりませう、』と丁寧ではあるが商賈的に言つた。

『忙がし—』

『死んで七年、』を考へて、『それから始終お周遊まわで?』

『始終——身も心も安からず、絶間あさ心の鬼の苛責の苦痛!』

『定めてね早い足で。』

『(137)風の翼に乗つたほど。』

『では、此の七年の間には多分の所をねまわりなれたことぞござりませう。』

是れを聞くゴースト幽霊は又もや一聲叫びを上げて、その鎖をクラランと鳴らしたのであつたが、天地も眠る深夜の寂寥にいと物凄く響き渡つて

二十八—3 Wings  
of the wind. 大速  
力。(137)

二十八—10 On a  
captive..... 俘囚  
とはメクルーシを  
指す。蓋し彼は之

を自知せざればも  
實は貪慾私利の俘  
囚となりぬたるな  
り。(138)  
二十八— Know See 此行以下  
はマアレーのモー  
ストがスケルシー  
の精神的修練なき  
を歎けるなり。ス  
ケルシー曰く、七年  
間の多日月を費し  
たらんには澤山の  
とを爲し得たりけ  
んぞ。於是モー  
ストは其妄を叱責し  
て、無限永恒に對  
して七年間の短日  
月に何等を能く  
爲し得べき(人類  
を扶持して惡事を  
驅逐するとは去る  
小日子にて到底出  
來得べき者にあら  
ず)。 Ages = 久  
しき年月。 Pass to  
eternity = 光陰が  
經過する。 the good  
= benefit. Suscep-  
tible = 受むることを

得る。 Its little  
sphere = 各人其居  
る所の境遇。 What-  
ever it may be =  
其人の境遇の何た  
るを問はず(上王  
侯より下庶民まで  
)。 Its vast means of  
usefulness = 人は  
人類のためには働け  
ば何程にても役に  
立つ資格あり。 To  
make amends = 償  
ふ。(139)  
二十八— To  
apply this. モース  
トの嚴しき叱責が  
スケルシーを自覺  
せしめて、其叱責  
は甚だ有理なり吾  
は叱責せらるべき  
理由ありと思はし  
めたる也。(140)  
二十八— A good  
man of business 金  
儲け巧みな人。 ス  
ケルシーの目より  
見れば此世では商  
賣さい上手ならば  
最上の人と思へる

安眠妨害をして警吏が告發するかも知れぬほど。』

亡鐘——『(138)十重の鎖に絡まれて、あら淺まししの罪人や！(139)斯  
の世のためお聖賢の、小歎みあらせぬ難行も、至らぬ限の無きまでお  
世を美しくう爲さんには、永恒も尙は足らざらん。まッた畏こみく  
て、御神お仕ふる人々の、上下貴賤の別ちなく、言はんは嗚乎ある勤  
行も、濟民救世の大業を、成就せんふは此の穢土を餘りに果敢なく思  
ふらん。又時去りていかばかり、後悔自責すればとて、仇に過せし一  
生を賸ひ得じと知らぬよなあ。せは言へ我もしかなりき、愚かやわれ  
も斯くなりき！』

今やげふ(140)有理を悟り初めた斯固陋爺は逡巡しながら、

『さりながらゼエコップ殿は何時も立派な(141)事業家でござつた。』

『事業ごあ！』と再び手を引き緊めて幽霊は、

『わが事業は(142)人道ありき、わが事業は世俗の安穩ありき。惠與、

哀憐、寛恕よツた忍辱、慈悲善根これ皆我が事業ありき。物の賣買商  
買は吾が事業の大海の、唯一竿に過ぎざらん。』

此の鎖こそ全く徒らの悲みの元であつたやうに腕一杯あさしあげて又  
強く床の上に投げつけた。

幽霊——『歲月巡る其の中ふる、げに堪ふまじく切なきは、斯のソッ  
スマスの時ぞかし。いかあれば我れ目を閉ぢて群る同胞を通り過ぎ、

(143)茶臼が檐に御使ひの聖者を案内したりける、慈愛は深き御星を餘  
所に見捨てて通りしか！其の御光の案内して我れの尋ねん賤の屋は無  
かりし。』

斯の調子で述べたてられて斯固陋爺は少なからず怖れて非常に震  
へ出し、

『わが世に盡きなんぞす。聞けや！』

『承りませ、が左様酷う被仰れますな、ゼエコップどの、(144)謎のやう

なり。(141)  
 二十八—24 Man-kind was my business. 人類一般の幸福を謀ることが我が事業なり。(142)  
 二十九—2 To that blessed Star. Mathew's Gospel 第二章を見よ。 To raise my eyes..... 我心を金儲けよりも高尚なると即他人の幸福を思ひ貧民を恵む等の事に向ける。耶穌はペツレハムの球杖槽の中にて誕生せしなり。(143)  
 二十九—10 Flowery 詩的に。スケルージュ如き大俗物には含糊なる詩的口調はわからぬと言ふ。(144)  
 二十九—8 A chance and hope of my procuring. 幸か(パンハシの)

が人間の運命を司る鬼神に乞ふてスケルージュのため仲裁し、自分のやうに地獄に落ちることを免かれしめる機会を得させらる望ありと。マツレーの亡魂がスケルージュのため其時と望みを得させらる也。(145)  
 三十一—7 have it over. 幽霊の来るのを一瞬で済ましてしまふ。(146)

三十一—3 Confronting him 我が身がホーストに對立したる。(147)

なこそ仰つて下さりまするな、若し。』

『お前の目おあり／＼見ゆる姿をまつて現はれた故は話すまい。わしは久しい以前より姿隠してお前の傍に居つたのぢや。』

『それは餘り氣味の好い話でも無かつたので、斯固陋爺は身震ひして額の汗を拭つてゐる。』

幽霊は追ひかけて、

『うれも亦わしの受ける罰で、なかく容易な業では無い。今宵此所に來たわけはれ前はまた私の定業を免かれる望があるゆゑ——(145)わしが膽照りでお前を救ふ時と望があるゆゑ、汝を誡めん爲あるぞ、エヘチザア。』

『何時もはや御親切に有りがたうござりまする。』

『三つの幽霊が出てくるぞ、』と言はれて斯固陋爺はハット平伏したが震へ聲で尋ねた。——

『仰せの望といふのは其のことぢや?』

『左やうぢや。』

『うれば——ならうことなら左やうな者は。』

『其の音訪を受けいでは、わしの踏んだ道を避ける望みは無い。今夜の一時を相圖に初めの幽霊を待つてくれ。』

(146)皆同時にれ出でを願つて、うれで片づけてしまふわけは行きませんであつて、』を氣をつけて見る。

『翌る夜と同じ時刻、次の幽霊を待ち受けい。さて最後の幽霊は其翌る夜の、十二の鐘を打ちやむ時ぢや。もう私を見詰めて今まで二人の交したことを、お前のためぢや、必ずせむに思ふて見い、よ。』

言ひ終つて幽霊は卓子から例の巻布を取りあげて元の様は頭に捲きつけた。是れは兩顎を縛り合せた時齒の喰ひ合つた烈しい音で斯固陋爺は知れたのである。思ひ切つて仰向くと化生の物は中腰に自分(147)

化け物のうしろが  
おぼろげに  
あつてゐた。

三十一 At every step it look... 幽霊が一步宛後へ退く毎に。(148)

向ひ合つて腕のまわりを鎖をぐるぐら捲きつけて居るのが見えた。亡霊は後しさりして斯を離れたが、(148)一步毎に窓が少し宛開いて側に行つた時には全く開き切つた。近う、と手招きするので近づいてゆく。互に二歩ばかりふなつたとき、マアレエの幽霊は手をあげて、其所にや氣をつけた。彼は立ち止まつた。

三十二 joined in the mournfull dirge. 悲歌が二頭。(149)

是れは強ち服従してゐるはなく、手をあげたかと思ふと其所等中に、何をも言はれぬ悲しい、心の鬼が責められるやうな悔、歎息をおつちやにした物音を感じて慄き怕れたもゑである。妖怪は一寸聞き耳立て、(149)其の悲しげの物音に和して、うして淋しい闇の中へ吟行ひ出た。斯固陋爺は恐ろしい物見たしで窓へ近づいて外を眺めた。

三十三 As they went as they wandered. (150)

引き切らず彼處此處に(150)吟行ひながら數知れぬ妖怪變化が悲鳴をあげてゐる。一とせれも、皆マアレエの幽霊のやうに鎖を曳いてゐて、二三の共縛りになつてゐるのは國事犯を謀つたのかも知れぬ。一として

三十一の Safe. 防火の鐵箱(安全金庫)(151)

自由の身かのは無。多分は生前斯固陋爺の親近のものであるが、或る老怪物の其の脚目も巨大なる(151)鐵の金庫をつけた、白い胴服を着たのとは餘程親しかつたのであるが、斯の老亡霊は下の戸口で見た、子供を連れだされた女を救ふことは出来ぬと言つて泣き悲しんでおる。總じて皆の憂き事は、明かに、お互同士のためを思つて世話をせんとしても兎ても其の力の及ばぬことであつた。

三十一 His glimpse of the Invisible World. マアレエの幽霊を見たとき、其去りて後、黒闇の中に飛行する澤山のゴーストを見たと言ふ。(152)

是れらのものが雲霧の中に消れたのかわれども雲霧が衆のものを蔽ふたのかわからぬが、怪物も其悲鳴もども見はなくなつた。で、彼が家に入つたときは又もどの通りの夜となつた。斯固陋爺は窓を閉ぢて、幽霊の入つた戸を檢べて見た。我が手でかけた通り二重に錠が下りてゐて、戸の栓にも別條あり。例の「馬鹿な！」を言はふとしたが言ひきらないのであつた。それで、惱まされたのか、今日の疲れでか、(152)彼の世を見たのでか、幽霊を可厭を話しし

たのでか、時のれそいのでか非常に休息を要したので、衣服も着更へず直ぐ寢床へ入つて立ち所へ眠りこけてしまつた。



第二 齣

第一の幽霊

三十二— The chimes..... four quarters. (原書十七頁十九行の註を見たまへ。)(153)

卅二— 7 An icicle. スクルーシは時計の正しさを信ぜず、何か其器械を狂はせたとと思へり。而して斯く寒き日には始終空中に晒されてゐる町の大時計にッラ、が掛つたと思ふは自然なるべし。(154)

卅二— 6 Repeater. 彈機に觸るれば何時にても其最近の時を打つ一種の目ざまし時計。例へば十一時過ぎ五分で打つ様にしてお

第一の幽霊

斯固陋爺が目を醒して寢床から窺ふと、大層暗くて、部屋の不透明な壁と透明な窓玻璃を別ちが付かぬほどである。鮎眼を光らして暗黒を視透さうとしておるとき、近所の寺の(153)十五分鐘が四つ打つたので、時鳴鐘ときなかねを打ち出すのふ耳を澄ましてゐた。非常に驚いたことには時鳴鐘が六つから七つ、七つから八つ、と正しく十二打つて打ちやんだ。十二時！斯固陋爺の寢床へ入つた時、二時を過ぎてゐたのだ。時鐘が狂つてゐる。器械に(154)氷柱つらながかとつたに相違無い。十二時！斯んな大不都合な鐘を直さんものと(155)自分の眼覺時計の彈機ばねふ手を觸れた。すると其の小さな鈴しんは十二打つて、止んだ。『何だ、己は終日いちじつをそれから其の晩まで寢通したのか！そんな筈は無



けは十一だけ打ち、又十一時半の前任意の時に打つ様にして打つは十一だけ打つ。十一時半より十二時迄には十二だけ打つ也。故に此時計めれば暗黒中にも昇降時間に近き時を知るを得。(155) 三十二— had beaten off 晝夜の間の争ひを擬人するとは古くよりあるとなり。例へば「ソロモン」の歌の中の「the shadows flee away」の如し。(156) 三十二— United States security 金銀及び時限の不確なる契約証券。近時にては如何なる舊債家も是れを全く無効なりとは言はざれども作者の時代にては近時の如く自由にはア×

い。陽ひふ何か間ちがひがあつて、是れが晝の十二時か！そんな筈は無  
s。』

とは思つたがどうも氣懸りなので、斯固陋爺は寢床から匍もひ出して窓際に探り寄つた。が、何も見ぬので餘儀なく不斷衣そでの筒袖そでで霜を拭つたのであるが、やはり少しも見ぬ。分つたことを言つては唯、相變らず非常に霧深く、著しく寒いこと、若し(156)夜が燦然きらする陽ひを打ち負かして世界を横領したなら無論人が彼方此方に馳せ回つて大喧さわ嘩まをする筈であるに、物音の氣もあゝ、といふことであつた。是れは非常な安心であつて、若し全く晝間が亡くなつたら「右金額本日より三日の後、エヘチザア斯固陋爺殿に拂ひ渡すべき證を以て此手形交附するもの也」あど、いふ證書が、まるで(157)無効むなつてしまふのである。

リカ証券を授けせ  
たり。(157)

三十三— Within  
himself 自分の心  
中。(158)

三十三— On a  
sudden suddenly.  
(159) 三三— He could  
no more go……  
メクルーシの様な  
男はとて天國  
(極樂)に行ける望  
みはなし、丁度其  
通り安眠するとは  
出来ぬから……  
(160)

向に合點が行かぬ。考へれば考へるほど分らなくなつて、考へまいや  
すれば、するほど考へられる。

「アレエの幽靈ゴーストが眞ま彼を惱いらました。能く〜(158)考へて全く夢だな、  
せ心に定めても、弾けた強い發條ぜんざいのやうに其の心が又初のところところに挑  
ね返つて「夢だつたか、では無かつたか」の同じ問題が絶えず念頭ねんとうに  
浮んでくるのであつた。

斯のやうな具合で斯固陋爺は次の十五分鐘が三つ鳴るまで横よまつて  
ゐた。するや、亡靈ゴーストは一時を相圖あひまに現はれてくると言つたことを(159)  
俄然として思ひ起したのである。其の時が過ぎる迄目を醒さめてゐやう  
と決心したのであるが、(160)極樂へ行けぬや等しくやても最早眠れる  
とでないと思へば、これは多分力の及ぶ最も可い決断であつたらう。  
この十五分間は大層長くて一再ならず、自分は知らず識らず假睡うたかして  
時を聞き外はずしたものを、ぞ思つたほど。が、終に傾聴してゐた耳みみは十

三三—The hour itself.....十五分鐘が四つ打ちしゆゑ其次は時間鐘の打つ順なり。故に今度こそ時間を知るにちがひなき大に勇んず (triumphantly) 夾して時間のはかは打たぬ、乾度時間鐘が鳴るを口走りし也。尙十七頁十九行の註を見たまへ。(161)

五分鐘は響いてきた、

『チン、カーン!』

『一つ』や斯固陋爺が、指を折りながら。

『チン、カーン!』

『二つ。』

『チン、カーン!』

『三つ——もう一つ。』

『チン、カーン!』

『四つだ、』(162)や大悦びに言つて、さて今度こそ、や言ひきらぬうち

ふ時鳴鐘は緩い、寂しい、物悲しい、滲み通るやうな一時をボウシ

——瞬く間に部屋中が明るくなつて、寢床のそばの窓掛けが

引き明けられた。

寢床のそばの窓掛が、諸君——手で引き明けられた。足の方では無い

三四—4 close to me.....今吾人は著者の此小説を手にして讀みつゝあり。されば著者と吾人とは(勿論時代も場所も非常に隔たれども)精神は密接しおるなり。(162)

三四—7 Some supernatural medium. 幽霊は世界の氣(陰風)を身に持てり。故に何か此世の物ならぬ中間物と言へるなり。(163)

三四—16 Upper members. 即ち手腕を以て。(164)

背の方でも無い。ではあくて、斯固陋爺が面を向けてゐた窓掛が引き  
あけられたのである。寢床のそばの窓掛が横に引き明けられたのであ  
つた。で、斯固陋爺は中腰姿より起き上つて見ると、自分は例の窓掛を  
引さあけた斯の世のものとも見ぬ者と顔と顔を衝き合せてゐた。

(162) 現ふ著者が諸君と相接して——著者が精神的に諸君の側に立つて  
ゐるやうな。

奇妙な姿である、——小供のやうな。併し小供で無いやうな——何か

(163) 怪しい氣を透かして見るので目先から遠退いて、それで小供らし  
い者に縮まつた年寄の姿であつた。頸のまわりも垂れて後背に届いた  
髪は白くて年のせいかとも思はれるが、併し顔よりは皺一筋なくて臉紅  
色の華美やかさは無類。腕は大層長くて筋肉厚く、手も同様に非常な握  
力があるらしい。脚も脛も、まことに柔嫩たわやかふ出來てゐて、(164) 手同様  
一糸を掛けぬ。雪白の長上衣チエニツツを着て腰のまわりも光氣美ひかりはしい煌々きらきらす

三四—20 Wintery  
enbren. 冬の記號  
即ち冬ノラキ(ヒ  
ノラキはクリスマ  
スに飾る上前にも  
如し)(165)

三十四—25 Duller  
moments. 精神の面  
白くない時、氣分  
の極く場合(166)  
三四—24 Occasion  
= 理由(原因)。(1  
67)

る帯を締めた。手には緑り滴る狗骨木の枝を持つてゐるが、不思議ふも此の(165)冬の号印ふむかへて衣服には夏の花が飾つてゐる。けれども最も不思議なのは、其の頭の冠から明煌々たる御光が映してゐることであつて、其の爲めいろいろのものが見分けられたので。そして又今は腋の下ふ入れてゐる大きな消燈器を、(166)氣分の勝れぬとき帽子ふ用ゐるのも疑ひなく此の(166)故である。

せは言へ是れとても其の最も不思議な性質では無い。せいふことは、斯固陋爺がいよく目を睜つて凝視たときに知られた。今其の帯の一方が光つたかと思ふと直ぐ他方が輝き、今輝いたところが又直ぐ黒くなるといふ風に、明確と見知る部分が絶えず揺れ動いてゐる、——今腕一本の物になつた、せ思ふうち一本足の物ふなり、直ぐ今度は二十本足の化物に變じた、かと思へば頭の無い二本足の物せあり、そして牀の無い頭ばかりの物ふ化けた。うして其の解け放れる個所は、深

い闇の中に溶けてしまつて一つの輪廓も残さぬ。斯の如く其の不思議を極めるうちに又以前其の儘の分明を、明白を姿に返るのである。

『若し、貴方が私に前以て知らせのあつた亡靈(メヒクリツト)のでござるでな?』

『ア、ア、ア』

其の聲は物柔かで優しかつた。こんな接近してゐるのに何だか遠方にゐるやうに奇妙に低い。

『何誰で、貴方は何でありますか、』と斯固陋爺が聞く。

『過ぎし昔のクリスマスの靈。』

『餘は昔の昔の。』と(168)一寸法師に目を注いで尋ねる。

『さ、れ前の過ぎてきたゞけの。』

若し誰ぞが聞いても恐らく其のわけは話し得まいが併し斯固陋爺は、帽子を被つたこの幽霊(オビシタ)を見たい特別の望みがあつた。そこで被ぶるやうふせ願つたのである。

三十五—14 Stature  
= 背丈。(168)

三十五—22 Whose  
passions made this  
cap. キヤンハは前  
に於ける例のextinguisher(消燈器)なり。これは世人の「慾」にたとへたるものにて此の「ヤ

ストが世人に幸福の光明を與へんとするを利慾深き者共が自分一個の利慾を計りて他の幸福を奪ふと言ふ。(169)

三五—31 A night of unbroken rest... 夜中にユーストに驚はれるなどのことなく安眠させられる方が其目的 (wellfare) の一層好からう。(170) 三五—35 Could not help thinking. 云々を考へずにはおられなかつた。(171)

『何!』と幽霊は叫びをあげて、『お前はわしが與る光明を沙婆氣の多い手でもう消さうと思ふのか。(168) 斯の帽子は、世間の慾を濁く者どもが拵らへて長年旅をするうち始終わしの額眞深お被らせる。れ前も其の一人であるお、まだ飽き足らんさうな!』

斯固陋爺は恭しく亡霊を立腹せしめる意志——故意お亡霊に被らせて頭を抑へやうせいふ意志を一生涯棄てんを誓つた。それから、何の用事ばしあつて此所お現はれたかと大胆に聞いた。

『それ前のためを思つて。』

それはまことに辱まし、とは言つたが、(170)併し一夜の安眠を與へらるる方が其の旨意おは一層好かりさうなものや(171)思はざるを得なかつた。幽霊は其の心を見抜いたお相違ない、直ぐ、

『ではれ前の後悔遷善のため。——可い!』と言つて丈夫な手を伸して柔かに斯固陋爺の腕を攫かんだ。

『起て、そしてわしと一所に來い。』

斯固陋爺おは徒爾である——天氣合ひを時刻が徒歩さするに相應しく無い、寢床の中の方が暖かであつて、檢温器は氷結点以下遙に下つてゐる、自分は唯上草履を不斷衣と寐帽ばかりの薄着だ、そして折も折(172)風邪を引いてゐるから、おと辯解しても。女の手で握られたやうに柔らかにではあるが抗がふべきで無いので、立ち上つた。けれども亡霊が窓の方へ行くのを見て其の上衣を握かんで懇願した。

『わしは人間であります、輾けるかせな。』

『此のどころへ一寸わしお觸はらせるが可い、』と幽霊は我が胸お手を置いて、『どうすればお前も虚空を歩まれる。』

(173)斯う言つたとき二人は窓壁を透過して双方が野原の開けた田舎道に立つてゐたのである。首府は全く掻き消れてしまつて其の痕跡もない。それとともお夜の闇も霧も消れて、澄んだ寒い冬の日で、地上に

三十六—30 A cold upon him 風邪をひさうなる。(171)

三十六—19 是より以下はスクリーンが其幼年時代の有様を幽霊に見せられるなり。(172)

三十六—25 Good Heaven 二 傳を善くを現はす掛け聲。(173)

三十六—29 Instantaneous = moment. (174)

三七一—4 a dimple. ノキデモノ。小供の面にはよくノキデモノあるものなり。(175)

雪が積つてゐる。

斯固陋爺は自分のまわりを見回はして手を拍つて驚みた。——『(173)

や！わしは此處で育つたのだ。子供であつた、此所で！』

幽霊は優しい目で斯固陋爺を見た。觸はつたのは柔かに軽く且つ(174)

一瞬時であつたが、尙ほ老人の感じがした。空中に浮ぶ種々雑多な香

ひに氣がついて見ると、久しく／＼忘れてゐた種々雑多の思ひ、望み、

喜び、それから心配が其の香に含まれてゐるのである。

『お前唇が顫ひてゐる。そして頬の上の物は何だ？』

斯固陋爺は例にあくつかへ乍ら是れは(175)小瘡と呟いた。そして何處

へなり案内して(176)靈に頼んだ。

『お前道を思ひ出した？』

『思ひ出しましたをも、目隠ししても歩けます、』發挑んで大聲を出す。

『どう幾年もの間忘れもつてゐたのは奇妙だ。歩きませう。』

三七一—6 Gigs = 二 駟馬車。Carts = 貨車。(176)

三七一—9 The crisp air. 冬の寒さナリ／＼する空氣。(177)

三七一—3 Why was he rejoiced..... 以下八行は原書十三頁のスクリーン自身口にせし悪語を繰り返して作者が彼の脂をしぼるなり。(178)

三七一—8 Cross-road and by-ways. 横道小道。(179)

斯固陋爺は或る小さい街を其處の橋や寺や、蛭つてゐる小川の流れが

遙かふ見わたまで、門や樹木をうれ／＼記憶から呼び起しながら一所

ふ歩を運んだ。毛深い小馬が丁度こちららふと、／＼と駈けてきたが、其

の背の上の小供は、百姓の曳いて行く(176)駟馬の車の上の小供を呼ば

はつてゐる。此の小供等は何れも大御機嫌であつて、互ひに大聲を立

てるので、廣い原も娛しい音樂で充ち／＼して、(177)ちよ／＼した

空が微笑んでゐるやう。亡靈は口を利いて、

『是れは衆んを唯、過が去り行いたものと影法師だ。むかふでは私した

ちを知つてはゐるさ。』

莞爾顔の旅人がやつてきた。近づいて見ると何れも斯固陋爺の知り人

で、それ／＼名指すことが出来た。何故彼はこの人たちに逢つたのを

真底から喜んだか。(178)何故彼は通りちがつた時、例の冷かな目を耀

かして胸を躍らしたか。何故彼は衆んが(179)町の辻や横道を曲つて

自分／＼の家も別れた時、互ひひクリスマスマスを祝ふのを聞いて大喜びしたか。斯固陋爺にクリスマスが何だ？何が！馬鹿／＼しいクリスマス！其のために斯固陋爺に何か善いことか何時か有つたか！

「學校はまるで荒れきつてはゐない。まだ一人生徒が淋しげうに、友達に棄てられて残つてゐる。」と亡霊が云ふを彼は其の小供を知つてゐると言つて啜り泣した。

二人は本道を離れて、能く記憶してゐる細徑へ入つた。そして間もなく、圓屋根の頂ふ小さい風信機の立つた、鈴の掛つてゐる、必ず黒い瓦屋根の邸にきた。(88)廣大な構へではあるが慘憺に荒れた家で、廣い部屋／＼は少しも使つて無く、壁は濕潤して苔が蒸し、窓は毀れて門は破れ朽ちてゐる。雞は圍ひの中を容態ぶつて歩いては、くっくくを鳴いて、厩屋小屋には干草が生ひ繁つてゐる。わけて家の内は、有りし昔の片影をも留めてはゐず、物凄しい廊下に入つて夥多の部屋／＼

三八一5 A large house but one of the broken fortunes  
其以前は大富家が萬端豪華を盡して立派に住みし大屋高樓なれども併し一朝破産して荒廢せし邸宅。(180)

三八一14 The place which associated itself.....恰も昔明治初年の漢學塾の如き場所ならん。嚴冬未明に衾を蹴つて起き上れば火の氣一ツなし勇

躍して起きしも少し閉口せざるを得ず。ア、寒い！(181)

三八一22 Wept to see his poor.....  
スクル少年の時唯一人取残されて(何か悪ツテでもして留置を食ひしか)泣きながら本を見ておたりし様を見て涙ろに哀を催せしなり。(82)

三八一24 Not a talent.....but fell.....  
このnot a talentのbutで打ち消すなり。是等のいかにも物凄まじき物音がスクル少年の心を和らげて流涕せしなり。此淋しき様子巧みに描かれたり。(183)

の戸の隙間から掠めて見ると、何一つ無い哀れな有様で、薄寒く駄々つ廣い。空氣が塵埃臭くて、場所は冷かみむき出されてゐて、(89)何をなく、未だ薄暗いのお蠟燭の燈光で勢ひよく跳ね起きて見ると、食ふものは何ふも無い物凄さの仲間入りしてゐるやうである、場所そのものが。

幽霊を斯固陋爺の二人は廊下を通つて家の後ろの戸口に行つた。戸は開いて、そして長い、むき出しの淋しい部屋を現はしたが、木地其儘の机、腰掛が並んでゐるので一層むき出したやうふ思はれる。一人の子供が机おすがつて微温火のそばで薄ら淋びしげに本を讀んでゐた。で、斯固陋爺は其の共同椅子に腰を下ろして、自分が斯うあり／＼した、忘れはてた、有りし其のまこの我が身を見て(90)涙を滾して泣いた。

(90)家の内の潜んだ音、天井裏で二十日鼠のさ／＼揉み合ふ音、後ろ

三九一 Why, its  
 Ali Baba: これス  
 クルーシが讀みお  
 たる「アラビヤン  
 ナイト」中の話し  
 を活現して記せし  
 なり。just like that  
 丁度今来た様だ  
 。 Serve him right  
 好い氣味だ。(1  
 84)

三九一 21 There's  
 the Parrot! 鳥は

の小暗い庭の凍りかこつた寛の滴下、葉の枯れ落ちてくよくよしてゐる川原柳の漣息、虚庫の戸の遅鈍げな揺揺をそれからべちりと一つ火の跳ねた音——などが斯固陋爺の心を和らげて涙は袖に落ち次第。  
 幽霊は斯固陋爺に觸つて讀書を餘念ない其の以前の童姿を指さした。  
 不意に外國服を着けた、不思議に明白と見ゆる男が窓の外側を這つたが、斧を腰に挿して木を積んだ驢馬の馬鞍を取つてゐる。

斯固陋爺は有頂天ふなつておらび出した。——『(185)やあ、アライ、バッド、あの正直なアライ、バッド! あゝ知つてるく。何時かクリスマスに、あすこの淋しううにしてる子供が唯ツた一人、此所を殘された時初めて丁度こんな風にしてやつて来たんだ。そしてバレンチンゼううして兄の、乱暴なオソンゼ——あゝ彼處へ行かあ! そしてあの、眠つてしまつて、ダマスカスの門で抽箱に入れられたな、誰だつて! せエから、サルタンの馬丁——あの鬼に轆がされて、あゝ頭を

「ロビンソン、クルウソウ」中の話しを現はしたり。皆むかし小學生徒として讀みし本の中の話なり。このロビンソンの話しはスイントンリダー三の中にも在り。西洋にては小供が面白がりて愛讀するものと見ゆ。(185)

倒さまふされてらあ。嬉しい! 好い氣味だ! お姫さまをお嫁にもらつて如何するんだい!』  
 斯固陋爺が斯ういふ物に關して、笑ひ出すやうな泣き出すやうな著しく非常な聲で、自己の天真を悉くさらけ出すのを聞いたとき、氣が昂揚つて眞赤な顔を見たから商賣仲間が驚いたらう、實に。  
 『(185)あ、鸚鵡! 頭んさきから蒿草のやうなもの生やして緑い翼にして黄色い尻尾して、——あすこにゐらあ! 船に乗つて島をまわつて歸つたとき、可哀さうなロビン、クルウソウつて言つたつけ、——「可哀さうなロビン、クルウソウ、何處へ行つたの、ロビン、クルウソウ?」つて。そしたらクルウソウは夢見てエたんだを思つたけど、さうぢや無かつた。鸚鵡がさう言つたんだ、ねえ。やあ、フライデーがある、小さい川をかへ命がけになつて馳けこんでらあ! ほらア! ほらア!』

俄かに調子を代へて、平生の性質とはまるで反対に『可哀さうな子供だ！』と、前身の自己を哀れがつて言つた、繰り返して言つた。

袖口で目を拭いてから、衣囊に手を入れて、身のまわりを見回しおから斯固陋爺は眩いた。――

『残念なことをした。今ちや後の祭りでは合はん。』

『どうしたのさ？』『霊が尋ねる。』

『何、詰らぬこと、何でもありません。(186) 昨宵、私のうちへ祝ひ唄を歌ふて参つた小供がござりました。何を興りたかつたのであります。』

『それぞりのとび。』

幽霊は思ひありげに微笑んで、手を振りながら『も一つのクリスマスを見せやう。』

此の語どをも斯固陋爺の前身は成長した。そして部屋も少し暗くあり一入汚くなつたのである。壁板の縁は縮小つて窓ふ龜裂が入り、漆

四十一 5 There was a boy.....先を定規 (Ruler) を取つて叩きつけんとせし小唄歌手を今や可哀相のとせしと思ひつめたリ。(186)

四十一 17 Jolly Holidays. 楽しみクリスマス休暇 (二十五日より正月の六日迄) (188)

四十一 22 A little girl. スクルーシの小妹にして彼のスクルーシの甥の母なり。スクルーシは我が妹の子を残酷に取扱ふと本書の初めにあるが如し、驚いた男ならずや。(188)

灰の片が天井から落ちて、代りお露出の條板が出た。併しどうして斯ういうものが見えて來たのか、諸君をせむに斯固陋爺も知らあかつた。が、唯、それは全く其の通りであつて、他の小供は皆、(187) 楽しいクリスマス休暇の休みお歸つて又自分一人で此所にゐただけ知つてゐたのだ。

今はもう讀書してはゐず、自棄のヤンパチに彼地此地歩いてゐる。斯固陋爺は幽霊を見てそれから悲しげに頭を振りながら心配さうよ戸口を一寸見た。

戸が開いた。其の小供よりすと年下の(188) 小娘が箭のやうに駆けてんで、兩腕を斯固陋爺の頸にまきつけて、あまた度接吻して、『兄さん』と呼びかけた。

『わたし、兄さんをお迎えにきてよ、兄さん！』と手を叩いて、笑ひ屈んで『連れて歸るの、我家よ、く、く、く！』



四十一 For good and all for ever and ever(未来永久に)。 (189)

『我家ふ、フウちゃん?』ぞ、小供が。娘の子は嬉しさをぼたくとして、

『ぬ、連れて、(189)何時までも。歸るの、死ぬまでも。あのね、お父さんはね、例時よりね、もう優しくして〜ね、我家極樂のやう。何日かね、好い晩ね、あたし寝ようとした時ね、お父さんはね、もう優しくて、兄さん我家に歸つてもね、可いのつてね何度も聞いてもね、ちつせも恐かあかつたのよ。そしてね、お父さんが、あのう、連れておいでつて。それで、兄さんを連れて歸りにね馬車でね、きたわよ。』娘の子は目を瞪つて、又續けた。

『まあ兄さん、大きくなつたわ。そして兄さんもう此所に來かいのよ。だけど、來かいでクリスマスお始終一所にゐて、そうしてね、屹度クリスマスをするの。』

『フウちゃんも大きくなつた、フウちゃん。』

四十一 此行の最初に cowman といふ印刷あり、これは全く不用の誤植ならん。次の nothing の前に (此の誤植の代り) who was を挿みて本文を解釋すべし。(190)

四十一 Master 未だ一人前の壯士をなすは少年の敬稱。(191)

四十一 Condensation. 凝縮、典下。(192)

四十一 The veriest old well... .. 井戸の底の様を寒く、凍り結ぶ。不愉快な部屋。Shaving = 共部屋に入る者を寒くでブルブルさせる。(193)

四十一 Installments. 利益の配當。原意の字を可笑味をもたせて用ひ

手を叩いて、莞爾して、頭よさわらうとしたが、娘の子はあまり小さくて届かぬので又あつこり笑つて、今度は爪立つて抱きついた。それから可愛らしく執拗く戸口の方に引ぱり初めた。(190)で、小供は少しも可厭がらずに蹠いて行つた。

廊下で『斯固陋爺(191)さんの荷物を持ち出さな、お〜』を恐ろしい聲がして校長自身が出てきた。(192)猛々しい卑下で握手の禮を行つて斯固陋爺さんの膽を冷した。それから校長は兄妹二人を、ほの暗い可厭な氣持のする冷たい濕潤した、(193)まるで古井の底といふ座敷に連れこんだが、此所には壁の地圖を掛けて窓のところの地球儀と天鉢儀を置いてあるのが寒さで凝つたやうに見える。此所へ奇妙な薄い酒と奇妙に硬い菓子を出して、此の小珍容(194)此の大珍味の(195)配當を行つたのだ。同時にお又萎びた青菜のやうな小使の一杯のソレを持たせて御者の男お遣はしたが、御者先生は、御主人の好意厚いが併し以前頂戴した

たるなつ。(194)  
 四一— Same tap  
 = same liquor = 同  
 じ飲酒。馬丁チ  
 フヤイツタほどの  
 酒はほとんど結構  
 な酒なりしか。(1  
 95)  
 四二— Always a  
 delicate creature. 即  
 ちメスレーシを連  
 むねたる妹。幽  
 霊が此女をほめて  
 物柔らかな女であ  
 ったが氣象はメラ  
 かつたと言ふなり  
 。(196)  
 四三— God for-  
 bid! = May God  
 forbid from gaining  
 (オチド。モトル)  
 (197)  
 四四— Scrooge  
 seemed uneasy. 流  
 石のメスレーシが  
 斯く言はれてキャ  
 リが惡かつたの  
 を見ゆ。(198)

四一— St. Thorough-  
 fares = 大造。(199)

四二— Bless his  
 heart! — may many  
 blessings come to  
 his heart. (a com-  
 mon colloquial ex-  
 pression of hearty  
 good-will. (200)

のと同じ(95)注管のッ、から御辞退申したいを答へた。偕て斯固陋爺  
 さんの革盤も此の時馬車の上よくとりつけられたので二人の子供は大  
 喜びで校長に暇乞して、馬車に入つて庭園の周りの徑を暢々して驅り  
 下ろした——急駛する車輪は常緑木の黒すんだ葉から眞白な六出華  
 を水烟のやうに散らして突進した。

『(96)一吹の風にも委びさうな何時も物柔らかな女であつた。が、氣象  
 は凛々としてゐた、』と幽霊が言ふ。

『さうでござりました!』を仰へつけて言つて、『御尤な仰せ、何を  
 して(97)背戻させうで、決して〜。』

『縁づいてくつたのだ。小供が有つたを思ふが。』

『二人』

『さう、た前の甥だ!』

斯固陋爺は(98)何となく氣が濟まぬやうに見たが、手短かに『左や

う、』とばかり。

二人は唯ツた今學校を後に見捨てたのであるふ、最早或る市の(100)大  
 通りおきてゐて、何せなく影のやうな馬車、車が道を争ふてゐる。そ  
 れでもつて眞實の市の喧噪叫喚がする。店々の飾りつけを見れば此所  
 も亦クリスマスと云ふのが十分知れてゐるが、今は晩方で街路に燈火  
 が見ゆる。

幽霊は、せある商家の門に立ち止まつて斯固陋爺に見知つておるかぜ  
 たづねた。

『知つておりまする! わし此家に丁稚奉公しておりましたのぢや。』

二人は入つた。大黒頭巾を被ぶつた老人の、もう二寸も背たけがあつ  
 たなら、天井に頭を打ちつけやうといふほど高脚の卓も憑つてゐるの  
 を見て斯固陋爺は氣を昂揚して叫んだ。——

『やあ、ソイツウイングの旦那だ! (200)結構な、旦那はまだだ達者だ。』

四三—4 Organ of benevolence. 骨相學上に云ふ仁愛の器官、此所の主人の好キオンの形容頗る大袈裟にして滑稽なり。(201)  
 四三—6 Yo ho, here. 原木にホウキをこいよめるは誤植。yo ho は注意を促す呼び聲、我がオイの如し。又 There も呼び聲にて少し隔りたる所より名を呼ばずに呼ぶ掛聲也。(202)  
 四三—14 Let's have the shutters up. Shutters は雨戸。西洋の雨戸は日本の如様にシキイのミヅにはめてあるにあらす、全く晝は取外つたきて店を閉す時又ハメルなり。(203)  
 四三—15 Before a man can say.....

フエジウィッグ老人は鋼筆を拵いて、七時を指してゐる時錶を見たが、手を揉んで、がふぐした胸服を直して、そして足の爪先きから(101)頭の頸間まで軀中を揺つて笑つた。それから氣持の好い、脂氣澤山な、裕福な、肥へ太つた、快暢した聲を出した。  
 『(202)ねい、これよ、エヘチザア！ デイック！』  
 今は若者となつた斯固陋爺の前身が、合丁稚を伴せて敏捷こく入つてきた。

斯固陋爺は幽霊に向つて、

『デイック、ウィルキンスでござります、確かに。うむ、さうだ、彼所におる。わしとねらい仲好しであつた、デイック。やあ〜。』

フエジウィッグ——『これよ、小僧、今夜はもう仕事をせんで。宵祭りだから、のうデイック、のうエヘチザア。』

フエジウィッグはいや、さういふは手を叩して、『(204)ちやんちやんと(203)

戸を入れなさい。』

如何して斯うも(205)やつつけたか分らぬくらゐだ、——小僧二人は戸を表に引きづり出してきて——一！二！三！——敷居の溝通に嵌めて——四！五！六！——門を通して錠を下ろして——七！

八！九！——そして競へ馬のやうに喘ぎながら駆け戻つたまでに諸君は十二まで數へることは出来なかつたであらう。

例の高脚卓子から驚くべき速さで飛び下りながらフエジウィッグは大聲をあげて、

『(206)ちあ〜小僧や、(207)邪魔の氣なものを皆片づけてしまひな。うむ、面白いな、デイック、のうエヘチザア。』

片づけるとも、フエジウィッグの旦那が指揮してござつて片づけぬものは——片づけられぬ物は何も無い。瞬く間に片づけた。何でも動かされるものは一生涯(208)隠居させられたやうに放擲こまれてしまつた。

チヤック、ロレンソンと言ふよりも、あつと短かな間に(唯速かに)俗語、語原不詳(204)  
 四三—17 Went at it=attacked it (the work to be done) as a foe to be vanquished. Togo at=ヤツクル(205)  
 四三—23 Hilliho! 嬉しく面白き時、口を衝いて出る呼聲。(206)  
 四三—25 Let's have lots of room. 妨害物を掃ひ退けよ邪まになる物を皆片づけろ (clear away)。(207)  
 四三—28 Poked off. 不買なる奴僕に暇をやる如く人を追ひ出す。此所には無生物に用ひたり、され可笑

味のあるもの。(208)  
 四四一〇 Vast substantial smile. 廣大なる實質的の笑ひ。(209)  
 四四一〇 House-maid, baker. ねずんさん。飯後男。これは次の the cook, milkman なども其衷に一種の意味を伏せて面白可笑しく書きしなり。從兄妹同士や、兄さんの親友を仲の好い娘は日本ばかりで無し。(210)  
 四四一〇 Next door but one. 一軒あつ隣りの。(211)  
 四四一〇 Away they all went. 皆踊り出した。此所の踊りは所謂 quadrille(各隊四配を以て成る跳舞)をいふものならん。

Hands=踊る人。(踊るとき手を叩き或は其方向を變ずる人々)。(212)  
 Top couple=先行の男女一組。 Inaght about=生々々。此跳舞の一段、譯者一英人の註釋を參考したれど、ハッキリとは分らず、實見せぬとて是非なし。されば譯も例の手加減なり。(此ハ手附せつは、テも踊れせし)。(212)  
 四四一〇 Pol of porter. 濃酒。ポールの大杯。(213)

四四一〇 Out of sight = altogether の俗語。全く。(214)

床上を掃いて、拭いて、洋燈の心を剪つて、焚物を爐の前へ積んで、うこで店さきが冬の夜ふ好ましい快い、暖かき、ばさ／＼した立派な舞踏室となつた。

薬師が樂譜を持つて入つてきた。例の卓子を奏樂臺として着座し、胃弱のものが大苦みするやうに奏した。フェジウィッグの女房が大きい、(210)實のある笑ひを湛はて入つてきた。華麗やかな、愛らしい三人の娘が入つてきた。其の戀の俘囚となつてゐる六人の若い衆が入つてきた。使はれてゐる若い男と若い女が衆となつてきた。(211)從兄妹同士のね餐とんと飢餓男が入つてきた。料理番の女が、其の兄の親友の牛乳屋を入つてきた。主人ケチ兵衛が碌々食ひ物を當がはぬのでは無いかを思はれてゐるね向ふの小僧が、おかみさんも癩癩玉を潰す鴿だといはれる(212)三間目の小婢の後に隠れながら入つてきた。耻かしやうに、臆面なく、閑雅に、荒つかに、押し合つたり、引ばつたりして誰も彼も

入つてきた。兎も角も、兎に角に皆々悉皆入つてきた。

男女一組のものが二十組一度に(213)踊り出した、部屋の四隅を進しつ退きつ、斜線に行きつ歸りつ、睦まじい組々がくる／＼と踊り興じた。手練の一組は何時も自ら不利い位置を占めるやうにしても、乱暴な不馴な組のものが、好い場所に踊りこんでも直ぐ其處を離れてしまふのであつたが、終ふは何の組も一夢中あつて、申し合せたやうに舞ひ集つて、一時ふ一隅にかち合つたのである。そこで主人のフェジウィッグは踊りやめる相圖は手を打ちながら『出来た／＼！』すると提琴を磨つてゐた彼の男は我がためふ特ふ備へてあつた(214)黒麥酒の大杯に、逆上せた顔を突つこんだ。けれども飲み終つて顔をあげると、卑怯にも一息つくなどのとはせず、まだ踊り手も無いのお直ぐ又磨り初めたが、それは恰も以前のわれは疲れはてて戸板で撥がれ歸つて、今の我れが以前の我れを(215)全く勝ちこすか、さもなくば斃れて後止

四四—32 A brand-  
new man—a quite  
new man. (215)  
四五—1 Forfeit.  
ひつけたるを罰を云  
ひつける遊戯(勝  
負事)(216)  
四五—7 The sort  
of man &c. 此提琴  
彈き(と言つても  
勿論素人なり)は  
實に斯道の天才に  
して常に踊り手の  
希望する如く彈き  
たり、たゞ此座  
に讀者や作者あり  
とするも適當なる  
注意を與ふるの餘  
地なからん(217)  
四五—8 Struck up  
(began to play)  
"Sir Roger de Co-  
verley." (a certain  
piece of music  
adapted for what is  
called a "country  
dance.") (218)  
四五—9 Who  
would dance, &c. 踊  
らんと思ふ(ばか

り)實は踊り得ざ  
る)者にて其くせ  
踊りの第一着たる  
足並すちヤンメ者  
。(219)  
四五—5 Cursey  
(會釋する事)。(2  
20)  
cork-screw(回轉す  
る事)。(221)  
needle(針穴に糸  
を通す如くにクダ  
ル事)。(221)  
四五—27 "Cut"飛  
ぶ、跳ねる(舞蹈の  
術語)。(222)  
四五—28 Domestic  
ball. 一家(内輪)の  
舞蹈會。Broke up  
(散會した)。(223)

さうの決心した、(215)生れ代つた男のやう。

尙ほさまざまの舞踊があり(216)勝負事があつた。菓子がありニイグス  
「飲料」が有つた。炙冷し肉の大塊があり煮冷し肉の大塊があつた。ミ  
ンスパイ「肉入菓子」があり麥酒が澤山在つたのである。けれども當夜

第一の高興は其の煮炙の肉の後で、例の提琴師が(此奴巧い蓄生！—  
—(217)それはもう呑みこんだもので、諸君や著者に口を開かさうぞ

もしないのだよ。)(218)サア、ロウジャア、デカバリの一曲を弾き出した  
のに初まつたのである。するとフェジウィッグ夫婦が音頭取よなつてし

やしやり出たが、是れは肥太つた老夫婦は餘ほどの大役であつた—  
—二十四五組の男女が(219)怪しげな足並で踊り狂はふと思つて容易

く言ふことを聴かぬので。  
併し若し彼等が二倍多くも—あ、四倍と言はふ—フェジウィッグ

は其の好敵手であつたらう。そして其の女房も又さうであつた。女房

は其の語のあらゆる意味で其の組になる價值があつた。と言つても十

分を讀めやうであければ讀め語を教へ給へ、採用するから。眞の火花  
がフェジウィッグの後脛から散るやうに見えて、動かす毎に衛星のやう

に燦めく。此の次ぎは如何なるかぜいふことでは如何ある時でも豫言出  
來ぬので、フェジウィッグ夫婦が踊り狂つて、兩手を握りあつて進み退き、

辭儀し(220)會釋し、(221)くるくるくる、くるくると回つてそ  
して又もとのせこへ歸つたせきにフェジウィッグは(222)跳ね上つた—

足を上げるのが瞬く間の早業で、それで踏躑つかずに又立ち止まつた  
ほど巧みふ跳ねた。

時計が十一時を打つたせき此の(223)家内の舞踏會はハチたのであるが  
フェジウィッグ夫婦は出口の両側に立つてお何、何吉が出て行くのふ一

々挨拶して一々クリスマスの祝儀を述べた。衆歸つてしまつて小僧二  
人となつたとき、やはり夫婦はそうしたのである。是れで笑ひさゝめ

きが消ぬると此の小僧達は店の後ろの勘定場の蔭へ入つて寝たのである。

四六一 His form  
of self 即ちデイト  
とでもにフエシウ  
イグ方に下雅せし  
時のスタイルジ  
(224)  
四六一 I turned  
from them 此のセ  
ムはスタイルジを  
隠蔽なり。

此の間始終斯固陋爺は失神したものとやうふしてゐた。魂は其の場の景色へ埋没つて、そしてわが前身と融けあつたのである。斯固陋爺はいろいろの物を認め、いろいろの物を思ひ出し、いろいろの物を興がつて不思議なほそ心を動かされた。(225) 自己の前身とデイトが寝仕度にかゝつて、其の活き／＼しい顔が自分等二人を離れた其の間際までは、クリスマスの靈のこせを忘れてゐたが、気がついて見れば例の御光をあり／＼と頭から注ぎながら我れを見つめてゐたのである。

『些細なこせが婦人小兒を大喜びさす物だ。』

『些細!』と斯固陋爺が返した。

幽霊は二人の小僧が胸を披いてフエシウイグを讀めちぎるのを、まゝ聴け、と手真似で知らせて、

四六一 28 Mortal  
money 人間の錢

『わゝ、さうでは無いか。フエシウイグはね前たち人間の重寶がる金をホンの僅かばかり——きつと二三圓だ——費つたのだ。それが斯う讀め立てられるほど澤山かい?』

さう言はれたので斯固陋爺は躍氣となつて頑迷固陋の今の己れではあゝ、我が前身のやうに覺えず言つた。——

『どうじやありません、いや、さうぢやありません。あの人は人を仕合せふしたり不仕合せにしたりする力を持つてゐる。仕事を軽くしたり重くしたり、面白く思はせたり辛く思はせることを知つてゐる。その力は語氣を容顔に在るのか——増すことも減らすことも出来んほど僅かお詰らんものの中へ在る、それが如何したのだ? 一身代ほどお歡喜をさせるでは無いか!』

不意を思ふを幽霊が目端をむけてゐたので、口をつぐんだ。

『どうしたと云ふのさ。』

四七一 I should  
like to seeメン  
ーシ今や番番頭に

苛酷なりしことを悔  
ひ初めたり、惡鬼  
羅刹たる此男の前  
途一道の光明あり  
(225)

四七一 Prime of  
三。壯丁、男が  
り。

四七一 22 Idol 偶像  
なれども亦善權、  
人形などの譯あり  
。スクルーシは娘  
が他の idol と云ひ  
し故他の可愛らし  
いもの即他の情状  
出來たと言ひしと  
思ひしなり。(226)

四七一 27 Even-  
handed 公平。ス  
クルーシは反語を  
つかひしなり。此  
所の譯は唯意を取  
りしのみ。文字通  
り(本文通り)には  
譯に困難なれば。  
(227)

『何も……………別々。』

『何か譯があらう、』<sup>スニクケア</sup>幽霊は聴かぬ。

『いや、いや。(225)わしは番頭に二ト言二タ言丁度今言へたらど……………  
……………それぎりのことだ。』

彼の前身は、斯固陋爺が此の望みを口ふしたせき洋燈の心を扭つた。  
すると斯固陋爺を幽霊は又野外へ並び立つてゐたのである。

『もう時が無さ、急いで。』

是れは斯固陋爺が話しかけたのでも又我目に定まる他の者に話しかけ  
たのでも無かつた。けれども其の結果は時の問は現はれて、斯固陋爺  
は再び自己の前身を——又少し年を重ねて男盛りとなつた我が前身を  
見たのである。また其の額へ後年の粗い、青い皺は見ねぬのであるが、  
何となく用心、強慾の相があるやうであつた。渴へた、貪り深いぎよ  
ろくした目が、既へ根づいた木の、傾がては枝葉滋き「慾」の蔭を落

しくるかと思はれる。

獨りでは無い。喪服を着けた美しい娘の、目へ涙の露を宿したのが、  
過去ゴーストの祝日オプクリスマスマストの幽霊が注ぎ出す例の光りに燦めいてゐる、其の傍に坐し  
てゐたので。

娘は沈着いて口を利く。——

『貴郎は知らぬことをせうと、もつせも掛け構ひはあります。』

(226)ほかの者がわたしを見かへさせたのですから、ですからそれが、  
わたしが思つたやうに、是から貴郎のお氣入るのなら、いくら、わ  
たしが悲しんだつて仕様がありません。』

『どんち者にた前を見代へたと言ふんだ?』

『黄色く光るもの。』

『世の中は(227)自分勝手に無い、公平なものだよ。貧乏はど人が辛らく  
當るものは無し、と言つて金儲けをすれば又卑賤きたない根性だと悪く言

四七一 All your other hopes. 快樂、愛情、慈悲などの如き人間天賦の希望は皆金が欲しいといふ慾にのみこまれたり也。(227)  
四八一 Even if I have grown.....  
うれば成程お前の言ふ通り己の澤山の望みは唯一の慾に引きこまれたかも知れない、がそれは即ち己が是までより利口になつた証拠だ、己が智者になつた結果は如何だ、お前は己の智恵から何か出てくると思ふか。(228)

四八一 Now that we are two &c. 己が二ツになつた心掛が違つてきた、心が一致してゐなくなつた、貴郎がケチン坊にならないう以前のやうに一致してゐなう。(229)  
四八一 Release. 結婚の約束を破談にする。

四八一 In every thing that made &c. 貴方の感情、情緒が其以前私を變じてゐた時とは

はれる。』

娘は物柔らかかに、

『貴郎はあんまり世間を恐れ過ぎます。貴郎の望みは衆ンあ、お金が無いやつてへこそ、おれ、望みに吸ひこまれたのです。(227)まだ外の、もつせ好い望みは一つ宛亡くあつて、慾といふ一番のものが貴郎の心を蝕へてしまつたのです。さうでせう?』

『さうなら如何だ?』を問ひ反して、

『(228)己が一層らしく爲つたのあら、それが如何した? 己はお前も心變りはしない。』

娘は横に顔を振る。

『己が變つたか。』

『貴郎とわたしの約束事は昨日やけふのことぢやござりませんよ。其の時は貴郎もわたしも饑々してゐたんですが、何時か好い時のくるのを

待つて、辛棒強く共稼ぎして、そしてお金もございやう、夫れ迄はイヤ

くしますまいを申したのぢやござりませんか。心變りしましたとも

貴郎は。其の時は貴郎こんな方ではありませんでした。』

『己は子供だつたんだ、』を堪らへされず男は言ふ。

『貴郎が斯うで無かつたことは御自分でわわかりでせう。わたしは變らあう。(229)お互ゝ氣が合つてたをさ末を掛けて娛しんだことも、今では心が違ふから可厭なことをばかりです。どんなにかわたしが此の事を思つたといふことをは申しません。思つたのですから夫れでもう澤山。離縁されたつて可いわ。』

『何日が日に離縁しやうとした己が?』

『口でれ言ひあすつたのぢやありません、い、さうぢや無い。』

『それぢや何で?』

『氣が變つたので、心が變つたので、ほかのことで知れます。それを仕



大違ひになつたから其變化が即ち此離縁の訴訟を起させるのです。

四八—31 In spite of himself. アンナ人でも、スクール

シの様な男でも、  
四八—32 You think not. 今は己がお前を可愛がるうとせぬと思ふが、併しそれは誤解だ。スクールは言ひたかつたの也併し娘の誤解でないとは知れてゐる故流石のスクールにもこんな大ウソを言ひ得ざりき。(230)

四九—1 Heaven knows. これは先行の文句に接続するなり先行の一行はこのknowsのチ

ブセクトなる noun-clause に入つて解すべし。 When I learned No. 4 丁

度私が貴方に申したを信ずるのは可厭なのだが併し其れが眞實なとは私でも——そんなことは決して申し度ない私でも言はずには居られぬ程眞實です。其眞實なとは到底否定出来ずと女が云ふ也。

四九—10 With a full heart, for the love &c. 義理人情を没却した今の貴郎に愛も未練も無いが、併し其以前の(金に心を奪はれぬ前の)貴方がいさしいから以前の貴方に私は一身を貢獻して眞底から (with a full heart) 今の貴郎と縁を断ります。(231)

遂げやうせつて貴郎はほかに可愛い物をお拵へなのです。貴郎の心はわたしを可愛いて思つて下すつた時ではまるで違つてますから、其の氣變りが貴郎が切れやうと思つていらつしやる証據です。』

娘は、優しくではあるが凝乎と男の顔を見詰めて續けた。——

『さうであいなら、貴郎！ 貴郎わたしを捨てないで可愛く思つて下さいますか。いゝね、さうして！』

いくら斯のやうな男でも、是れは尤もであるから降参しやうとした。けれど苦しさうふして、

『(230) ね前、さう思ふか、』と。

『わたしだつて、外ふ考へ様があるなら斯なこと考へたくはありません、ありませんとも。そのわたしでも一旦さうと知つたら、寧ても思ひかへすことは出来ません、さうして！ けれども貴郎が何日自由の身におかんなすつても、持参金のあい女をお貰ひなさると私でも思へますか？——よし、どんなに思つていらつしやる女でも、何でも皆んお慾得づくでなさる貴郎が。夫れをも其の女をた貰ひなすつて、若し一寸の間でも、貴郎の例の虎の巻に外づれたことをなすつたら、わたし、貴郎が屹度後悔なさると思はないでせうか。それはわたし思ひます、さう思つて………。ですからわたし、以前の貴郎を思つてますから、其の以前の貴郎ふ(231) 私の眞心を捧げて貴郎を切れやうと存じます。』

男が口を利かうせしかけた時、女は横をむいて又、

『貴郎は此の事をお悔みなさるかも知れませんが、——是れ迄のことを思ふと何だか悔んで戴きたいやうな氣もします。けれども夫れは極々ほんの一寸の間でございませう。さうすると貴郎は、役に立たない夢を見た、仕合せに能くさめたが喜びなすつて、もう思ひ出さうさもあるさらないでせうさ。では、た心通りに、御機嫌克くお暮しなさいまし。』

娘は座を立つて、そして離別はなれてしまつたのである。

「幽霊ゴーストの、もう何も見せて下さるゝ、我家へ連れて行つて下さるませ。わしの脂を絞つてお前さま何でね喜びなのでござります、」斯固陋爺が言ふぞ、幽霊ゴーストは大聲をあげて、

「もう一つだ！」

「いや、もう、もう！見たうござりません、もう見せて下さりますかー」けれども無慈悲な幽霊ゴーストは斯固陋爺を翼縛はがへじめとして強ひて後の出来事を見せた。

彼等は又別の舞臺面に居つた——左程大きくも立派でも無いが喜び溢るこばかりの座敷。暖かな火のそばあ美しい小娘が座つてゐる、——其の娘お向ひあつてゐる今は小清楚とした内儀風の(232)あの女を見た迄は、同じのだを斯固陋爺が思つたほど前節の娘に肖た娘が。此の部屋の擾乱は甚しく甚しくて、心動きしてゐる斯固陋爺には、數へされ

四九一〇 Until he saw her. あの女——前節のスケルシーの許嫁の娘。即ち知る此一節は彼の娘がスケルシーと縁をきりて此家に嫁入りし夥多の子供を設けて今は極めて安樂に暮らす様を描けるを。(232)

五十一 9 What would I not given for. 是れ此一座の何の苦痛もなく親子兄弟嬉々として遊び興する様か如何にも愉快なる由を斯くいふなり。(233)

五十一 10 Young brigands 少年盜賊即ち此所におる小供等が姉を取まいて衣を裂き頭髪を碎き靴を奪ひ取る故冗談に斯くいひしなり。  
五十一 10 Though I never see you. 今上此小供等の中にまだらんとの希望を述べたり。故に此に消けい的に、たとへ我此中にやぶるも此の小供等の爲せし如き亂暴狼藉の舉動は決して爲さずと戦れに讀者に云ひわけするなり。(234)

ぬほどの小供が其所ゝゐたが、其の小供等は、あの詩にある誕生日の小兒群とは肖ても肖つかず、一人のやうふしてゐる四十人の小供では無くて、一人一人が四十人のやうにしてゐるのである。であるから其の結果は嘘言のほど乱暴狼藉であつた。けれど誰一人頓着する者は無いらしい。どころか母も娘も眞底から笑ひ顔れて非常にそれを面白がつてゐたが、娘は間も無く其の仲間に交り初めて、情け容赦もなくこれらの小さい匪徒を分捕せられた。(235) 著者を此の中に入れてくれたら何でも與つちまう！——けれども(235)自分はある亂暴は決して仕はしないよ、どうして！——自分は全世界の富に替へても、あの組髪を押し潰して引き解かうとは思はない。そしてあの貴重な小好い靴！著者は、よし吾が生命を助からうとして、勿躰もかい！あれを引き抜かうとは思はない。そして、あの大胆な雞ッ兒が仕たやうふ、冗談もあの娘を抱きつくと(236)は著者には出来ないとも！そんなことをしたら天罰に

五十一 12 Torn it down. 娘の頭髪を解きまわす。そんな悪戯は著者はせずになり。  
 五十一 13 Precious little shoe. 貴重なおそろい靴。何となれば奇麗な娘の穿いてゐる故。(勿論戯れていふなり)。  
 五十一 21 Never raise a blush. 固向いた美しくしゝ目を下から自分が覗きこんでも娘に耻ぢて顔を紅めさせない様に出来るならさうしたかつた。  
 五十一 24 Licence. 特權。小兒は無垢無邪氣なもの故奇れいなる娘に遠慮會釋なく抱きつき又はいろ／＼悪戯するの特權あり、作者戯れて曰くア、予も其子供の特權ありて而かも(子供のやうに無

腕が腰のまわりに根づいて決してもう伸びぬことを思はなければならぬ。而かも——著者は白状する——實にあの紅唇にさわりたかつた、此の口を開かぬいかと尋ねたかつた、あの俯向いた目の睫毛を覗いてそれで眞紅にならせぬやうふしたかつた、あの波立つてゐる髪の毛を一本抜きたかつた——一寸でも十千万圓のね守りだ。あまり言ふと——白状しますよ——(33) 梳白小僧の特權があつて、それで其の有りがた味がわかるほど大人でありたかつたのだ。

併し、今誰だか戸を叩いてゐるものがある。そして娘は直ぐ笑い顔れた相恰と序次ない衣紋其の儘で、挑發んだ、暴れ回る一團を取りまかれて、クリスマスの贈物を背負つた男を従へて歸つてきた父を、丁度能く迎へるためふ、戸口の方へ連れ行かれたが、其の騒がしさと言つては無かつた。そうするや又不意を打たれた人足は喚き立てられ、騒ぎ立てられ、武者ぶりつかれた——椅子を踏臺にして軀に上つて、頸

感覚でなく) 其戯れの眞味を解するほど大人でありた(335) 五十一 6 The terrible announcement &c. 此所誇大なる文字をあたまた使用して讀者を驚殺する例の作者の筆法、無限の可笑みは原書を見玉へ(236) 五十一 13 Their emotion. 子供等の感情。作者此にモーションを有形有機として記す、是れ素より背理なり、背理なるが故に滑稽にして且子供等の挑撥せし様を活現す。  
 五十一 19 His own bedside. 彼れ(父)自身の爐邊。慈愛貞操の妻あり、美しく末頼もしき娘あり、而して利慾の念なければ吾身に

巻でしかと包んだ紙包みを奪合ふやら衣囊に手を衝つこむやら、頸にぶら下つて、脊中を叩き付けて、足を蹴つて、我慢しきれぬ其の懐かしさは！包物を開くと訝かしそうに覗きこんで、中を見てまあ嬉らしい——(33) 赤ん坊が飯事の鍋を口に入れた形跡が露顯した、いや確かぬ木の小皿お着けてある玩具の七面鳥を呑みこんだといふ大變な報知！此の警報は誤聞であつたと知れての大安心！歡喜、満足、有頂天！是れ等はどれも皆記さんとして記しがたいから、次第／＼に小供等も其の「感情」も座敷から出てそして一步に一段づつ二階に上つて寢床に入つて、そこで沈まつたやだけ記して置かう。

此の家の主人が娘を嘗めてしまひたいやうよ自分お憑り掛らせて、妻とせもに吾が爐ばたふ座つた時、斯固陋爺は以前より一層注意して見詰て居た。そして斯うも溫柔を、斯うも末頼もししい斯んを可憐兒の自分をお父と呼んでくれて、わが瘦せ枯れた冬の日には花咲く春と耀いた

何の苦痛なし、如此の人今此妻子と團樂の樂みを吾自身の權邊に探る。スクルージの一顧を惜しまざるも然ることなり。

五二—27 Put! お待ち。静かに。いやですよ、なまじふ意はインタマシエクシヨン。

五二—33 Quite alone in the world 此世の中にタッタ一人。あゝ、タッタ一人、これを聞いてスクルージの感如何。(238)

五二—4 They are what they are &c. 是等のものは汝の心を痛ましむるならんが、これは過去に在りし汝自らの行爲を再現するものにして決して我過失に非ず。

五二—17 Dintly connecting that etc. スクルージはユーセントの音に及びず勢力如何の源因を十分明かに知る能はされど偶然に(本能的に)唯何となく此の魔力は其冠上の光明と關係せずやと想ひたるなり。

五二—27 A parting squeeze. メンナー

なら！どつくく、思つた時は彼は實ふ目がかすんできたのであつた。微笑みながら女房の方に向き直つて良人が話しかけた。——

『ベル、わしは今日晩方れ前の昔馴染に逢つたよ。』

『誰です。』

『考へて見ろ。』

『どうしてわたしよ！』とは言つたが、『お待ちなさい、知つてますよ。』

斯固陋爺さん！』良人が笑ふと我れも笑ひながら一ト息よ言つたのである。

『斯固陋爺さんよ。わしは其所の窓下を通つた、閉めて無くて内に燈火がついてゐたから見まいと思つても見えた。あれの仲間の男が臨終らしいのだ、斯固陋爺さんが一人であつた——(238)あゝ、たしかふ世の中にひとりぼつちだ！』

斯固陋爺は弱い音を吹いた。——

『幽霊の、他所をやつて下され。』

『是れは皆過ぎ去つたもの影だといふことをはお前に話した。れ前の影——自業自得だ、わしの知つたことを無し。』

斯固陋爺は大聲を上げて、

『去らして下され！我慢し切らん。』

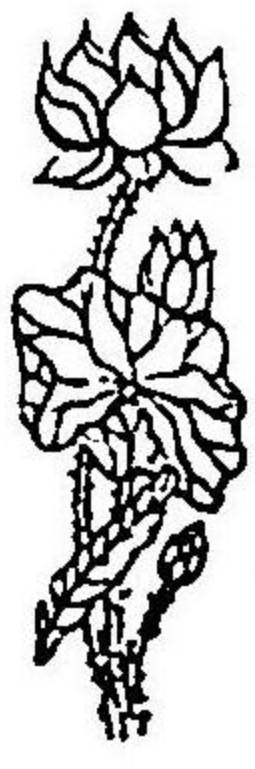
幽霊の方に向き直るを不思議にも見向いた幽霊の顔に今迄示された人々の目鼻などが在るやうに見えたので、躍氣をなつて、

『許して！連れ歸つて下され。もう壓を纏んで！』

幽霊は是れと目を見ゆる抵抗はせず、詰かけられても動ぜぬのであるが、是れをしも諍ひと云へるなら其の諍論のうちに、彼は例の御光が盛に燃え立つてゐるふ氣付いた。で、我れに及びす其の力は此のためであらうと唯何ぞは無く思つたので、消燈器を引き握んで荒々しく其の頭の上に壓しつけた。

シは其消燈器を壓し消さんとして到頭能はざるを見、之を握み毀さんと何となく試みしも是亦無効なりき。

壓しつけられて幽霊の全身は消燈器の下に隠れたが、カ一杯壓しつけられども御光は其下から地上に何妨害なき光の波で映じてゐた。気がついて見ると疲れ果て、眠たさ堪らへられず、其の上我が寢間に居たのであつた。例の被り物に最後の壓迫を呉れたが、我が手は緩み離れたのであつた。それで、寢所によろめきこむ間も惜しくグツスリを寝倒れたのである。



第三 第二の幽霊

五三—3 had no occasion. 彼は今何時なるかを他人に聞くの必要なかりき、彼は自然天然に正確に一時ならざるべからざることを知れり。五三—5 Right nick of time. 丁度適當の時。五三—16 Gentlemen of the free-and-easy sort etc. 此長たらしき一文筆は文句を頗る非常に誇張して滑稽ならしめたり。Gentlemen of the free-and-easy sort. 情けな無厭話しの好きなエラカリ男。Being acquainted with a move or two. 能く世間の事柄に経験ありて如何なると起る。Move = 動かす。 (move = strategem = 謀計) Usually equal to

第二の幽霊

恐ろしい大財聲に我れと目さめて夢心地を取り直さんと臥床の上起き上つたのであるが、斯固陋爺は時計が又一時を打たうとしておることを尋ねる必要も無かつた。ゼエコップ、マアレエの口寄せでよこされる二番目の使ひに出逢ふ特別の目的に、彼は恰好の時に目醒めたと思つた。けれども今度の幽霊は何の窓掛を引き開けるであらうと訝かり出すといふと可厭に悪寒してきたので、我が手で兩側を引き開けて、それから又横をあつて臥床のまわりを鋭く目守つてゐた。是れは幽霊の其所へ出るが最後打つて掛らうと思つて、脅かされて頭を痛めたく無かつたので。

(28) 人を陥拵む肢は少しは有りますから何時どんなことがあらうとお相手ふありますを大風呂敷を擴げる臨機應變の紳士が、お手玉を取

the time of day. 常に非常の出来事に用心ありて何事にあつたかと思ふ。By observing = by saying. That they are good for anything. 何事にも其心掛あり。Pitch and-loss = 錢を投げる小供の遊び事。Between which extremes. 錢投めそびの小なるより人殺しの大に至る迄の事。  
五三— Without venturing etc. 予はスクルーシに關して、彼は錢持戯より殺人犯迄の万事に心掛ありとは言はざれども。(239)  
五三— He was not by any means etc. スクルーシは確かにゴーストか或は然らざるも何者かを見ることと

其心掛へしてありしに何者も出現せざりき是れには全く心掛へなかりし故却つて不意案外なるに喫驚せり。(240)  
五四— Spontaneous combustion 今より百餘年前まで歐洲の或人民間に迷信ありて人体は時として殊更に點火せしめて自然燃焼を爲すものとせり。今日にては斯るを信ずるものなけれど、今スクルーシは赤き炎を見て、こは自己の体軀が自ら燃えて火炎を發するにあらぬかと思ひし也。原因不明の結果。(241)  
五四— For it is always etc. 此場合には如何に慮すべきかと思考して實際之を慮し得

ることから殺人犯までのことを先づ如何なことをも平氣でと言つて技術の廣さを示すが、此の兩極の間には疑ひも無く、いろいろの物を容れる餘程廣大な餘裕がある。斯固陋爺が全く是れほどであつたとは言へぬが、併し奇跡ある現象に關して餘ほど廣大な餘裕があつて、赤ん坊から豺までの間のことなら、左程斯固陋爺を仰天させはしあかつた、と思ひ給へと促す躊躇せぬのである。  
さて何か現はれると九分九厘まで思つてはゐたが、彼は何も現はれぬきは決して思はぬのであつた。であるので一時が打つたとき案外化生のものめくものすら出て來ぬので(240) 烈しく戰慄せざるを得ぬのであつた。五分過ぎ、十分過ぎ、十五分が経過した、それでも何者も現はれぬ。此の間始終彼は臥床に横たはつてゐたが、時計が其の時刻を知らせたとき、悪る赤い燐の心がバツと燃え出した。それは如何したのか、何であるか、その理を知ることが出來ぬので、其の燐は唯一つであるが

夥多の妖怪變化よりも氣味が悪るかつた。原因がわからぬ心もせなさにバツと燐が赤くなつた瞬間彼は(240) 何か斯う自分の軀がひとりで燃えて燐を立てるのでは無いかと思つたのである。去り乍ら斯固陋爺も終ふは諸君や著者が最初に思つた通りと思ひ初めた——(此の場合ふは如何すべき乎、又實際當然の所置を爲し得るのは常ふ其局に當らぬ人であるので) 終ふは、此の怪しの光明の根本を秘密は隣室に在るのかも知れぬ、尙ほ調べて見ると、其の隣室から映しこむのかと思ひそめた。此の考へが胸に浮かんだので彼は靜かに起き上つて、上草履を穿いて戸口の方に潛み寄つた。  
斯固陋爺が錠に手をかける途端、聞き馴れぬ聲で、入らせよと我が名を呼んで言ふ者がある。斯固陋爺は言ふ儘にしたのだ。  
自分自身の部屋である、夫れに少しも疑ひ無いが、驚くべき變化を受けてゐる。壁にも天井も、まるで森のやうな生々しい青葉が掛つて

るは常に其局に當りおらざる人也。五四— 33 Dull Perfractio etc. スクルーシは大のケチン坊にして其眼に盛んなる火をたこせしとなし。故に作者は此のストープを化石したる、火の氣皆無の物とす也。(242) 五五— 3 Turkeys, geese etc. 是等は皆クリスマススの御馳走なり、列擧して以て今やクリスマススなることを示す。前頁のロ、ラギ、寄生木、長春藤も亦此祝祭の専用物也。(243) 五五— 7 Twelfth cakes. クリスマスの初より十二日目即此祭の最後の日(正月六日)の食卓に用ゐる菓子にして、我々、ミ煎餅の如く其中に小價

の貨幣を包みこみあり、之を得たる者が其坐の王(或は女王)となる也。Punch. 本時(ボン)ス)にて砂糖、レモン汁及酒精を水に和したる飲料。(244) 五五— 11 Plenty's horn. 豊年の神ともいふべく此牛の角の形せる者を持ちてうれより無限の品物をふり出す也。 五五— 16 Dogged Struge. 頑迷固陋にして意地悪しきスクルーシ。 五五— 29 Free as its genial face etc. 是れは此祝日の靈の慈悲博愛何の情しむ所なく些の匿くす所なきを許くるなり。(245) 五六— 1 Die like of me. クリスマスとは何の様なるもの

ゐて、諸方から輝りかゞやく覆盆子がきら／＼見ゆる。狗骨木や、寄生木や、長春藤の捲いた葉が燈火を照り反へして、數知れぬ小さい鏡を其處等に撒きちらしたやう。炎々たる燭が烟筒より渦巻き上つてゐて、(246) 冷たい化石した竈か斯んなことは斯固陋爺の時ふもマアレエの時にも、將た過去幾年の冬ふも無いこぞであつた。(247) 七面鳥や、鵝鳥や、小さい獸や、鴨や、猪や、肉の太股や、豚の子や、鷹詰の長い胃袋や、ミンヌバイや、乾葡萄入の臘腸や、何升と云ふ牡蠣や、赤い煎栗や、紅い林檎や、多汁した蜜柑や、美味さうな梨や、所せきまでの(248) トウエルフス、ケエキヤ、煮た／＼したボンズの燻や、——あどが王様の御座かと思えるまで床上に積み重ねてあつて、頬の落ちさうな香氣が立ちこめて、部屋が薄暗い。さて斯の御座の上に、光るばかり恵比壽顔の大男が泰裕に座つてゐて、斯固陋爺が戸の側から覗いたとき、豊年玉手箱をもいひさうな松明を高く捧げて、其の光りを斯固陋爺に振りかけたのであつた。

「入れ、うこな男、入つて能う己を見ろ、よ」を巨怪が喚いた。恐る／＼入つて斯固陋爺は斯の巨怪の前へ額づいた、——彼は今迄の頑固な斯固陋爺では無いので。で、巨怪の眼中は涼しく、親しげの色を持つてゐたのであるが、而かも目と目を見合すのを欲しかかつた。「我は現在の祝日の靈ぢや、面を上げよ」 恭しく面を上げると、白毛の縁をつた深緑りの長衣を唯一つ着てゐる。斯の長衣は其の寛濶な胸も露はに緩く引き纏つてゐて、果敢かい飾り物で匿すのを忌み嫌ふといふやう。長衣の、豊かき取つた褶襞の下から見ゆる足も亦露はである。其の頭は其所此所に氷柱のきらめく狗骨木の花環ばかり、他ふ一の冠り物も無い。黒ずんだ灰色の毛髪は長くて、そして何の束縛せらるゝ所も無い。——(245) 其の晴れ渡つた顔、其の耀く目、其の廣げた手、其の爽かな聲、其の打解けた態度、其の喜

かを知れりや。(246)

五六—5 meanings (for I am etc.)現在の祝日の靈は今年の誕生即當歳兒也。

五六—10 More than 1800. クリスマスを擬人すれば基督出生以來著者の時までに一千八百餘年ゆゑ其家族は千八百餘人なり。(247)

五六—11 Tremendous family to provided for. これは驚くべき人数だ、之を養ふのは大抵のところではあるまい(平素錢勘定ばかりしてゐるスケルトンには尤もな愕然)。(248)

ばしい容姿を同様ふ。腰のせころふ古鞘を帯びてゐるが中身は無く、其の古鞘は錆に蝕はれてゐる。

『(246)お前、まだ己のやうな者見たことはあるまじ。』

『決して』と斯固陋爺が答へる。

『わし一家の年若の者——(己は一番年下じやから)數年以前に誕生したわしの兄たちと連れ立つたことは無からう。』

『ごぢりますとは存じませぬ、——ごぢりませぬかを存じられます。』

幽靈ゴーストの御兄弟多でいらせられますで。』

『(247)千八百人以上も。』

『是れは又魂消けるはぢ——(248)それだけを養ふは大抵のことではごぢりますまじ。』

現在の祝日の靈が立ち上つた。斯固陋爺はたどなしく、

『幽靈ゴーストの、何處へなり御望のところにへ御案内下されませ。昨夜は無理

く歩ませられました、其の効験効験が今現はれてまゐりました。今宵又、若しお前さまが何かお教へ下さりますら、それが私のためなるやうふお願い申します。』

『わしの衣服に手を掛けよ。』

言はれた通りふして、確か握つた。

狗骨木も寄生木も赤覆盆子も春長藤も七面鳥も鶉鳥も小さい獸も家雞も猪も肉も豚も鷹詰も牡蠣もパイもブディングも果實もうれからポンスも悉皆立ち所ふ消に亡せた。座敷も火も赤燭も闇夜も其の通り消に失せた。そして二人はクリスマス朝の街路に立つてゐたが、其所では人々が(天氣が酷いので)門前の人道や屋の棟の雪を掻いて、荒々しくはあるが併し活潑を不愉快で無い一種の音樂を奏でゝゐる。雪は其所から棟下の道ふ落ちてきて、人工の吹雪ふきめくものごとく散乱する、夫れを見て小供は大喜びであつた。

五六—27 Pavement. 人道。  
五六—29 Pumping 落ちくると。



五七一 a which last deposit. 其の近頃積もつた雪、  
 五七一 3 deep furrows etc. 糞糞の大路小路の通せる上に馬車荷車等々行きかゝりて其轍は恰も田畑のウツの如し。  
 五七一 11 by one consent. 申合せやつ lazily away. 絶間なく、自由自在に焰をあげる。  
 五七一 12 dear hearts' content. 眞底までメンカリ。  
 五七一 14 clearest summer air. 英國にては冬より春に於いて濃霧立ちこめて陰鬱限りなし、夏になれば初めて日光燦々を照りかゞやく、故に澄み渡る夏の空が最も快き也。(250)  
 五七一 20 better-natured missile. 屋

家並の前は餘は昏暗かつた、が其の窓々は屋根の滑かな白い雪や地上の汚い雪を對比して一入暗かつた。新たみ降り積つた雪は、馬車荷車の大きい輪で深い畔を耕いたやうなつてゐて、大通りがいくつよも分れてゐるところでは其畔が幾百を無く蝕ひ違つて、薄黒く黄色な雪解水で、紛糾れくた緒口得わかぬ溝を作つてゐるのである。空はどんより曇つて、目の前の通路も溶けたやうな凝つたやうな暗い霧で曇がつて、重げの滴が煤けた小糠雨を降らしてゐる、まるで大英國の煙突が皆申し合せて火を出して、中の中、底の底まで燃え落ちて焰を降らすやうな。別段氣候が如何の、市街が斯うのやいふことは無いが、而かも戶外の様子は著しく快暢してゐて(250)縦令澄み透つた夏の空夏の日が藻掻いても徒爾、斯の快暢した様を出現することをは出来ぬ。どいふのは何故か、——屋の棟でせつせ雪を搔く人々が嬉しさ喜ばしさを溢らしてゐる。棟の欄干から互ひよ呼び交しては面白い雪丸を

の棟より棟に雪丸を拵へて投げ合ふは口で柄落を言ひ替ひを吐きて敵の急所を打つよりも害毒なき而かも利き目ある好箇の飛び道具なりと。(251)  
 五七一 27 apoplectic opulence. 以前英國の富豪は美味美酒を過度に飲食して運動を爲さずししかば非常に肥満して顔は赤脹れたり、其結果卒中症に罹りて頓死するものありと。(252)  
 五七一 29 Spanish Friars. スペインの乞食坊主、肥満を以て有名なりと。  
 五八一 5 shuttles  
 五八一 6 Norfolk Bins. 北威に産する林檎。(Binsは apples の地方辭)。

射出するのであるが、(251)口でがやんく喚くよりも此の方が毒の無い好い飛道具なので、甘く行つても行かんでも同じ様に眞底から笑ひ轉げてゐる。鳥屋の店はやはり半開きあしてあつて、果物屋は火がついたかと思はれるばかり、——大きい圓い、腹の脹れた栗籠は(251)まるで戸口を喘いでゐて、中風で街中に卒倒した大兵肥満の老紳士の腹をいふ型をしてゐるのだ。赤勝ちの樺色で、太い胴をした西班牙の玉葱は、西班牙の乞食坊主のやうに肥太つて、そして美女のが通る度、恍惚せした目付で棚の上から秋波を滾す癖が、磔刑にあげられてゐる寄生木よは嚴肅しい顔をしてゐるのだ。梨や林檎が赤光りのする三角尖塔的に高く積んでゐるのだ。葡萄の把束が店番の慈悲で卓絶非凡な釣に揺られて、通りすがりの人よはで涎を出させてゐるのだ。苔蒸した蔭色の榛子が積み重ねてあつて、それが其の香ひで、彼の太古の森路を踏みつけて落葉した中を脚目まで埋められるのを思ひ出させてゐる

五八—8 Great  
 completeness etc. 圓  
 めきカタン、と汁  
 澤山に見ゆる果物  
 (自ら物を言ふ様  
 に可笑味をつけて  
 書してある。)  
 Persons = bodies.  
 五八—11 gold and  
 silver fish etc. 飾り  
 として金魚銀魚の  
 鉢が店の賣物の間  
 に置いてある。金  
 魚は冷血動物にし  
 て遲鈍なるもので  
 あるにクリスマス  
 の感化は恐ろしい  
 もので、何か常な  
 らぬことが起つた  
 と思つてゐるやうで  
 あつた。to a fish  
 何れの魚も皆。  
 their little world 即  
 金魚鉢のこと。(253)  
 五八—16 Grocers'  
 oh, the Grocers! 作  
 者此に荒物屋の愉  
 快を極めたる様を  
 描かんとして其華  
 麗の様に慥し其

結果文を成さざる  
 間投詞(情詞文)の  
 ほか發する能はざ  
 る如くに見せかけ  
 たり。次に漸く情  
 を静めて其店の有  
 様を説く。neatly  
 closed etc. クリス  
 マスの休暇中なる  
 の故を以て荒物屋  
 も大方戸を閉ざし  
 (25)たり。而かも  
 クリスマスには特  
 に顧客の荒物屋に  
 用事あれば、内に  
 ては盛んに營業し  
 時節柄の需用品を  
 賣捌きおりに頗る  
 多忙の様あり、  
 but through the  
 gaps such glimpses  
 路上を行く人殆ん  
 ど閉戸したれば其  
 内側を十分に見る  
 能はざれど而かも  
 戸の隙間より映し  
 き火影に品々のち  
 らつくを見得たり  
 (254)  
 五八—33 the day.

るのだ。果實の厚い、黒ずんだ北國産の林檎があつて、それが橙や梨  
 様の眞黄色を引き立たせてゐて、汁澤山でそれで堅々としまつた軀を  
 見せて、紙袋に入れて持ちにちつて御飯の後に召上つて下さい。と  
 一圖に懇願哀訴してゐるのだ。(253)全くの金銀色をした金魚銀魚が鉢  
 み入れて、斯の結構な果物の間並べられて、それが遲鈍冷血の魚類  
 であるに、けふは平生を違つて何か事が持ち上つたのを知つたやうに、  
 それもく我が小宇宙を鈍ろい意氣地の無い意氣地で唸喘泳ぎ回つて  
 ゐる。

(253) 荒物屋! あゝ荒物屋の店先き! 屹度二枚か一枚だけ戸を外してあ  
 るばかりで大抵閉めきつてゐる。けれども其の隙間から、まア瞥見こ  
 せ!! 勘定臺の上にながつてゐる天秤が好い音をさせる許りでは無い、  
 縛り紐や麻繩が那樣忙がしく解かれるばかりで無い、罐類が手品を使  
 ふやうに上げたり下ろしたり颯つくばかりで無い、茶や珈琲を混ぜく

る香ひが鼻を揉ぎ取るばかりでは無いせも、干葡萄が澤山在つて斯う  
 可いのは全く稀らしいばかりでは無いとも、巴旦杏がどうも佳い色の  
 骨頂で、肉桂の枝が那樣も長く眞直で、いろくの香料が斯うも可い  
 香ひで、砂糖漬の果物が、いかな吾黨ならぬ者ふすら、氣を遠く恍惚  
 させて唾を湧かさせる程水砂糖をかけてあるばかりでは無いせも。尙  
 は又無果花が汁氣があつて軟かで、佛蘭西梅が高々と飾り立てた函か  
 ら宜い位の酸いさで紅く見えて、それも是れもこれも彼れもクリスマ  
 スの晴着をつけて味つて貰ふばかりふあつてゐる、ばかりでは無いの  
 だ。けれども得意客は何れも(255)其日の待ち遠しさも大焦氣、大いそ  
 ぎで、戸口で額合せしてあいたし、籠を手荒らく瓦羅つかせて、それ  
 で折角の買物を勘定場のわきふ忘れて駈け出して、ハツと氣がつきの、  
 れや〜〜で駈け戻る。此の類の間違ひを何百遍とかく繰り返して、  
 それで愉顔婉容の大御機嫌である。偕て賣り手はといふや主人も小僧

即クリスマスの日。クリスマスは常日は二十五日なり。作者は此に顧客がクリスマス前の夜若くは二十五日の未明に荒物屋で品物を求めおるとして記せり。故に「頼めし其日」を云へるなり。「其日」は未だ未来とせるなり。何れも其日の娛みを豫想せるなり。(255)五九一 6 the polished hearts etc. シロウシアは其衣服の汚されざらんため膝掛を爲せり。この膝掛は十分に摩すましたる金屬製の心臓形をなせるピン(留針)にてとめる様に出來てれる也。作者は此シロウシアの言語に愛嬌ありて舉動のまめくしきと其ハアト形の

留針の如しとおどけて言へり。彼は心の奥底まで打開して顧客に底意なき所を見れば是等金屬製の心臓形其物が自己の心臓其儘にて人に示さんため外部に出して着けたるが如し。for Christmas days to peck at. 是はシロウシアの劇「マナロ」中の一言(But I will wear my heart upon my sleeve for days to peck at etc.)を脱化するものなり。マセロの此意は、予は我が最神聖なる愛情を隠す能はず口さがなき空談者が際立て回る如くに之を云ひ表はす。daysは非常にヤカマンキ猫の一種なり。(256)五九一 5 carrying

も打解けきつて晴れくしてゐて、(256)背で留めてゐる前掛の曇りげも無い心臓型の縮金(シムカネ)がまるで、誰様も御覽下さいましたの、お祝ひ日の鴉(カラス)ちやんれ望(のぞ)みなら啄(つ)ついておくれ、包み隠(か)しはしさいといふ外部に取(と)り出した心臓(ハート)かと思はれるほぞであつた。

併し間も無く鐘樓(カネヅミ)は善男善女を寺(てら)と呼んだので、一張(ひと)羅(ら)を着飾(か)つて、取つてれきの婉容(カハセ)をして街中(まち)を群(む)れあひまがら皆行(い)つた。それと同時に横道(よこみち)小路(こうじ)、(257)名も無い街角(まちのすみ)から無数の其日暮(ひぐらし)が原料(げんりょう)を提(ひ)げて煮物屋(にものや)へと出(い)かけてきた。是等(これら)上戸(じやうこ)下戸(げこ)の手合(てあ)を見て、クリスマス(クリスマス)の靈(たま)は酷(こ)く興(き)がつたやうに見(み)えた、と言(い)ふのは彼(かれ)が斯固陋爺(スグロウジヤ)とともに煮物屋(にものや)の戸口(とぐち)に佇立(たつた)つて、出入(でいり)りする連中(れんちゆう)の食物(じきじ)の蓋布(がいふ)を取(と)つて例(れい)の松明(しょうめい)から香氣(かき)をふりかけたので知(し)れる。で、斯(ス)の阿哥(アゴ)たちが一二度(いちにど)撞(つ)き當(あ)つて喧嘩(けんか)聲(こゑ)を上げたをき其(その)中(ちゆう)へ松明(しょうめい)からの數滴(かずたつ)を注(つ)ぎかけるといふを直(ち)ぐ又元(またもと)の御機嫌(ごきげん)あなつたところを見れば斯(ス)の松明(しょうめい)は大お世(おほよ)の常(じょう)の物

で無い功力があるのだ。クリスマス(クリスマス)の祝(いわ)ひ日は喧嘩(けんか)する方は無いと皆言(い)つたが、成程(なるほど)夫(それ)れはさうだ。勿体(なげ)も無い、それはさうあらうぞも！ 竟(な)お鈴(すず)の音(ね)が鳴(な)りやんで煮物屋(にものや)も戸(と)を閉(し)じたが、それでも尙ほ何處(どこ)もなく料理(れんり)庖厨(ばうこ)の好(こ)ましい様子(ようす)が残(のこ)つてゐる。籠(かご)の上(うへ)には雪(ゆき)が溶(と)けかこつて居(ゐ)り、鋪石(せき)もともに煮焚(にや)してゐるかのやうに蒸氣(じやうき)を騰(た)げてゐる。

『お前(まへ)さまが松明(しょうめい)から振りかけられます中(ちゆう)には、何か特別(とくべつ)の香(か)がござりますのでな。』と斯固陋爺(スグロウジヤ)が問(と)ふ。

『ある、わし專賣(せんばい)の物(もの)がある。』

『今日の料理(れんり)なら誰(たれ)彼の(かの)差別(さべつ)なう味(あじ)がつけられますでな。』

『誰(たれ)彼の(かの)差別(さべつ)は無い。が、わけて貧(ひん)しいもの(もの)はぢや。』

『貧(ひん)しい者(もの)には、それ(それ)や又何(なに)故(ゆゑ)でござります。』

『甘味(かんみ)うするの(の)ふそれが最も(とほ)入り用(もち)ぢや。』

斯固陋爺(スグロウジヤ)は一寸(いちじゆん)考(かう)へて、

their diners to the baker's shop. 料理せんため原料を持ち行く。倫助にては貧民は自家に料理すべし鍋も釜も持たざる故大抵斯く煮物屋に持ち行くなり。(257) 五九—18 taking off the covers etc. 如上の原料は勿論其籠を布にて掩ひあり。今ゴーストは例の松明の平をふりかげんとして是れをヒョイと取り除けたり。 六十一—6 貧乏人の食物。夫ゆゑ美味に比して一入之を甘くするのにクリスマス香氣をつける必要あり。 六十一—8 I wonder you etc. これ作者百スケルンが所謂日曜令を非難するなり。基督教徒は日曜日に煮物屋

『幽霊殿、(258) 貴方さまは是等貧しい者が罪の無い樂みをする時機を狭めやうのお心ではござらぬか存じますが。』

『わしが!?』『クリスマスマスの靈が喚く。』

『貴方さまは日曜日毎に——聊でも馳走をありつく言はれる唯んだ一日の日曜毎々食事を甘うする手段を奪らうと思し召される。左様ではござりませぬでな?』

『わしが!』

『貴方さまは日曜に煮物屋の營業を停止せうと爲さる。それでは手段を奪らうとなさるゝと同じことごとござる。』

『わしがどうする。』とよく喚き立てる。

『私の考へ違ひから御免下されい。で、ござるがお前様の名義で左うしてたらく。いやお前様の祭り日といふ名義でな。』

クリスマスマスの靈はいと嚴かに説き出した。——

其他貧民に關係ある商店に休業を命じて、貧民の飲食の娛みを奪ひ去るなり。(休業ゆゑ貧民は料理庖厨を依頼する所なし)。クリスマスは勿論日曜日は異なるれども共に宗教上の休日なりとスケルンは言へるなり。(258) 六十一—19 It has been done etc. 此日曜日の貧民の御馳走を奪ひとる企は(實際貴方ではなにかもしれねど)貴方の名で諸人にせられる、少くも聖日といふ名で爲される、貴方の御一家の聖日といふ名で。 六十一—21 There are some upon etc. 此の人間界には宗教家であつて吾々聖日のゴーストを知

『れ前の居る此の世の中は怪しからんものがある。己は信者ちや教徒ちやを揚言して、吾等宗門の祭日といふ名で慾、驕、憎み、嫉み又は迷信なぞといふことをしれるが、わしの親類眷族は更ふ是等の者共を知らんのだ。其所を合点して、あ、吾々は措いて其の人々の爲ることを責めあさう。』

斯固陋爺が承知の旨言葉をつがへるや兩人は前の通り人には見えず市外れに出かけた。此のクリスマスマスの靈の特質をいふのは、(斯固陋爺が煮物屋で實驗した通り)その身の巨大あるお拘はらず、容易に何處にでも入りこみ得て、そして低い棟の下にも全く便娟に、天女のやうも立つこと尙は大夏高樓お於けるが如くであつた。

クリスマスマスの靈は一直線お斯固陋爺の番頭の家お入つたが、是れは恐らく今述べた能力を示さんためか、左おくば貧しい者おは誰にも親切で大容お心根と、其の同情を興へるのが愉快であるのであらう。彼は

つておるといふ人があるが實は吾々  
は其人々を更に知  
らぬのである。  
Kin-relatives.  
Kin - intimate ac-  
quaintances.  
六十一 26 that 吾々  
は其人々を友達と  
も思はず又吾々の  
代表者とも認めぬ  
也。  
六十一 31 accom-  
modate him. 適宜  
する適宜にする。  
伸縮自在。  
六十一 32 "Bob"  
Shillingを俗に bob  
と云ふ。クラチク  
の名前は Bob なる  
ゆゑ彼の洗禮を受  
けし時の名と云へ  
る也。(259)  
六十一 35 brave in  
ribbon. 立派に見  
ることを brave と  
云ふ。少女の髪を束  
ね又髪髻にまと  
ふ紐をリボンとい  
ふ。此の所の意は

衣服は裏返しした粗  
末な物なれどリボ  
ンを澤山飾りにつ  
けしゆゑ立派にハ  
デヤカに見ゆまな  
り。  
六十一 17 Lind the  
cloth. クリスマス  
晝飯の支度にて  
ナル掛を廣げた。  
六十一 20 getting  
the corners etc. 5  
タア、クラチット  
はボアの長子にし  
て跡取り子なり、  
父はクリスマスを  
祝して我がシヤッ  
キを彼に賜りたるが  
、固より大人の若  
るものなれば子供  
には大き過ぎ、シ  
ヤットの襟が高く  
びいてヒイタアの  
面は殆ど襟の間に  
隠れたり。然るに  
ヒイタアは生れて  
より初めて斯るイ  
カメシキものを着  
したれば頗る意氣  
揚々たり。(260)

其の門口へ、我が長衣に斯固陋爺をつかまらせて一所に連れて行つた。  
さて戸闔のところで微笑して例の松明からの滴をふりかけてボブ、ク  
ラチットの住居へ幸ひを降さんせしたのである。考へても見給へボブ  
は一週間僅かに(258)十五ボブを得るふ過ぎぬ——毎土曜日に己のが名  
前の錢十五個を懐中するのみ。而かも現在の祝日の靈は、此の四間は  
かりの瘦世帯に祝福したのである。

するぞクラチット夫人——裏返した衣服のいかにも窶々しいのではあ  
るが併し頭掛の紐紐の、六ペンスにしては安くて全体を立派に引立た  
せるのを着飾つたクラチットの女房が立ち上つて、二番娘の是れも華  
やかな紐紐を飾つたベリンダに手傳はせて食卓布を廣げてゐる。一方  
では息子のヒイタアが薯鍋の中へ肉父を突こんでゐる。それで(260)  
けふのクリスマスを祝つて、長子且跡取たる我に拜領せさせ給ふた父  
ボブが秘藏の衣服の(261)恐ろしい大衣襟の高襟の両端を口に啣へながら

斯くまで華麗な装へるを大得意なつて、此の襦袢を見せびらかしに、  
人の集まる公園にでも散歩したい望みであつた。さて弟と妹との二人  
は、遽しく(261)駆けこんできて、煮物屋の門口で鵝鳥を煮る香を嗅い  
だが、それは自分たちの鵝鳥であることを嗅きわけたや鼻息荒く物語  
つた。そして、香を付ける芥や鵝鳥と煮こみの玉葱おどの大御馳走を  
考へるともうくく口には水が湧いてきて嬉しくてたまらず、二人は  
食卓の周りを踊り狂つて、そしてヒイタアを胴揚するほど賞め立て  
たが、これは兄さんが、(262)例の高襟で殆んど息が詰つて死ぬかと思  
ふほど滅法界なのお、氣位を高くとって泰然と澄ましこむをいふとは  
せず)煮物の火を吹き起してくれて、遅鈍の薯も沸々煮ゆ立つて、早  
く取出して皮を剥いで下さいとけたこましく鍋の蓋を叩くまであつ  
たからで。

『(263)お父さんは如何してまあ晩いんだらう。そしてチムちゃんは一う

六十一 25 came  
 tearing in etc. ポブ  
 はクリスマスな  
 日はとて一年に  
 一度の大御馳走に  
 一羽の鶏を買ひ  
 之を例の煎物屋に  
 持ち行きたり。然  
 るに其二人の幼子  
 は待ちきれずして  
 煮物屋に序候とし  
 て出かけ其戸外に  
 て鶏の香ひなる香  
 をかきたるに其香  
 ひこそ自分達の鶏  
 鳥の香ひなるを知  
 りてアワツタマシ  
 ク我家に駆け込  
 て話す也。(261)  
 六十一 30 (not  
 proud, although  
 etc) ポイタアのシ  
 ヤットの襟は餘り高  
 過ぎて殆んど口を  
 塞ぎ呼吸が止まら  
 んとする程なり。  
 斯るリ、シキ装ひ  
 をしてはおれど其  
 氣位ひは高からず

して威厳をクツシ  
 著を煮ておる火を  
 吹いて呉れたゆゑ  
 感心なりとて二人  
 の弟が大ホメにホ  
 ムるなり。(262)  
 六十一 1 What has  
 ever got etc 御父  
 さんは何何して  
 歸りが晚いのだら  
 う(何の用に引き  
 とめられたのだら  
 う)。蓋し父はチム  
 といふ不具の息子  
 をつれて教會に逃  
 ぎたり。(263)  
 六十一 3 and  
 Martha want etc.  
 マアサは長女とし  
 て婦人帽子製造所  
 に奉公せるなり。  
 去年のクリスマス  
 より半時間マアサ  
 は晩し(随毛が)。  
 六十一 24 Tiny Tim  
 upon his shoulder.  
 チムは次男なり。  
 關節炎か何かにて  
 脚がキカヌ故撞木  
 杖を用ゆれども此

第二の幽霊

してマアサの晩いこそ、此の前の祝ひ日にはもつと三十分も早く来たんだ。』

『お母さん、マアサですよ、参りました』と言ひながら一人の娘は顔を出した。

『やわ姊ちゃんが出来た、母ちゃん。姊ちゃんくはら、斯んお鷄鳥！』と二人の幼いのが喚く。

母は幾度もなく接吻して甲斐くしく娘の肩掛を頭巾とを脱がせて、『やわね前能くねね、大さう晩かつたぢやないかい。』

『でも昨宵は後片付の仕事が澤山在つたのですし、今朝は又拭き掃除しなきゃあならないんですもの、ね母さん。』

『どうかい、いゝに晩くても何でも来さいすれや可いのだから心配れしであらうよ。さあ、衆んお火のそばお寄つておぬくもり。よくねね、まあ。』

小まめにちようくしてゐた二人の幼子は大聲をあげて、

『やわお父さんが歸つてきた。ね隠れ、姊ちゃん、早くさ。』

それでマアサが隠れる。さ、小男の父ポブは例の白襟卷の、房を除けても三尺以上もあるのを垂れ下げ、補綴の着物も、さすが日柄だけに刷毛をあてたのを着けて、(さ)としてチムちゃんを肩車お乗せて入つてきた。可哀さうおチムちゃんは小さい撞木杖を持つて曲つた足お鐵框を穿めてゐる。

ポブは其所から見回しあがら、

『時に、マアサは何處にゐる?』

『参りませんよ、』と女房が言ふので、

『参りません?』

非常の勢ひであつたポブが俄かに氣をくちいた。其の筈だ、ポブは寺からかへる途、始終チムの立派な馬にあつてヒンク跳ねてゐたのだ

時は父の肩車に乗  
れりし也。an iron  
frame. 曲つた足を  
直すために用ふる  
リツなり。(264)  
六二—30. a sudden  
declension.....  
愉快なりし精神に  
急に頓挫をきたし  
て。  
六二—32. Come  
home rampant. 後  
足を立ち上る。シ  
ン  
跳ねる馬のや  
うにして歸つた。  
六三—2. prema-  
turely. 隠れん坊を  
する時、チニが探  
し出さぬうち自分  
で飛び出しては何  
の興味もなし。即  
ち此所にてはまた  
飛び出すべき時機  
の熟せざるに自ら  
戸柵の後から出し  
たり。  
六三—5. washing-  
house. 洗濯場。通  
常本屋より別に離  
して建てありて常

に湯を沸かし衣服  
や器皿等を洗ふ所  
なれどもボブのや  
うな貧乏な家では  
臺所と洗濯場が一  
所なるべし故に此  
は臺所の意に用ゐ  
たのなり。  
六三—23. as for  
poor fellow etc. ボ  
ブがシャツの袖口  
をまくり上げしわ  
けは勝手元の仕事  
するに其袖口が水  
や火にあたりてよ  
されるのを恐れて  
なり。作者は之を  
可哀さうがりて、  
既に貧乏のため可  
い位に磨りされて  
れるのに此の上に  
汚れぬためにまく  
り上げたりと言へ  
るなり。  
六三—29. in pro-  
cession. 例へば  
天皇陛下が夥多の  
軍隊兵士や國務大  
臣を扈從させて國  
會議院に行幸あら

に。

『クリスマスは祝ひ日に來ない！』

よしんばほんの冗談よせよ、父の失望するを見るお忍びなかつたので、アマサは戸柵の戸の後から機不熟く飛んで出て、父を抱かされたのである。すると二人の弟妹はチムちゃんをしょ曳いて、銅鍋の中の御馳走の煮立つ音を聞かせんを臺所へ擔ぎ去つた。

『ボブの軽々しい信じやうを戯弄つてから、偕て女房は尋ねた。』

『それでチムちゃんは如何してゐました？』

良人は娘のママサを胸の真底まで抱しめて、

『斯の上あしの御機嫌だつた。だがの、長い間、整然と座つて頻りを考へこんでゐた。まだお前の聴かない妙智奇林なことを考へたよ。斯う言ふのだ——歸途ふな——寺で衆んなに見て貰ひたかつた、何せせいふや彼兒は御者だから、さうすればクリスマスは日に跋の乞食を歩か

せて、盲者に物を見せたを思へば衆んなが喜ぶだらうと言ふのだ。』

ボブがこれを女房娘お話すとき聲が震つたが、チムちゃんが丈夫な強くあつてきたせいふせきは一入震ひ聲であつた。

活潑な小さい撞木杖の音が床の上お聞けて、父の語の終らぬさまに二人の弟妹お取りまかれて、爐のはたの椅子お歸つてきた。父は襯衣の袖口をまくりあげて(可哀さう！又一層汚れるからと思つたやうに)杜松子酒と黎様の入つた徳利を何か暖かい物を混せて、ぐる／＼掻き廻してそろ／＼煮ゆるやうに鐵網の上お載せる。せ、ピイターと例のまめ小僧二人は鷺鳥を取りに行つて、(はい)直ぐ壯嚴なる行列を作つて引返して來たのである。

斯の様な大騒ぎをするを誰でも鷺鳥を鳥類中の最珍と思ふかも知れぬ——羽翼を備へた非常非凡の怪物、それに較べては黒鷓鴣おは平々凡々の者と思ふかも知れぬ。實際又此の家お取つては殆んど其の「怪物」

せられる時の壯嚴なる行列を言ふなり。これを此に用ゐたるは例の言語を誇張して可笑しきみをつける作者の慣用手段也。(295)

六四—s crammed spoons etc. 早や食卓に坐せる幼児二人、食卓より匙を取りて口中に入れたり。これは勿論小兒が何か喰へ度時其の心なくして何でも口に入る、所謂小供自分は何とも知らぬ自然の作用なり。然るに作者は例の戯れに、これを特別の意味ありて爲せしと音へるなり、即ち小供が若し御馳走をつけて貰ふ順の來らぬさまに我鳴り立てて叱られんことを恐れて口塞げに匙を含みたりと

であつた。女房は粥を(兼て小鍋も用意してあつた)しもツク暖める。ビイターは素適滅方な力で薯を突き混ぜる、娘ベリンダは林檎の煮汁に味をつける、姉のマアサは暖めた小皿を拭く、父ポブはチムちゃんを自分の片側に、食卓の一隅に陣取る、幼い二人は衆んかの椅子を並べて——自分たちのも忘れずに——はや各腰をかけて、鵝鳥をつけわけて貰ふ順のこぬうちに我鳴り立てて強請らない口塞げを匙を頼張るのであつた。さてやう／＼のことで皿が並んで食事の折の祈禱も濟んだ。女房が皆の小刀を静かに見渡してそれを鵝鳥の胸に突つ通さうとした間際には一座皆息を殺して寂寥としたのである。それが濟んで待ち遠しかつた例の口中の詰り物を吐き出すや歡喜の叫びが食卓を動かし一時お起つた。チムちゃんすら幼い二人に釣り出されて小刀の柄で卓をこつ／＼やらかして微かふハアア!と叫いたのである。斯んな鵝鳥があるものぢや無い、斯んな鵝鳥の料理したのは見も知ら

六四—24 as Mrs. Cratchit said... 女房は大皿の中に唯ツた一ヶ残つてゐた(一ヶ残しかない故誰もつけわけてよと言はずに居たのならん)鳥肉を見て、是れ鵝鳥の非常に大き／＼して皆がトウ／＼喰へるとが出来なかつた証據と大喜びで言ふ。(296)

六五—a supposition at which... 此一家の一人たわむれて言はく若し鵝鳥を泥棒が入つて取つて行つたら如何すると、例の二人の幼兒はこれを眞面目に取つて、もう御馳走が喰べられないか、ニクイ泥棒めと眞青に爲つた。

六五—6 A smell like a washing-day... 洗濯日の如

あいとポブは言つたが、其の柔らかさと、香ひのよさと、大きさと、ろして其の安價どが異口同音に賞讃された題目であつた。林檎の煮汁と衝碎いた薯をあしらつたので家中の御馳走も十二分であつたのだ。全く女房は大喜びで(298)鵝鳥の小さい唯つた一切残してあつた鉢を檢閲して「到頭家中で食べきれあかつた!」兎に角衆んか十分に食つたのだ。わけても幼い二人は芹や玉葱を喰ふまでつけてゐた。ところが今ベリンダが小皿をかへて下さいと出すと母さんはブツデングを取りお自分一人で座敷を出た——あまり心配で人お見られるに忍びない。

若し出来が悪かつたせして御覽、裏返さうせして壊れたとして御覽、衆んかが鵝鳥を大賞め、賞めてゐる間に、後ろの庭の垣を越へて「誰か入つて盡つてツちやつたら!」——といふ想像お幼い二人は眞青になつた。あらゆることを想像しておつかあびつくりしてゐたので。



(107)や、大變な蒸氣！ブツデングが銅鍋から取り出された。洗濯日のやうな香ひ！——は食卓布であつた。洗濯婆さんの隣りに料理屋を麵麩屋の店のやうな香ひ——はブツデングであつた。直ちよクラッチト夫人はブツデングの、生火酒を二三勺ばかりかけたので蒸氣の立つ、狗骨木を真中ふ衝き挿した堅い硬い班点のある大砲丸のやうなのを持つて——潮と顔を紅めていはあるが得意氣に微笑みながら——入つてきた。

あ、どうも素張らしいブツデング！ボブ、クラッチトは、斯の大出来はクラッチト夫人一世一代と思ふと徐ろに話した。クラッチト夫人は又、今こゝろ重荷を下ろした、ほんとを言ふと粉の入れ方が如何かど氣づかつたのだと言つたのである。皆それ／＼何ぞか彼ぞか言つたのであるが併し誰一人、是れが斯の大家族には小さすぎると言ふものも思ふものも無かつた。うんなどを言はふものから飛んだ邪推だ。誰だ

き香ひ(食卓掛が奇麗に洗濯してある故か)いひしなりの。其洗濯して糊の香ひする食卓掛の掛りし食卓の上へ(鳥の料理を並べた故、隣りに料理屋のある様な香ひする)たわむれたるなり。(107)  
 六五—16 Greatest success etc. クラッチトが結婚以来の女房の大出来だとほめたるなり。  
 六五—18 Weight 夢の入れ方が如何か心配してゐたが今ヤット重荷を下ろした。  
 六五—31 meaning half a one. 半圓形といふ意なりと。  
 ステーションに在る様な大暖爐にアタルには周囲に同形には坐れぬもの也、されど之をストープの周囲に圓

るく集る、といふが常識的解釋なり。例の滑稽の作者が、實は之れ半圓形ぢやと小理窟を言つて笑はせるのなり。(108)

やつてそんなことを暖氣でも出して赤い顔をする様な者は無かつた。終ふ御馳走が全く出来上つて、食卓布の塵を拂つて、暖爐を掃除して、そして火を焚きつけた。例の徳利の混ぜ合せ物の味を利いて見ると申し分なし。林檎も蜜柑も食卓の上に並べ、そして栗を火斗に一杯焼きにかかつた。するやクラッチト一家の者一同爐の周りに、(108)父ボブは圓形を言つた實は半圓形を集つて、主人の前に玻璃製のお家の重寶が並んだ——二つの大杯と柄の取れた乳卵糕の高杯と。

けれども是れに例の徳利から熱燗の物を酌ぐせ、さながら純金の珍觴を見せた。父は相恰も碎けんばかりふそれを分配した。火の上の栗も水氣を吹いてけたましく笑みわれた。そこで父は、

『さや、衆ンなおめでたうございませう。有り難いことだ、』と口を切る  
 衆ンおこれふ和した。チムちゃんすら最後に、  
 『皆さんためであう！』

六六一 17 I see a vacant seat..... チムは足不自由故常に一定の坐にすわつたきりで活潑に飛び跳ねる事なく又歩行の必要あるときは撞木杖にすがつてヤット歩を移すのみ、斯く病身故にあの坐と撞木杖を要せざる様にならば兎に角然らざれば間もなく死ぬべし。(6)

六六一 31 If man you be in heart... :此一段は作者嚴肅に(ゴーストの口を借りて)世の經濟論者其他實利的冷酷なる腦を有せる者を諷刺し、

人口過剰等の没人情なる言論を爲して更に同胞の貧苦に留心せざることを痛罵せるなり。(27)

六七一 9 I'll give you Mr. S..... ポプの一家今や彼のポプ手製の酒を飲まんとす、ポプ曰くスクールは我主人にして一家の収入を供給するの人は先づ其健康を説さんと、於是彼を「大御馳走の下され手」と

第二の幽霊

お父さんの傍ふびつたり着いて小さい椅子を腰かけてゐたのを、ポプは我が手で其の萎びた小さい手を持つてゐた、——此の兒が可愛くて側を離れさせ度なく、若し盗つて行かれはせぬかぞ怖がつてゐるやうに。

斯固陋爺はこれまでに無い感打たれたやうに、

「幽霊<sup>スプリット</sup>の、チムちゃんふ別條はござりますまいかな？」

「(36)あの貧乏げた爐の隅に空いた座が一つ、それから撞木杖が主を待つて一本大切ふしてある。若しこれが此の儘此の末何時までも残つてゐるなら、あの兒は命が無い、」とクリスマス<sup>クリスマス</sup>の靈が答へる。

「さう、さう言はれては。助かると言うて下され、あ。」

『もし是れが此の儘この末も残つてゐるならチムは二度とクリスマス<sup>クリスマス</sup>の祭りふ遇ふことは無い。が、さうなら如何だ？あの兒が多分死ぬものなら、さうした方が可い、餘計な殺潰しが減るでないか。』

おのが語を其の儘引用するのを聞いて、頭を下げて斯固陋爺は後悔慚愧ふ堪ぬねのである。

クリスマス<sup>クリスマス</sup>の靈——「(37)吾が友よ、汝若し木石からで、物の哀れを知らんには、人口過多の何たるか、まつた何處が過多あるかを汝自ら研究めんまで、義理人情ふ戻つたる、其の定文句を口にせせう。何人か能く此の世に活き、何人か死すべきかを、汝決めんを思へるか。御神の照覽あらんふは、今見る賤の小兒ふ等しき幾億萬の是よりも、汝こそ尙價なく、生きて此の世に在りがたき効無き者ふあらんずらん。あら堪ぬがたや、木の葉の上ふ蠢動ける、蠅<sup>ハエ</sup>蟻<sup>アリ</sup>ふ均しき者どもが、塵の世に在る同胞の貧苦ふ泣くを冷やかに、餘りふ命長しとて、口を極めて罵り立つるよ！」

斯固陋爺は幽霊<sup>スプリット</sup>の前ふ身を屈めて、戰慄ながら地上に目を注いでゐた。けれども自分の名を呼ぶのを聞いて逸早く見上げたのである。

斯固陋爺さま。(270)貴方よ、大酒盛りの賜り主斯固陋爺さまといふ名を献じます』せいふのはボブの聲。

『大酒盛の賜り主、ほんせき』と真紅にあつて女房が喚いて、

『わたし、彼の方を此所にお呼び申してわたしの苦つ膽を一片御馳走して嘗めさせてやりたい。そしてそれを澤山召し上つて戴きたい。』

『これ！小供が……………けふはクリスマスだ。』と良人が氣をつける。

『クリスマスですよ、そうですよ！けふは誰だつて斯固陋爺さまのやうか、あんな可厭な客ん坊の無慈悲の、獸類のやうなお方さまのね變りあつていらつしやるのを祝はないぢやたきません。貴郎は能く知つていらつしやる。貴郎は能く御存じの方はありません。情けあす。』

ボブは尙ほも物柔かふ。『これ、クリスマスだと言ふよ。』

六七— I'd give him a piece etc. To give another a piece of one's mind とは婦人が怒りを舍んで他人を惡口する普通の(稍や野郎なる)口調なり。To feast upon とは「胸がわるくなる」といふ意味を反語にて言ひ顯はすなり。

六七— 33 from the mere relief etc. 彼等は吝嗇殘忍なるスクルージの爲めに斯くも貧困し一時の立腹より現在受取りおる小額の給金すら(解雇せられて)失はんかと思ひて氣もシメリたるが併し段々皆の心中より此の惡鬼の考へを消し其反動として以前より一層快く感じたりとなり。done with a piece をつけろ。處分する。(272) 六八— 7. what particular investments……此の如き事を思案するは唯吾人が卒然大金を手に入れたる時にあり。此の如き場合に遭遇したりせば吾人は如何なる株券如何なる公債を買ひ如何なる外資の募集に

『わたし、貴郎と祝ひ日のためよ、彼の方の御丈夫なのを祝ふのです、彼の方のためではありません。斯固陋爺さまはお仕合でございます！結構なクリスマスでそしてめでたい新年でございます。彼の方は、それはもう結構で、おめでたうございます。さうですよ！』女房の後で子供等も此の「賜り主」に祝杯を酌んだ。是れが眞情の籠らぬ祝杯の手初であつた。最後にチムちゃんも祝杯を上げたが併し、是れは何が何やら更に頓着無かつたのだ。斯固陋爺は此の一家の鬼であつたのである。斯固陋爺の名が出たので面々の顔に曇りが映して確か五分間は晴れさうも見ぬのであつた。が、浮雲一過した後では一同以前より十層倍も嬉し喜んだが、(273)これは斯固陋爺といふ厄病神の處分がついた大安心も急である。ボブ、クラッチトは、目前ピエタアのためふ職を見つけたが、それが出來たら毎週一圓三十何錢の収入があるを衆んなに話した。例の幼い二人が

應ぜんものか。今  
ピイターが一回あ  
まりの収入あらん  
暇に(あまリアテ  
にならぬとを)其  
投資法を今より講  
究するとは随分滑  
稽のとなり。(273)  
六八—10 then told  
them.....是れは  
マアサが卒公先を  
の主人にて嘗てあ  
りし物を語りす  
る也。(274)

ピイターが事業家になるかやいふことを考へて恐ろしく笑つたが、  
ピイター自身は(273)又、其の戸迷ひするほどの収入を受取る時にあつ  
たら、どんな特別な株券、特別な公債に其の資本を投下したものか、  
と考へ迷つてゐるやうに、例の襟の間から心配さうな燐を見詰めてゐ  
たのだ。婦人帽子製造所の哀れな工女であつたマアサは其の時話した、  
——(274)自分はどんな仕事をしければ爲らなかつたか、何時間休  
まずに働くこぞか、その翌日は大層な疲れを直すために伏床に入つて  
寝る必要があつたか、その翌日は休業日であつたので家内で暮らした  
か否、皆んな話して、尙ほマアサは、四五日前或る若殿様を奥方と  
を見たが其の若殿様が丁度ピイターの背の高さと同じであつたと言ふ  
ぞ、ピイターは高襟ハイカラを引き立て、諸君が其所あつても其の頭が  
見ぬは高く上げたのであつた。此の間絶えず焼栗と徳利とは皆の  
手あつて、うしてチムちゃんから順次ふ、雪中迷子あつた小兒の

歌曲を唄つたが、悲しい細い聲を持つたチムちゃんが實際非常な巧妙  
な唄つたのである。

六八—26 Edited. ヨ  
ーストは今やボブ  
一家の幻像をスク  
ルージの目より引  
き離して他の場面  
を現せんとする故  
に其幻像が薄ボン  
ヤリとなり來れり  
。(275)

何も此の場面に特別な興があつたのでは無い。結構な一家でも無し綺  
羅を飾つてもゐない。靴は水が滲過るほどで衣服はみぢめの物。もし  
てピイターは質屋シヤウの内幕を知つてゐたかも知れぬ——恐らく知つてゐ  
たのであつた。けれども彼等一家は幸福で、懇篤で、互ひに睦まじく  
今日に満足してゐた。で、(276)此一家の者が次第薄ぼんやりと見え  
てきて、分れお望んで幽霊スピリットの松明から注ぎ出すさらくする雫を受け  
て殊更幸福と見わたせき、斯固陋爺は皆の者、殊にチムちゃんに最後  
まで目をつけてゐたのであつた。

此の時暗くなつて餘ほ雪が酷く降つて來た。斯固陋爺を幽霊ゴーストが街を  
通つて進みながら家々を見るぞ、臺所や座敷や部屋——に燃に立つ火  
の耀きは驚くべきものであつた。此所では燐の飄搖が、爐の前で小皿を

六九—4 with hot  
plates baking. 皿鉢  
などの陶器は冷た  
きものなれば之を  
使用する時暖める  
なり。

六九一〇 window. 薄布の窓掛、其外の窓は閉めてなき故室内の燈火は其布を通じて外の通路より見ゆるなり。若し人が燈火と窓との間に來れば其影が窓掛に映るなり。

六九一四 artificial witches etc. 此等の美人は未婚の男子を一目折めば必ず能く之を俘囚と爲すの我魔力を自信してゐる。

六九一九 Blessing on it, how the Ghost exulted! 作者は此にゴーストが人間に惠與せし幸福を非常に嬉しく思ひ誇つてゐる如く記す。

又其寛大なるを賞揚して(May the blessings of God be on it, (to reward it for its goodness) といへるなり。六九一七 though little kenned..... 點燈夫は(ゴーストを見ざるも其現在するを知りしほか)他の友即スタルーシありとは少しも知らざりき(勿論スタルーシは點燈夫の目に見ゆる筈なれば。)(276)

十分十二分に暖めてゐて、闇を寒さを絶ちさるやうに用意整うた眞紅の窓掛とせもに樂多き午餐の準備を示してゐるし、あちらでは此の屋の小供が皆、姉さん兄さんそれから従兄弟や伯父さん伯母さんあつて吾れ一番に祝ひを言はふと雪の中を駆け歩いてゐる。又ここには集つてゐる客の影が窓帷に映つる、其所は美くしい娘の一群が、衆を被り物を被ふつて毛皮付きの穿き物で、そして一度お喋りながら近所の家へ裾はらりと馳けこんだが、其のほうと上氣して目の縁を紅めてゐるのを見た獨身者は災難のことだ——妖艶しい、技倆のある魔物では娘たち能く自信してゐるのだもの。

併し若し諸君が、睦まじき集會の途にある人數から判断したら、その家の暖爐の用意をさうと怠りなく待ちかまへて歓迎する者は一人も無いと思ふかも知れぬ。あゝ！幽霊は悦喜満面だ！まア、胸襟を披き盡して寛大い掌を擴げて、そして届く限りのあらゆる物も無垢無

邪氣の甘露を注ぎかけんを闊い手を廣げて搖いてゐることを！點燈夫の小洋燈を持つて薄闇い通路を駆けぬけて、何處で今夜を明かさうものど餘所行衣服であるのが、幽霊の通りすがつたとき高笑ひした。——點燈夫は(276)「クリスマス」といふ仲間のほか誰一人目に見ゆる者あらうやとは聊か知らぬのであるに。

さて二人は、幽霊の一言の前觸れもあく荒れすさんだ澤中お立つてゐたが、巨人の墓所といふやうに礎石の恐ろしい大塊が散乱してゐて、水の流れは何處をいふ嫌ひなく廣がるのであらう、若し寒氣に閉されなかつたらば、刺鷹爪を苔藻を、濕氣を得て彌が上お生ひたつた雑草のはかは何も無い。西の方方は低く入相時の陽が丹紅の横線を残して暫らくは悪鬼の瞳のやうに荒野を照らしてゐたが、次第に低く——面を澁めて鬱愛を極めた常闇の中に消えてしまつた。

『如何いふ所でござりませう？』と斯固陋爺が尋ねた。

七十一 16 another generation beyond that 其次の代の小供即ヒコ、ヤシヤコなど。老人夫婦の老齡想像するに足らん。

七十一 29 rolled and roared and raged 同音にして自ら波響を聞く文字を三ッ重ねて文飾とす。

七十一 3 horn of the wind.....水の中の藻を水の産物と見做せば空中の鳥は風の産物ならん。作者が言ふなり。四行目のwaves は波の花(泡)と譯し次にwhich を押めば解し易からん。

七十一 12 face all damaged and scarred etc.古朽した船首は破浪神のやうに傷められた面をした老父が勇ましく歌曲を唄ひ出した (struck up)

『土の底を稼ぐ鑛夫かねほりのねる場所だ。けれどもおし昔の物を知つてゐる。』  
燈火が小屋の窓から映じてゐたので二人は急いで寄り近づいた。土と石で出来た壁を通り過ぎて睦まじげな者が、燃は上る火のまわりに集まつてゐるのを見たのである。それは年寄のくゝの翁媪おきなおばと其の子で、其の子の子と曾孫ひこ、玄孫やしろこたちであつて皆何れも祝ひ日の晴衣を着飾つてゐた。翁は荒野を吹きすさぶ風の咆吼うなりに杜絶とつの勝ちの聲で祝ひ唄を歌ひ聞かしてゐたのであるが、それは我が小兒時代の太古の歌で子孫のものも折々連れて唄つたのだ。皆の者が連れて聲を合せれば翁も聲高く快濶くわいにあり、皆の者が唄ひ止めれば翁も又挫折しよげたので。

幽靈おうれいは此所には逗留とらひせず我が長衣を斯固陋爺しころうぢに捕へさせ、そして澤地さわぢの上を浮み通つて——何處に急いだか。海までは無いか。海まである。振り返つて見て斯固陋爺しころうぢが驚いたことは恐ろしい岩石連らなつた陸路くわがの極處はてが我が後へよめる。で、窟くわの中を逆巻さかまき吼へ立ち荒れ回つ

て凄まじくも水底を掘り返さんとする水音轟々耳を聳たてるのである。  
海岸から數哩離れて、三百六十五日荒れ通しふ波打ちあれる物凄ものぢい一列の暗礁あんせうの上に寂寞しやくたる燈明臺とうめいだいがある。根もとには海藻が堆たく引き掛つてゐて、波の海藻を生じたやうに是は風の生ませたかとも思はれる海鳥が、おのが啄つむ波の花のやうふ其の周りを舞ひ上り舞ひ下がつてゐる。  
併し此所ふすら火の番の二人の男が火を焚たいてゐて、燦爛さんらんたる光線が石の厚壁の窓から畏敬おそしい海上を射てゐるのだ。對たいひ坐した、樵木せうぼくの卓の上ふ節くれ立つた手を組み合せながら鑛詰かねぢの酒を飲んでツリスマスの祝儀を述べあつてゐる。それで、年上の、船の破浪神やぶなみじんが暴風雨はうふうふ破傷いためられたやうの顔付の男が、其の勇しさは狂風を競ふばかりの歌曲を唄ひ出した。  
再び幽靈おうれいは黒く立ち上かる波の上を急いで——何處の陸路くわがよりも遙か

七一 23 with  
homeward hopes  
belonging to it. 此  
一句不明なれば予  
は例の手加減にて  
意味を想像して書  
きたり。深く讀者  
は原著者に謝す。  
(27)

七一 27 remem-  
bered // thought of  
(考へた)

に遠い／＼大洋あれば、斯固陋爺は話した通り——せある船中に飛び降つた。で、二人は舵輪を持つた梶取、艦よれる見張、當番の舟子の傍に坐を占めたが、何れも蒼黒い幽霊のやうな姿で、持ち場／＼を守つてゐる。併しどの水夫も祝ひ歌を口誦んだりクリスマス機の嫌を表はしたり又は過ぎ越し方のクリスマスをひう／＼囁き合つた——(27)やはらげぬのやうに家郷を遠く離れて海を浮んでゐた。一日も早く歸航して女房子供は無事な顔を見せ見られたいこそ、嬉しいと悲しいと傷ましいと歎ばしいと總て此の祝ひ日に係る過去現世未來を夢幻のやうな物語つてゐた。で、甲板にゐる、眠れる者醒むるもの、善どなく悪どなく平常より優しく話しあつて、或る点まではけふの祝ひを享樂して、それから又、片時も心頭を離れぬ者の上を更ふ遙かに考へて其の者ども、吾が今の思ひを思ひやつて嬉しく思ふであらうと思つてゐたのである。

七一 9 more  
best in a laugh. 心  
からの大きな罪な  
き笑ひの能力を神  
より授かつたと、  
此一節(及び次節)  
は例の作者の誇張  
の筆致。(278)

斯固陋爺は非常の驚愕であつた——鬼哭愁々の風音を聞いて、其の深さは「死」の神秘量りがたい見も知らぬ谷を淋しい闇夜お縫ひ行く畏ろしの思ひに耽つてゐたとき、其の時、心の底から出る笑ひ聲を聞いたのは非常の驚愕であつた。そして其の聲は自分の甥で、自分は晴れやかか乾いた照り耀く部屋のうちに其の甥を微笑しながら例の温顔の幽霊スピリットを並び立つてゐると知つたときは非常の驚愕であつた。『は、は、は、』を斯固陋爺の甥が笑つた。(278)恐らく有らうとは思はれぬが、若し諸君が斯固陋爺の甥より一層心から罪の無い笑ひ様をするものを知る機会があつたら著者も其人を知りたい、といふのが著者の精一杯だ。其の人を紹介して下さい、著者は其の昵近ちかぢきをありたい。悲哀や疾病とは傳染するものであるが、併し又好笑と快活は世の中み如何しても避けがたい傳染性の物は無い、といふことは公平無私に

七二一—Being not a bit behindhand. スクルーシの甥姪の例に習ひ即座に少しも晩れを取らずして。

七二一—25 Bless that woman! etc. 作者はスクルーシの姪の其伯父の無慮を悪めるを賞讃せるなり。其甥は単に笑つて済ませしことを姪は躍氣となつて毒つく。作者曰く、凡て婦人は皆(スクルーシの姪の如く)常に熱心に他の非行を難詰して餘す所なし。善哉(279) 七二一—27 She was very pretty etc. 此一節作者又極力スクルーシの姪の美貌を滑稽的に記せり。capital = excellent, admirable, provoking. 此字現今にて

は怒ると云のみ殆ど用ゆれども勿論愛情を挑発するにも用ゆべし。此一節にては此字幾分地口(pun)の意を含み且つ香人が此娘の美容に垂涎するも其希望は到底達する能はず(既に人の妻なれば)して立腹すべしふ可笑味を含めたれば、自ら滑稽なり。(280) 七三—4 Not so pleasant as he might be = not pleasant.

して且つ貴むべき事物の安排である。斯固陋爺の甥が如上の傳染的に腹をかこへて頭をかしげて、そして素敵滅法な癡學を顔み起して笑つたとき、斯固陋爺の姪も——結婚したので——良人の通りお真底から笑つた。居並んでゐた二人の友だちも少しも後れを取らず哄然を笑ひ顔れた。

『は、は、は、は……！』  
『伯父はクリスマス馬鹿くしいと言つたよ、確か。さう信じてゐる、』と斯固陋爺の甥が言ふ。

『何てお耻知らずでせう！』と斯固陋爺の姪が憤怒激發して言つた。(279) あゝ、善哉！妙哉！女は何事でもあやふやでは済まない、何時でも躍氣になつてかゝる。

(280) 斯固陋爺の姪は非常に奇麗であつた、甚だしく可憐であつた。笑歴の入つた、目のさめるやうな賞牌付きの優等の顔。接吻せられるた

めお拵へたやうな——實際されたのだとも——紅い小さい口。願のまはりにはあらゆる小さい好い笑窪があつて、笑つたらそれが皆溶けて一所になつてしまふ。そんな可憐女の姿も見たことの無い光るく目。諸君がラッ、お氣を起させるぞ、ね、言ひさうな女ではあるが併し——「佳い！」あゝ十分佳い。

斯固陋爺の甥——『伯父は可笑しを爺さんさ。それは眞實だ。だから嫌ひで無いせは言はないが、併し自分の罪で自分の罪を受けるだから私は何も逆つて言ふことは無い。』

斯固陋爺の姪が氣が付いたやうに、  
『貴郎、伯父さんは大さうな金があるのだわよ、屹度。貴郎、始終わたしふさうな言ひですもの。』

『うん、それがどうした？伯父の金は自分の役には立たないんだ、其の金で一寸した感心したとは仕はしない。別々自分の愉快を取るといふ



七三— He don't lose much of a dinner. 大御馳走を喰ひ損ふ。 "Not much of a" は大抵此意味の俗語に用ゐらる。  
 (此場合に於てスクルーシの甥は須らく下の如く言ふべきなり曰く、伯父は御馳走を喰ひ損ねて自分と自分で苦しむ。されど甥は此席の主人なれば我料理を誇るをさけて斯く言ひ代ひしなり。 (281))

ともしいんだ。又た其の金で何時が日にも、はくくく！私どもを潤やうともしないんだ。』  
 『わたし、もう、あの伯父さん我慢しきれ無い』と斯固陋爺の姪が吐き出した。すると斯固陋爺の姪の姉も妹も其他の婦人連も同意見を吐露した。斯固陋爺の甥——『なに、可いさ。私は氣の毒と思ふ、どうしても腹を立てられぬ。あの意地悪で弱るのは誰だ？何時も自分だ。あと伯父は吾々を眞心から嫌つてゐる。それで来て一所ふ食つてくれぬんだが、食はなけれや如何だ？ (282)』大變お大御馳走を喰ひ損ねるのでも無s。』  
 『大變お大御馳走を喰へ損なうのですとも、』と斯固陋爺の姪が遮つた。他の者も皆さう言つたが、何れも丁度食事してしまつて、食卓の上の食後の果實を味ひつゝ、洋燈のまわりは集まつてゐたやそこら、是れは宜しさを得た判断を容さねばならぬ。

七三— to hear that the dinner is good.  
 七四— 4 not the one with the roses. 此座にはスクルーシの姪の姉妹三人居たるらし、而して其一人はレスタツカアを胸に當て、他の一人はローズの花束を付けたり。作者は作者も讀者も此一座の者の名を知らざるものなりとして此の如き方法にて其姉妹たちを區別し、人を笑はしめんとす。  
 七四— 10 Plump sister tried..... 其以前(現今でも分か)西洋の貴女は芳烈なる香水瓶を懐中しめて頭痛メマイを感じる時之を喉ぐを常とせり。此にあるアロマチック、ヒ

『どうかい、それは結構のとだ。私は年若か家政を司る方々に信用を置かなかつたのだ。トッパア、君は如何思ふね、』と斯固陋爺の甥が戯弄ふとトッパアは未婚の男子は斯の問題ふ意見を吐く權利なき凄慘あものと返答して、斯固陋爺の姪の姉妹の一人に明かふ目を注いだ。そこで斯固陋爺の姪の妹の——薔薇の花束を着けてゐたのでは無い、紐飾胸當をしてゐた圓満娘が満足の羞耻。  
 斯固陋爺の姪は手を拍ちながら、『仰つしやいよ、貴郎、』を言つて又向返へつて、  
 『言ひかけて措くのが良人の定例なのよ、可笑しな人』  
 斯固陋爺の甥は再び哄笑を恣にした。で——例の肥満娘は (283) 鼻を揉ぐやうな生香水を嗅いで餘程堪へたが——斯の傳染病を預防すべくも見えず、彼に續いで一齊ふ吹き出した。  
 斯固陋爺の甥——『私は唯斯う言はうと思ふのさ、伯父が私共を嫌つ

子か其一種をも  
音ふべし。素より  
此場合にて同ぼち  
や娘は笑を忍はん  
とて之を嚙まじ  
なり、作者は笑を  
此に一種の傳染病  
と見なしたると前  
にある如し。(283)

七四—25 I shook  
him yesterday. 伯  
父の暴慢無禮なり  
しに係はらず昨日  
(二十四日の夜即  
ち本書最初の部分  
に在り)甥は彼の  
決心を助かして親  
切心を起さしめし  
と信ずるとなり。  
(283)

七四—26 I knew what  
they were about  
etc. 天性と修練と  
で(音楽)に熟達し  
てゐた。Eloc. 歌の  
一種、其歌の勇ま  
しく樂しきより此  
名あり。catch. 次

より次に唄ひ續ぐ  
歌。故に下手の者  
が交りおれば其音  
樂を害す。

七五—1 who  
could growl away  
in the bass. 音楽の  
最低音を巧妙にウ  
ナリ(唄ひ)通した。  
(Bass なるゆゑに  
Growl 洒落たり)  
七五—2 He might  
have cultivated etc.  
スタイルは此一  
曲は嘗て我妹の唄  
つたのであつたと  
を思ひ出して心が  
柔き、若し以前妹  
の唄に耳貸したな  
ら其感化を受けて  
今に及びたるなら  
ん。されば彼れ自  
ら人情をわきまへ  
て別に死人の助け  
を借るに及ばざり  
しならん(マアレ  
エの幽霊の助けを  
俟たず、斯く連れ  
歩かることなくし  
て我頑強の心も直

て一所に樂まうとし  
ない結果は、屹度、何  
の妨害も無い愉快な  
時機を失くしてしまふ。  
燻つた黴臭い事務所  
や塵埃の堆い部屋の中  
で自分自身  
の心から燻つてゐるよ  
り愉快なものが澤山あ  
る、其の樂み面白みを  
型なしにしてしまふと思  
ふのだ。私は伯父を可愛  
く思ふから好きでも好  
かないでも毎年其の時機  
を得させやうと思ふのだ。  
伯父は死ぬまでクリスマ  
スを毒づくだらう、併し  
内心結構な時を思はあ  
いわけふは行かない。だ  
から私は伯父に挑みかけ  
やうと思つてゐる。私が  
毎年クリスマスに好い顔  
をして出かけて行つて『伯  
父さん、ね變りはありませ  
んか』をいふのを聞いた  
ら、——若しあの可哀さ  
うな番頭にでも五十磅の  
遺産を残さうといふ氣が  
伯父をしたら、私は無駄骨  
を折つたのぢやない。で、私  
は昨日(283)伯父の心を感  
動かしたかと思つてゐる。』  
斯固陋爺を感動かしたとい  
ふので今度は皆の笑ひ倒  
れる順であつた。けれども  
皆がどれほど腹筋を燃つ  
ても彼は左程可笑がらず、  
且は御機嫌頗る斜あらぬ  
ので、皆を勧めて面白可笑  
しく戯れ、樂しげに茶を啜  
つてゐたのだ。

食後は音楽があつた。斯の  
一座は音楽好きであつて  
グレイやキャッチあどいふ  
俗曲を唄つたのを見れば、  
確か其の道の堪能家であ  
つた。わけてもトツバアは  
斯道の大家を以て任じて  
最低音を巧みに唄ひこな  
して額に疲れの大筋も出さ  
ず、顔を熱しもしなかつた。  
斯固陋爺の姪も際琴を巧く  
弾き、ほかいろいろやつた  
うち歌節を吹いたが(何でも  
無いもの、二分間で誰も  
會得せられるのだ)其の節  
は彼の過去のクリスマス  
祝日の幽霊ゴーストが示された通り  
斯固陋爺を小學校に迎ひに  
来た小娘が能く知つてゐた  
それであつた。此の一曲が  
奏せられると、幽霊ゴーストが示現した  
物事が悉く斯固陋爺の心  
に浮んで来た。斯固陋爺は  
いよゝ柔いでき、(284)以前  
斯の歌節に屢々耳を貸した  
から、ゼエコツプ、マアレ  
エを葬つた寺男の鋤に依  
頼せすも我が本心より我  
幸福の爲めに能く人情

りたらんに。(88)  
 七五—21 No more believe etc. 此の捉迷藏でトツバアが鬼になつたが彼は其目隠しをずるにオルク立回つて幾分か目隠しの中から見ゆる様にした。さて吾人の靴さきに目がついてゐるといふとは到底あり得べからざる。今トツバアがいかに見ゆる様を装ひ又他の人も實際見にはせぬと思つたが其實見はたとより信じられぬとは、向トツバアの靴さきに目があるを信じられぬと同様である。(此のno more believe... than I believe...といふ文句は眞面目なる論議に用ゆるものなれば作者が此所に用

めたるは滑稽ならしめんとてなり。(88)  
 七五—23 a done thing. 互に敵意を含めりと思はれたる二人間の詭計より成りし。蓋し此物トツバアとは男同士なれば他の婦人連に對し敵意を(勿論冗談に)含めるならん。他より思はれて即ち物トツバアの目隠しを爲せしならん。然るに案外物トツバアは結ぶに目を見ゆる様に爲したり。(86)  
 七五—26 an outrage of credulity etc. トツバアは目らしく見ゆ、仲間の者も眞に盲目なりと信じぬるに、然るにトツバアは兼て自分が大ボメせる阿滿娘のみ追ひかけたり、さ

を培養ひ得たであつたらうにと伏沈んでゐた。しかし一座の者は夜を徹して音楽にのみ耽りはしかかつた。暫くすると勝負事を初めたが、たまふは小供に返るのも好いことで、それふはさうして下された御方が嬰兒様であらせられるクリスマス程恰好の時は無い。お待ち！先づ掩目戲が初まつた、無論初まつたのだ。(85)で、著者は、トツバアの目が其の靴さきについてゐることを信じない限りは、彼が眞ツ正直に目隠しを締たやばは決して信じない。著者の意見は、(86)此のこぜたる、トツバアと斯固陋爺の甥との共謀に成つたので其の事は當今の祝日の靈が知つてゐる、と言ふに在るのだ。トツバアが紐飾胸當をつけた肥大娘ばかり追ひかけるおぼは、(87)吾人の輕信性を凌辱せるものである。火箸、火把を倒し、椅子を引くりかへし、大琴に頭を打ちつけ、窓掛の中よもぐつて息を詰めながら肥大娘の逃げるところを彼も追かけて行くのだ。肥滿娘の居るところは何時でも御存じなのだ。他の者

を誰も捕まへやうとは思はない。若し諸君が故意と彼に突かつたら(此の一座の意地悪がした通り)捕へようとしてゐる眞似をするが——是れ諸君の理解力を蔑視するものと言つべしである。——直ぐ又横みそれて肥大娘の方に向ふのであらう。此の娘も亦たび／＼狡猾いぜ言つたが、それは無論狡猾かつたのだ。併し遂に娘を捉まへたやば——娘が絹の裾をさやつかせて大周章より抜けんとしたにも係はらず、逃れがた無い室隅に追ひこんだとき、——其の時のトツバアの仕打は實に憎かつた。見定めが付かぬからを遁辭を設けて、其帽子に觸つて見て、其の上、指輪を頸輪を厭へて見て、間違ひないことを確かめる必要があるからと言ひ譯をしたのは——「醜かつた、恐ろしかつた！」他の者が代つて盲鬼ふなつたので此の二人は窓掛の後ろで大層／＼／＼仲よくしてゐたとき娘は疑もなくさう囁いたのである。

斯固陋爺の姪は捉迷藏には加はらず輕暖い室隅の、幽霊と斯固陋爺

れを彼れが目の見  
 る様に目隠しを  
 占めしとは明瞭な  
 り。作者故に曰く  
 (例晋人を笑はせ  
 んとして) 他の者  
 はトッパアを眞の  
 盲目なりと信ずる  
 にトッパアは其行  
 爲上其目の見はし  
 とを示すが如きは  
 是れ晋人の輕信性  
 を侮辱せるもの也  
 と。(此のあたり例  
 に因て例の如く御  
 大層の文字を使ひ  
 て原文は非常に面  
 白可笑しく描いて  
 あり、右ふ原文を  
 見て其妙味を味ひ  
 玉へ)。(287)  
 七六一4 confident-  
 巨人間の脚を越へ  
 て小聲にメチャク  
 チャ長々と陸言を  
 してれる。  
 七六一8 For the  
 sharpest needle...  
 ...was not sharper  
 than Scrooge's

ルーシは非常に鋭  
 利なり。(非常の  
 心力を現はす人を  
 he is as sharp as a  
 needle ぬいぢは滑  
 稽なる俗語なり、  
 best white chapel...  
 ..... in the eye  
 ホワイトシヤベル  
 は往時針製造を以  
 て有名なる所なり  
 。故に此の一句の  
 意は、該所にて作  
 れる針、ミンと糸を  
 すり切るとなしと  
 保証付の最上精選  
 のものなり。Dunt  
 as he look it in his  
 head to be. スクル  
 ーシが鈍さうな仕  
 方を装つたにも關  
 はらず。(288)  
 七七一5 made a  
 show off 見せびら  
 かす。とらふ熟語  
 故に此では見世物  
 にすると也。

が直ぐ後ろにゐたところで大椅子と脚臺を托して樂々としてゐた  
 のである。併し勝負事は皆と一所ふやつて「私、貴方が可愛い」とい  
 ふABC廿六文字を順に言ふ遊びをやり、又當て物でも非常の技倆を  
 顯して自分の姉妹を全く打劣かしたので斯固陋爺の甥が内心恭悦であ  
 つた、トッパアが諸君に示した通り姉妹たちもなか／＼の豪の者であ  
 つたのに。其の一座は老若を通じて二十人もゐたが、何れも皆遊戯  
 に加はつた。そして斯固陋爺も加はつた、——其の場の興味を釣り込  
 まれて、我か聲は一座の耳ふは入らぬやいふことを全く打忘れて折々  
 は自分の推量を聲高々を口よ出したが又しば／＼巧みお言ひ當てたの  
 である。(288) ホワイト、シヤベル精製の鋭さは此上無い、其の針溝で糸  
 を磨りきると受合無しやいはれる縫針でも斯固陋爺の鋭さには及ばな  
 んだので —— よし務めて鈍さうな風を装つても。  
 幽霊は斯固陋爺の此氣持になつたのを見て大よ喜んで、彼が此の一座

の散會するまで此處に逗留してゐさせて、小供のやうお言ふのを機  
 嫌好く睨つてゐたのだ。併し其の願ひは叶ひがたいと答へたのであつ  
 た。

『新たな遊戯が始まります。半時間、幽霊の、唯ツた半時間。』  
 それは「はい、いゝね」といふ考へ物で、斯固陋爺の甥が或る事を考へて  
 場合に應じてはい、いゝねを答へるのを、他の者が當てるといふので  
 あつた。射出してくる忙しい質問の矢に彼は智慧袋から引き出して答  
 へた。或る動物、生きた動物、むしろ可厭な動物、猛悪な動物、折々  
 は唸つたり吼へたり、そして折々はものを言つて、龍動ふ住んで、街  
 中を歩き回つて、見世物には出されあいで、誰にもつれられなくつて、  
 動物園ふはゐかくで、決して道で撲殺されなくて、うして馬でなく驢  
 馬でなく、牝牛でも無く牡牛でも無く、虎でなく犬でなく、豚でも猫  
 でも熊でも無いものを思つてゐるを言つたのだ。新たな質問を問ひか

けられる毎に此の甥は新たな大笑をして、ろして椅子から離れ脚掛臺を退いて立ち上らずおはるられぬほどくすぐったくて堪られぬのであつた。が終ふ例の肥大娘まるぼんやが同じ様に笑ひ倒れながら喚き出した。

『わかつてよ、わたし。わたし、それを知つてるわ、知つてるわ!』

『何だね?』

『それね、あのね、貴郎のね、伯父さんの斯固陋スグレウツツツ——爺さん!——!』

さうであつた、確かふ。満場の拍手喝采——或る者は『熊であるか?』

の答へは『は』とあるべきで、否定的の『い、え』では、常々斯固陋爺といふものゝ傾いてゐる一座の考へを十分うれから引き放すから、せ異論を立てたのではあつたが。

斯固陋爺の甥——『伯父は吾々を非常に娛しました、全く。其の健康を祝して祝盃を上げあいでは失禮だ。其の時の用意ふせ此所に薄酒の瓶が備へてある。うここで私は『斯固陋爺さん!』』

七七一 answer in the negative etc. 此めさびのうち誰か「熊ですか」と問ふた朝は「い、え」と答へたるものを見ゆ、故に其間ひを發せし者異議を申し立てて曰く「い、え」と否定的の答へでは折角スクールシと思つてゐた者の考へを全く他へ轉じて再びスクールシのこゝ念頭に浮ばず即ちスクールシといふとを發見するに難し云々。

『さう、斯固陋爺伯父さん!』と一同が叫ぶ。

『何でも彼でも斯固陋爺伯父さん、クリスマスおめでたう、新年ためであう! 私からのね祝ひはね受けあさり度は無からうが、それはそうでも受けて下さい。斯固陋爺伯父さん!』

斯固陋爺伯父さんは覺はず識らず面白く、心が軽くあつて、若し幽霊ゴーストが時間を與へたなら吾在りやば知らぬ一座の者に返盃して彼等ふは聞きとりがたい謝辭を述べたはせであつた。併し甥の語が終るをせむに此の場の全景掻き消えて斯固陋爺と幽霊スプリットは再び旅行の途に在つたのである。

兩人はいろいろの物を見て遙かの旅路を歩き過ぎたのである。で、諸人の家庭を訪づれたが、何時も皆満足ふ思つたのである。病床に臨めば患者も愉快げになる、知らぬ他國に在るものも吾が家に在る心地する、渡世ふ藻掻いておるものゝ所に行けば、末の世をかけて辛乏強くある、

七八一 II Pleded. 祝盃を傾けた。先づ飲んで其盃を他人に獻ずる。

七八一 20 Strung. 貧苦の窮つておる人々。

七八—23 where  
vain man etc. (スクリューの如き) 馬鹿な意地わるでもクリスマス考へ及クリスマス幽霊を招待することを拒まなかつた故入りこんで幸福を興へ、それから幽霊はスクリューに親切にし優しく(他人に)せよと教訓した。  
七九—1 children's  
Iwealth Night  
Party. クリスマス後(二十五日後)の十二日は即クリスマス休暇の最後の日なり。英國にては此日に特に小児のために祝祭を行ひてクリスマスにお暇をひをさせる風習あり。(289)

貧乏者も大富源の心地したのだ。養育院、施療院、恐ろしい獄舎の中を音訪れても辛苦艱難の潜伏する板屋を尋ねても、假初にだに基督の恵みを知つてゐるものは、戸を閉ざして幽霊を閉め出すやいふとは無かつたので、幽霊は祝福を祈りこんで、其所を立ち出でと斯固陋爺も、世は情けで持つことを教へてゐた。

もし是れが唯一夜であるなら長い夜であつたが、斯固陋爺は是を疑ぐつて、クリスマス休みの自分が自分等二人の過ぎこしただけの時間に縮まつたのかと思つたのである。其上、斯固陋爺は外から見たところ何の變化も無いに、幽霊は年を取つた、確かに老けたやいふとも怪しむべきである。斯固陋爺は斯の變化を見たのであるが、(290)クリスマス休暇の末日ふ小供の爲めお開いた座を辞し去るまでは何事も口に出さずゐた。其所を立ち出でと野外お幽霊と連れだつてゐた時其の頭髮の白くあつたことを心付けた。

『貴方がたの御壽命はどうも短かうござりますかあ。』と尋ねると、

『此の世でのわしの壽命は東の間——今宵が最後ぢや。』

『今宵が！』

『今宵の真夜中。あと、其の刻が近づいた。』

を言ふや鐘が十一時過ぎの四十五分を打つた。

幽霊の長衣に目を慥をつけて斯固陋爺が、

『此のやうなれ尋ねして好いか悪いか、無禮な奴を叱り受けるか存じませぬが、何やら不思議な、貴方さまの軀ども思はれませぬ物がお裾から突き出しております。お足でござりますか、それをも爪でがなありますでござい。』

『爪かも知れん、肉が付いてゐる』と哀れげに答へて、

『これ見よ。』

裾の褶から二人の小供が現はれた。——哀れを、卑しい、恐ろしい、可厭

七九—27 where  
Graceful youth.....  
此一節文字を追うて譯したがければ意譯したり、諒せられよ。Gilded their features out. 丈夫な

子供の如く顔が圓々して来る。touch-colorをつけられた、彩色した。freshest tint. 小供に特有の色。a stale and shrivelled hand. 「飢」の手。where angels might have sat. これは容貌特に目について言へるならん。天人の屬性にして塵々人間の容貌に見ゆる眼明、慈悲、温和等の色はなく、惡魔の屬性なる瘡狂兇惡の現相はれたり。(290)

八十一 9 a lie of such monstrous magnitudes 途方も無い大ウソ(即ち可愛らしき子供とSMY)。(291)

八十一 12 I see that written etc. 小供の面上に文字が見え

ておる、之を塗り消さないなら小供及び社會の毀滅を引き起す。

八十一 13 Deny it... And abide the end. 作者此に市民の貧民に對して同情を缺き之を救済するの甚だ遅緩なるに發憤し、クリスマスの幽霊の口を借りて反語を以て其市民の常に爲せる所を更に奨勵し撥挑せんとす。而して最後に曰く、龜途倥傯の行爲を勞めよ、終に社會は極度の叱罰を受けて七じ果てんのみぞ。(292)

か、慘怛な。彼等は其の足下ふ拜伏して、上衣の外側みすがりついた。『お、見よ、吾が友、此所を見よ！』を幽霊が喚く。

それは男女の小兒であつた。黄色な、瘦せ枯れた、襤褸を纏うた、澁面の痕のやうな子供であるが、けれども身を謙遜つて平伏してゐる。(290) 全くの幼子も丸々と肥れて顔の色鮮やかあるべきであるが、年老いたるものゝ如く瘦せ衰へて、皺の波打ちよせて、小供らしい柔嫩さは壊られ盡してゐる。神人天女が慈愛温雅の面影は無く、惡魔の潜めるかど恐ろしい目角で白眼んでゐる。いかばかり怪異を極めた異形の人間でも、貧苦がさせた罪咎の塊りと思はれる、此の小供の戦慄たつ恐ろしさは無いであらう。

斯固陋爺は面色を失つて後さまに引き倒された。可憐兒二人を餓鬼の形相ふして見せたもろ、可愛らしい小供と言はうせしたのであるが語が自づせ塞がつて、どうも(291)途方途徹も無い大嘘言に加擔せぬのであつた。

『幽霊殿、れ前さまのお子様で？』斯固陋爺には斯の上の語は出ぬのである。

幽霊は兩兒を見下ろして、

『是れは人間の子ぢや。親爺が關係はぬので、それを愁訴うため、わしに取りついていたのぢやが、子供は文盲で、娘の子は缺乏せいふ名。二人の者とその條件に氣をつけて見ろ。就中此の男の子に目をつけい。前額に惡運と書いてあるが、智育德育で塗り抹さん時は此の子自身の墮落、引いて社會の破滅は免れがたいのぢや。』

吾が手を首府の方ふ伸べ廣げて幽霊は怒罵し初めた。『(292)何のそれしき！懸念なせそ！社會の暗黒に目を注ぎて汝たち市民を警しむる烏乎の痴人に口あかすか！汝たち利己の目的を、注意して極悪を培へよ、培へたて、生ひ茂らせて、最後は如何に、待つてね

八十—81 Are there  
no prisons? etc. 我  
が嘗て口をせし語  
を目前ゴーストに  
引用するはスクル  
ーシの感如何。

八十—82 The bell  
struck twelve. 十二  
時の鐘聲。ウー  
文情絶世。豈打鐘  
の餘韻のみならん  
や。(293)

れ——』

『あ、助かる手段は——ござりませぬあ?』と斯固陋爺が喚く。

是れを最後に幽霊は斯固陋爺も向き直つて、

『牢屋は無いかな? 授産場は?』

(293) ヒーン——真夜を告ぐる鐘の音。

幽霊は、と思つて見回した、が影も形も。十二目の鐘が震動し終つた

とき、老マアレーの豫言を思ひ出して目を上げて見ると、凄まじの姿

の幽霊が長衣大帽をつけて地を掩ふ霧のやうに我れに向うてくるのを

認めた。



第四齣

第三の幽霊

(294) 徐々と、嚴かに、黙して幽霊は近づいた。我が傍にきたとき斯固陋爺は膝を折つて屈んだ、——幽霊が浮んできた虚空は一種の憂鬱と神秘どが蒔きちらされてゐるやうに思はれたので。

頭も顔も軀も隠れるほど大きい黒衣をつけてゐて、見ゆるのは伸べ廣げた手ばかりである。是れなかつせば闇みに取りまかれた形相を見わくることは難かつたのであらう。

我身近くきたとき氣がついて見ると、丈高く威風あつて其の怪異の姿に吾れを襟を正すほど恐ろしく思はれたが、幽霊は口さかず身動きもせぬので、其れ以上はわからぬから、

『私は未來の祝日の靈殿の御前も参りおりますので?』をたづねた。

尙は返事はせず幽霊は手をのべて前方を指さしたのである。

八一—82 gloom  
mystery. 此の第三  
のゴーストは物言  
はず語らず全身凡  
て黒衣を以て掩は  
れ而して更に暗黒  
の間に包まる、其  
憂鬱、神秘なるも  
宜なり。スクルー  
シが恐懼措かず其  
正体相を知らんと  
欲するも尤もな  
らずや。蓋し此ゴ  
ーストは斯固陋爺  
に其未來を示すも  
の、其最後を示す  
もの——實に其死  
、凄慘目々を向く可  
らざる死状を示し  
て終に頑迷固陋の  
スクルーシも後悔  
自責、全く至善至  
愛の男と生れ代ら  
しむるものなれば  
其ゴーストも自ら  
凄慘、沈黙、威風、  
崇嚴なるべき也。  
(294)



『過し方では無く、私の行末よ起ることをお見せ下さらうとなさるのでござりませうか、幽霊どの』と又語を續けた。

其の頭を傾けて首肯かんとしたやうな衣服の胸のあたりが一寸皺をよせた。是れが唯一の答であつた。

今は幽霊どの立つに慣れたのであるが、斯固陋爺は其の無言を大層無氣味お思つて、脚が震へて、蹠いて行かうとしたとき立ち上れぬはゞであつた。其の様子を見て幽霊は恢復の猶豫を與へて一寸立ち止まつた。

併し是れは斯固陋爺にやつて一層不幸であつた。黒衣の背部に幽霊の目が付いてゐて、凝乎どわが方を見詰めており、そして自分は精一杯見はつても例の手と一面の闇のはか何一つ見ぬ、其の何をも言へぬ恐ろしさよます〜軀が縮まつた。

『當來の幽霊殿、お前様は是れ迄に目お掛つた何誰よりも恐ろしうござ

りまするが、私を善い者にしてやらうの思し召しといふことを存じてねり又私も是迄には生れ代つた生活を致したう存じますもゑ、辛乏して供せうを思ひ且つは有りがたいこと御恩に着ております。口をおき下されますまいかあ？』  
けれども何の返答もせず、眞直に前方を指さしてゐる。

『御案内下され〜夜も速々と更けまする、私には大切かい時でござりまする。いざ御案内下され、幽霊どの。』

幽霊が向き直つて進み出したので、斯固陋爺も其の衣の陰影について行つた、——其の陰影が己れを曳きよせて連れ行くものと斯固陋爺お思はれたのである。

市街お入り込んだとは殆んど思はれず、寧ろ兩人の周りに市街が湧き出して吾等を取り圍んだやう。併し兎に角兩人は首府の真中お居た——夥多の商人が忙がしく上り下りし、衣籠の中で錢をぢやらつかせ、群

八二—12 It is  
precious time to  
me. 貴重なる時、何  
となれば彼が神に  
近き人として再生  
するの教訓を與へ  
らるゝの時なれば

八二—23 United  
thoughtfully etc. 商  
人は互に話し或は  
商賣について思案  
しつゝ居る間も何  
か始終精神不安け

に時計の鎖、鎖につけたる飾りの印など手弄ぶものなり。シールズは原は印なりしが後世に粧飾として時計の鎖に付せらるるに至れり。

八二—29 either  
「然りと否と  
か肯定或は否定の  
答、彼等の話頭に  
上れる死者(勿論  
スクルージの未来  
の身なり)は突然  
死せしや、富強を  
して死せしや、諸  
人に哀れがられて  
か、嘲られてか—  
然りと否とも  
知らずとなり。

八三—3 God  
knows.此の語は I  
do not know 5

ふとを不敬侮慢の  
意を現はして言ふ  
なり。此男のアク  
ヒせるは其死人に  
何等の同情なきを  
示して餘りあり。

八三—15 I don't  
mind going etc.死  
者の葬式に會葬せ  
しものに小遣假を  
供するは當時の習  
慣なりし也。此男  
冷語して曰く死者  
に對しては無頓着  
なれど御馳走が出  
るなら随分會葬し  
てもよしと (S.S.)  
八三—20 I never  
wear black gloves  
etc. 當時富者の家  
族に死者ありて親  
戚知己の會葬を得  
れば其會葬者に其  
時に使用する黒手  
袋を給するが常習  
なりき。而して其  
手袋は勿論其後と  
ても使用して差し  
支へなし、故に此

第三の幽霊

つて話し合ひながら時計を見ては又鎖につけた大金の飾印を手まさぐりつゝも何か頻りに考へふ耽つてゐるなぞ斯固陋爺が屢々見受けた儘の商業取引所ふ兩人は來てゐたのである。

幽霊は商人の兩三人塊つてゐるそばふ立ち止まつた。例の手で其方を指してゐるのみ氣がついて、彼は其の會話を聞かんや進み寄つた。

「いや、其所のやところは如何とも私よく存じませんが。たゞ死んだつてことは聞きましたんで、」と恐ろしい大願の肥太男が答へる。

「はア、何日死亡しましたんで？」他の者が尋ねた。

「昨夜でございましょう。」

「へい、一体如何したので？」や又一人が、非常な大箱から喫煙草を多量に取り出しながら「何だつて、どうも死んだぞは思はれませんかア。」

「お釋迦さまでも御存じあるめへ、」や初めの肥太が欠伸をしながら。「財産は如何片をつけましたかあア！」赭ら面の男が、鼻ささみ垂れて

ゐる瘤を七面鳥の腮肉のやうふ揺つて尋ねた。

するや例の大願が又欠伸をして、「聞きませんか。組合人にでも残しましたか、屹度。私ふは譲らなかつた。うれツさりでごわす、私の知つてるのは。」

此の冗談は衆の一笑を博した。

大願は續けて、

「が、葬式は素適ふ安値くあがりませうて。誰だつてあの人の葬禮ふ立たうとは、それや思はれないや、全く。一つれ互ひが連中を驅り集めて志願兵にあつたら——とでござんす!？」

「(S.S.) 齋食にありつけるなら行つても宜うごわすな。けれどれ供ふ立つから御馳走ふならんぢや濟まささい、」鼻瘤が抜目がある。

するや又一笑。

最初の肥大が口を開いた。——

場合では手袋一組  
 を獲得し得るなり  
 。然るに此男は曰  
 く予は黒手袋を望  
 まず常に其後之を  
 使用せんとは思は  
 ずされは命葬する  
 も何の得る所なし  
 也。(206)

八三—24 Bye, bye!  
 グッドバイなり。  
 (稍やチドケたる  
 陸まじき意の)

八四—1 made a  
 point. スクルー  
 は此人達に自分が  
 商賣に敏捷適當し  
 た男と思はれんと  
 注意してゐた。

八四—6 Old  
 Scratch has got etc.  
 惡魔が我所屬の者  
 の所へ連れ行かれ  
 た。(此二人もスク  
 ルーシの話を話し  
 居るなり。彼等も  
 スクルーシの商業  
 上手なることは承知  
 し居れり、併し同  
 時に其人格を嘲つ  
 て、惡魔が彼を取  
 った即ちスクルー  
 シが地獄に落ちた  
 とは言ふなり。)  
 (207)

八四—17 attach  
 importance to 重ん  
 ずる。

『いや此の中では私が一番清廉きんぱいです、兎ふ角。私は(206)黒の手袋を穿め  
 やうども思はぬし、御馳走も狙ひません。けれど他ふ何誰かお出で  
 にあるなら私も参ります。考へ出して見るを私どうしてもあの人と別  
 懇な間柄であつたせしか思はれません。何故とれ言ひなさい、顔を  
 合したたんびにお互お立ち止つて話しをやりましたからな。や、どう  
 も、何れ又。』

話し手も聴き手も散らばつて他の群々に混つた。斯固陋爺は人々を承  
 知してゐたので、今の會話はなしの説明を聞かうと幽霊を見向いた。  
 幽霊は街上にすりぬけて出たのである。例の指で、立ち話しをしてゐ  
 る二人の者を指したので、今の説明は此の中ふあると思つて又耳を  
 澄ました。

此の二人も亦能く知つた人であつた。商賣人であつて、大金持の、且  
 つは有力者である。であるので斯固陋爺は常ふ此の二人に評判好かれ  
 を努めた——商賣上からである、嚴密な商賣上の点からである。

『お早やう！』を一人が。

『や、どうも、』をかへした。

『(207)赤鬼も到頭やられました、へい、』と嬉しそうふ、初めの男。

『左様だそうぞ、』と他の男はかへして、『此の寒さは！』

『クリスマスでございませう。此様なものでせう。貴方は氷滑りをおやり  
 ぶあんなさ。』

『いや、どうしてうれどころぢや。どうもいろ／＼忙がしうござから。  
 さうなら—』

他は一言も。——是れが此の二人の出會ひの、會話はなしの、そして分  
 袂わかであつた。

斯固陋爺は幽霊ゴーストが餘所目ふはまこぞお些細な會話はなしを重んじるのが最初  
 には合点行かぬのであつた。けれども其の會話はなしは何か外面おもてふ表はれ

八四—27 Especially to observe etc. スクルーシは我未來の影より何等かの教訓を得んとして特に其影に注意せんと思ひ付きたり。彼は既に夫れを見たり(即彼の死人)されど自身には未だ彼死人の吾が未來の影なることを知らざりき。(208)

八四—29 for he had an expectation 此時に至るまでユーストのスクルーシに示したるとは皆彼には一種の謎にして更に理解する能はざりき(彼は示現せられし陰影が吾が身と關係ありとは思はざる故に)彼は一度は

ぬ目的があるに相違ないと確かと思つたので、それは何事らしいかぞ、つくづく考へ初めた。——元の組合のゼエコップの死と關係があらうぜは殆んど思はれぬ、それは過去のとぞして此の幽霊の領國は未來なので。と言つて、其の話しの當てはまる我が身と直接の關係があるぜはせめても考へられぬ。けれど誰の身にあてはめるぜしても我が身の修練に何か隱密の教を含んでゐるとは少しも疑ひないので、聞いたゞけの語、視たゞけの物は皆記憶してれかう、うして我が身の影が見えたら(208)わけて氣を付けやうぜ決心した。これは當來のわが身の行為が、失くした緒口をわれふ與へて是れ等の謎の解き方を容易ふするであらうの希望をもつたからで。

彼は日頃居馴れた其の場所で我が身の姿を見出さうものを見まわしたが、けれど居馴れた室隅すみには餘人がゐて、時計は自分が其所そこに坐る例の時をさしてゐるのに、玄關から押しこんだ商人仲間のうちゝ我が

此影と吾身との關係を發見せんと望めるなり。

八五—6 thought and hoped etc. 彼は商賣替して全く別人たらんと欲せし也、今商人中に吾が姿の見はざるは彼の未來の身が過去の我が身と相違せる故に此場面には(我在りとするも)見はざる物と思ひぬ。

八五—20 disfigured their offence etc. 可厭な臭氣、塵埃、生物を曲りくねつた街上にさらけ出した(ストレンジリング) crookeded の意。

八五—23 a low-browed, beetling shop, etc. 店家の構造は一寸人の面に似たり、故に作者

身の肖顔は更に見えぬ。併しながらこれふは少しも愕かなかつた。彼は心中こころに商賣替へをせんものどつくづく思つてゐて、此座に見えぬのは此の新出來の決心が實行されるものと思ひ且つは望んだのである。

例の静かしずかな朦朧フアンタムな幽霊は手を押廣げて我が傍そばに立つてゐる。思索に耽つてゐた現の夢から蘇ると、手の方向と我に對する幽霊の位置アソウイから見ぬ目が鋭く我を見詰めてゐるのが見えた。戰慄がされて言はれぬほど悪寒おそろひをおぼれた。

兩人は繁忙まじはち此所を後にして市中の暗黒の、斯固陋爺ゴツコロジヤが嘗て足踏みしたとの無いところへ行つたが、併し其の位置そこを其所の悪名とは認めることが出來た。路は汚く狭く、店も家も慘怛みじかであつて、住んでゐる者は皆半裸躰はだかみで酩酊めしてゐて、不躰裁ふしだら醜みにくい。闊路くわつたも陋巷ろくがうも、澤山たくさんに汚水溜せうすいだめ同様、むかつくやうな臭氣、塵芥、男、女、小供、猫、犬などの生物を、曲折した路上じくせつしたじやうじやうに吐き出してゐて、到るところ罪惡ざいごを不潔

はロウ、プロウト  
と書いて Low  
pitched と書かず。  
ピトリングは真  
直ならずして前に  
突き出る意、故に  
時として額の出た  
る人に似せて棟な  
ぎに斯く用ゆ。(29)

八六—8 who was  
not less startled etc.  
此三人の出逢は思  
ひかけずなりき。  
皆各、死せしスク  
ルーシの品物を盗  
みて此家に賣りに  
来りしなれば何れ  
も真心に咎められ  
て愕きしなり。黒  
仕立の棺桶かつぎ  
も、互ひに喫驚せ  
る二女を見て同じ  
様に喫驚せり。(30)

と凄惨で掩はれてゐる。

此の無慙の巢窟の遙か奥かたひら片廬をかけた(29)眉間の狭い、出額たでこの店があつて、鐵器や檻樓や、陶器や、骨類や、脂肪の吹き出した腐肉を商つてゐるのがある。又家内の床の上には錆びた鍵、釘、鎖、蝶鉸、鏝秤、分銅、いろ／＼の鐵屑が積み重ねてある。精査して見たいと思ふ者はまづ／＼少い「秘密」が可厭な檻樓の山、腐つた膏、骨や何かの塚の中に育てられ埋められてあつた。商賣物の中の、古鐵葉で作つた爐のそばふ七十近い白髮爺が坐つてゐて、綱ふかけわたした種々雑多の檻樓布ぼろきれの不潔な窓掛やうのもので外の寒風を防けて、心静かに隠居した樂み此の中に在りといひたげふ煙草を吹いてゐる。

斯固陋爺フランドムを幽靈が此の親父の前よきたとき(30)丁度重い包みをもつた女が店へ潜みこんだ。と思ふか思はぬ間ふ又一人同じ様なものを背負つた女が入つた。すると直ぐ其の後ふ蹠いて色褪せた黒仕立の男が—

—互ふ目を見張つてゐる二人を又目を睜つて、これは／＼とばかり。

啣へ煙管の親父とともふ暫し新參しんさんの三人は茫然自失してゐたが、頓がて三人とも笑ひ倒れたのである。

最初に潜みこんだ女が我鳴り立てた。——

(30)『搦ははいで下さい、それは日傭取りの私が一番ふさまつてますよ。うれから洗濯屋のお婆さんが二番ふさまつてますよ。それから棺はこ桶かぶ擔かぎのね前さんが三番ふさまつてますよ。だけどもね、古物屋のね爺さん、これはふんをふ思ひかけずですよ。何だつてまるつきり知らないでながら三人が邂逅あひまふなんてね。』

古物屋の老爺おやぢジョウが口から煙管を取つて、

『斯うも都合好う出逢うちうは無ないもんぢや。まア居間へござらつしやれ。あんたは何時いつも彼所あそこが甚こお好きあんぢや、のう。た二人も知らん人ぢやあいけに。まあ待たつしやい、今店の戸を閉めう。たう、ねら

八六—14 Let the  
charwoman alone  
to be the first, i. e.  
do not trouble  
yourself to offer  
any assistance to  
the charwoman, to  
enable her to be  
first (in seeking to  
get money etc.)—  
she is sure to be  
first, without any  
help. (by C. M.  
Bradbury.) (30)

八六—15 You were  
made free of it. 汝  
は常に其内に歡迎  
せらる。

八六—23 how it  
shrieks— 反古屋が  
戸を閉めた時戸の  
錆びた蝶鉸がキン  
ンだ。There ain't  
etc. ャモウは古き  
機物を賣買せるな  
れば其品物は何れ  
も非常に錆に朽ち  
たり。曰く此家の  
戸の錠は店先の何  
品よりも更に錆び

たりと。又曰く、  
店頭種々の骨類  
あれども吾れは  
の古骨はなしと。  
(302)

う軋むのう。(302)店の鐵物も錆が出とるが斯の蝶鉸のやうなのはあれやせまい。は、わしはどの古骨も亦店頭無、のう。古物屋にはわしや肖合うとる、いや好い仲間ぢやて。居間へどざらつしやれ〜。』居間をいふのは襪縷暖簾の蔭の空き間のことをである。老父は古い梯籠の壓鐵で火を爬き集め、煤ぶつた燈火の燃ゆるわがりを(夜なので)煙管で落して又口ふ持つて行つた。

此の間に、先きふ喋舌り立てた女房は包み物を其所に投げ出して驕り顔ふ座を占めた、膝の上に肘を組んで、ほかの二人を無遠慮に馬鹿にしたやうよ。

喋舌女が初めた。――

『(303)何の違つたことがあるもんかね、何の相違が、ねね、ディルバさん。誰だつて自分のためを思ふもので。彼の人も始終さうだつた。』夫れはもう其の通り、さうですともね。あんぢ人つちや有れあしを

入七 5 What odds then i. e. what differences does it make (it= our conduct in stealing the dead-man's things) (303)  
入七 11 who's the wiser? = who knows any more about our thieving, in consequence of our accidental

meeting here, than he knew about it before our meeting? We are not going to pick holes etc = of course we are not going to expose each other. 入七 14 We should hope not = of course not, certainly not.

し、』を洗濯婆が相槌を打つ。

『は、だからお婆さん、そんな可怕可恐して立つておるでございせん。誰が知つてるもんですか。素より又た互ひが告げ口しやうた仕ちやあいなだし、さうでせう。』

『如何して。さ、ね、さうしてそんなと』とディルバを棺桶擔ぎが一齊に。

『ねね、さうして。それでもさう何事もあれやしさい。これんばかりの物をくしたつて誰が困りませう。兎も角死んだ者あ困りやうがございせんね、ねね。』

『さうですとも、』とディルバが笑ひ乍ら。

日傭女は尙ほ饒舌を續ける。――

『死んでから剝がれたくないなら、あのげぢ〜の慾張爺め、何故生きているうち人らしいことしやがらねへんだ。人情ももの知つてたら一人

入七 8 natural = 人情深く。

や半分ぐらゐ、あいつが息を引取るまで世話あしてやつて、唯ッた一人ぼっちで揉搔き死する筈あござんせんども。

ディルバ——『どうせもね、お内儀さんの被仰る通り、それに違つておし。あの爺さん、罰が當つたんですよ。』

『もちつを酷い罰を當てこやりたかつたよ。わたし、もつせ色々の物奪つてきたら、ね、罰らしい罰をあてゝやつたんだのに。古物屋の爺さん、其の包みをあけて一つ値を踏んで見てねくんさい。大聲に明瞭——一番ふあけられたつてわたし怖かないし、お二人に見られたつて可いんですとも。(305)此所でお目ふかてる前に、もう彼所の家でめいゝ引裂いて奪つてきたと知つてるんでせう。罪あるもんかね。お爺さん開けて見てねくんさい。』  
而かも弱性を助ける(305)棺桶擔ぎの慇懃は是れを容さんで、色褪せた黒衣の男は先づ敵壘を冒さんせ、我が掠奪物を廣げたのであるが、う

八七一 We knew pretty well etc. 此三人はスクルーシの病氣中死後互ひに彼の下宿に出逢ひしとあれば互ひに其盗みせし事を知り居るなり。(304)  
八八一 gallantry 二人に親切なる心。(305)  
八八二 mounting the breach. 危険に逢ふといふ軍隊の

語なり。ブライチは破壊の意。此に此句は破壊に出かける意——無論非常の冒險的事業なり。

八八一 knock off half-a-crown. 半クワンより高く買ふのは素(二志半)だけ差し引くよ。

れは大した物では無かつた。一二の時計飾印と、鐵筆函と、袖口ボタンの一組と、そして高價は無飾ボタン、それだけであつた。反古屋のジョウは仔細に調べて評價して、それゝ購入れんを思つた額を壁の白墨で記して、もう此品さりとていふとと總々をした。  
古物屋——『是れがあんたのへ高ぢや。煎り殺されてもこの上一文も出せん。お次は誰さんぢや?』  
お次はディルバさんであつた。團圓の布を手拭、小汚あい衣服、古風の銀の茶匙二つ、一丁の糖餅、そして長靴二三足。其のへ高も同じ様に壁に記された。  
『わし、婦人の物をいふと何時でも高う買過ぎる、これがわしの弱点で、我れを損をする譯ぢや。さあ、これがあんたの總々ぢや。もちつを好う買へなとて異存を言はつしやるなら、わし容赦せん、半クワン(六六十錢餘)引き去るけに。』

『今度はわたしのをほめて見ておくんささい、反古屋さん』と喋舌が出かけた。

屑屋の爺はそれを開け易いやうに膝をついて、澤山の結び目をとめて、小黒い布の大きい重い巻物を引き出した。

『これは何ちうもんぢや、寝間掛で無いか。』

『あて、寝間掛ですよ。』を笑ひながら、そして手を組んで前よのめりあがら饒舌る。

『(306)あなた、未だ死人が寝せるのに鑲を是れう剣いでござつたのを私に思はせたいのぢやあんなさ。』

『いゝね、どうですよ。悪うござんすか。』

『あなたは金を儲くるやうに生れついたらんぢや。又ほんほに儲けさつしやつた!』

『それはもう、わたしの手が届くだけは皆んな掻つ浚つて、あんな奴だ

八八— 29 You don't mean to say. .... ジョーは此女が、まだ死人が横つてゐる床から、寝間掛とそれを臥床に結びつけた輪を盗み来りし大膽不敵に驚きたるなり。(306)

八九— 4 Don't drop that oil etc. 毛布を能く見んとジョーは手に洋燈を持ってゐたものならん。女は油垂りて毛布を汚さんと

を恐れて斯く言ひたる也。(307)

八九— 12 I am't so fond of etc. 露ほども死者に對して同情を有するにあらざる故若し然様な恐れあらば其物に手を觸れ或は其周囲を徘徊すると決して無し。

八九— 16 They'd have wasted it, etc. 或人(棺桶かつぎを暗に指す)が

つたつての紀念にしますぞも、屑屋さん』と冷かむ返答して、『(307)

あれ、油を毛布の上に垂らしちやいけませんよ。』

『あの人の毛布かあ?』をジョウが聞く。

『ほかに誰のがあるもんですか。なんに、屹度、死人は風邪引きやしません。』

『傳染病で死んだので無けれや可いが』を手を放して、つくづく見ながらジョウが言ふ。

『そんな御心配は御無用になさいました』と喋舌つて、『可哀相だを思ふんぢやござんせんし、若し可厭な病氣で死んで、染傳る心配があつたら、彼奴のまわりをうろつみやしません。ねこく目が痛くなるほど御覽なすつてもようござんす。其の肌衣には穴一つも無けれや又糸の寄つたところもありません。彼奴の物のうちで一番良いので一番美しいのだもの。何誰か、徒爾な仕ちやつたんですよ屹度、わたしが氣



が取つて来たのだ、私  
は。

八九—23 It's quite  
B becoming etc. 誰  
にでも能く似合ふ  
。(body = anyman.  
He can't look like he  
is 即ち上のbodyは  
して than he didの  
Bは スクルーシな  
り。斯く別人にヒ  
イを解するは少し  
無理なれども動詞  
の時がちがふ故に  
差しつかへなから  
ん。) (308)

を利かして奪つてこなければ。

『むだみするた如何してん?』とジョウが尋ねる。

女房は笑い乍ら——『彼奴に着せたかりで埋つちまうんでさアね。何  
誰は十分さうするお利口さ。だけどわたしが無事に取りかへしたんだ。  
この肌衣は賣りこかしても仕あけあ何の益も立ちやしません(308)誰  
がきても中々よく似合ふよ、彼奴が着てた時あ胸が悪かつたが他の人  
が着れば極く良いんだとも。』

斯固陋爺は戦慄して此の問答を聴いてゐた。衆が例の洋燈の客あわか  
りの前に分捕品を取りまいたとき、よし彼等は市ふ死屍を競賣ふ醜絶  
なる悪鬼とはいへ其の之れに對する嫌悪憎悪の情は實に言ふべからざ  
るものがあつた。

反古屋がフランネルの財布を取り出して床の上ふ衆の賣り高を算へ出  
したとき饒舌女は笑ひ乍ら、

『はこ、これでね仕舞かね。彼の慾深さん、生きてるうちには衆んを可  
怕からせて寄りつかせあいで、おめでたくあつてからは儲けさせない  
で落膽させやがる。はこ。』

斯固陋爺は腦髓から爪さき迄がたたく震ひして、

『幽霊どの、わかりました。斯の不幸な人は私でござりませう。  
私の軀も今那樣成りかけた、情けあひ、これやまア何ぞしたとで。』

彼は驚いて跳ね返つた、場面が變つたので。今我が身は殆んど寢床、  
寢間掛けを刺ぎ去つた現出しの寢床ふふれてゐる。其破布團圓の中ふ  
何者か團圓を引被いでゐて、黙つてゐるのに恐ろしい聲が聞える。

此の部屋は非常ふ暗いのである。どんち風の部屋であるか知り度、或  
る秘密に刺激せられて見廻したけれども、餘り暗くて少しもわからぬ。  
外部に立上る青い燈火が真直に臥床ふ映した。見れば、刺がれ奪はれ  
放擲られて、涙を分ける者もかく世話する者も無く、此の男の軀が横

九十一—24 but had no more etc. 我傍のゴウストを追退けられる如く(夫れと同様に)蔽ひ物を取退けられぬ

九十一—26 O gold, gold, gold etc. 此一節は轉告法(陳述の旨意を轉ずる事)に因て死人に對して作者が自己の感慨を述べるもの也。されば予は文字通に譯し得ざれば大に意味を敷衍して置きたり。太く原文の簡潔嚴肅を損したるを深謝せざるべからず。『愛なく敬なき』云々の一句、原文には無し。斯る人の死して横はるを

つてゐる。

斯固陋爺が幽靈の方を見ると、手を頭部に確かと指してゐる。團圍をかけた体裁は無くて、彼が其の手を極軽く動かしてそれを持ち上げさへすれば直ぐ顔が出るばかりである。そうして見やうかをも思ひ、どんちみ容易く出来るかと思ひ、又さうして見たいのであつた。けれど、もう其の力があくて我傍の幽靈を追ひ除けるとの出来ぬ通り顔被ひを取り去ることが出来ぬのであつた。

(300) おこ冷やかふ冷たく、硬く、畏敬すべき「死」、汝の祭壇を此に建てよ——愛なく、敬なき守銭奴の、世人に卑しめられつゝ而かも怖れらるゝ「死」の家を作れよ。而して汝の權勢が能くする大恐怖を以て之を飾れ、これは死、汝の領國あれば！されど犠牲たるべきもの愛らしく敬ふべく、貴からんふは、汝「死」の力も加ふべきなく、其の五官をも厭ふべく爲し得じ。斯る人の死して横はるを見ん人の心中に湧くべき

見ん人の心中にわくべきは「亦原文に無し」汝この人に劍を加へなば「も同断。斯く敷衍せしに關はらず(敷衍せし故なるやも知れず)讀者或は此一節の譯文を理解し能はざるを恐る。須らく原文に直入して直覺すべきなり。(300)

九一—so They have brought him to a rich end. 此の rich end は無論ソイロニイ(反語)なり。(310)

は、其の手の重く、放さば振り下がらんこせあらず、心臓硬く、脈搏絶えたるこせにあらずして、其の手の、物惠まほしく打開きて、何人をも扶け親しみたげあ寛かふ、忠實しかりしとあり——善き人なりけるとあり。其の心臓の温かき情ありしとあり、其の脈搏の強く、確かなりしこせなり。擲て！死よ。衝け！死よ。汝この人に劍を加へなば唯汝自ら傷けんのみ。永恒の不死を世に敷かんため、彼の善行は其の瘡口より迸るべきを！

誰が斯固陋爺に向つてこれを語つたといふのでは無い。が、而かも臥床を見上げた時彼の耳が斯う聞けたのである。彼は考へた——若し此の男が今起ち上つたら其の眞先に起る思想は何んであらう。吝嗇か、深刻の行ひか、攫み取りの懸念か。(310) 此の死者が其の一生を貢獻して得た是等の思想は彼を光榮ある結果に到達せしめた、成程！

暗い空き屋に彼は、彼のこと此の事に就いて私に親切であつた、其の

親切な一言を忘れまいため私も親切ふしてあげやうといふ男も女も小供一人なく横はつてゐる。一疋の猫が戸を引掻いてゐて、竈の下では鼠の囁き音が聞えてゐた。これらの家畜は斯の死人の部屋に何を要するの、何故斯うも騒いで落ちつかぬのか、斯固陋爺は考へ見るふ忍びあかつた。

『幽霊どの、これは何といふ恐ろしい場所ござりまするぞ。此所は退いても此の教訓は決して忘れることではござりませぬ。退きたいものでござりまする。』

けれども幽霊は尚ほ揺かぬ指で頭部を指してゐる。

『合点しました。出来るあらういたしたいのでござりますが、けれども其の力がござりません、幽霊殿。其の力がござりません。』再び幽霊は己を見上げた。

『(311) 若し此市中に誰ぞ此の人の死んだため悲しむ者がござるなら其

九一 25 feels emotion. 感情を惹起す。蓋しスクルーシの意は死人を悲み悼むの感情なるべし。されどゴウストの示したるは(次節にある通り)哀悼に非ずして其死を喜び嬉しがる感情なりき。(311)

九二 26 could hardly bear etc. 父母が今や貧のため身を滅さんとせる、死苦の如かざる絶痛を更に知らず、小供は嬉々として相呼び相狂へり。豈に聞くに忍びんや。

九二 28 serious delight etc. 此男所謂死苦に勝る絶痛事に面色なかりき而かも今其面上に一種の色あり、スクルーシの死を知りて破顔微笑するを禁ずる能はず、されど他人の死を喜ぶは人情厚き者の忍びざる所故に之を隠匿せんと努む。而かも尚ほ不知不識顔顔婉容のほの見ゆるあり。(312)

の人を見せて下さりませ、幽霊殿、御願ひ申しまする、』と斯固陋爺は遣る方なく藻掻いて言つた。

幽霊は一寸其の前に例の黒い長衣を翼のやうに擴げ、やがて夫れをつぼめて、母親と其の子供々のゐる晝間の坐敷を現はした。

母は誰かを待つてゐるらしく心配さういらくしてゐる。部屋の中を行きつ戻りつ、物音のするたびに長ち氣立つて、窓から外を眺め、時計を覗き針仕事は掛らうとしては得掛らず、うして子供等の遊び興じる聲を聞くに忍びぬ様である。

待ちに待ちこがれた戸を叩く音がやつとのとで聞けた。女房は急いで戸口に行つて良人を迎へる。まだ若い男であるに心配に獲れた憂へ顔である。(313) けれど今其の顔著しく顯はれてゐるものは耻ぢて噛み潰さうとする喜びの色で、それを押し匿すに苦しむ体。

吾がために供へてゐる火の傍の膳は向つた。女房が小聲で、どんを容

子で、と聞くと(それは長い沈黙の後で、やつせ)何ぞ返事せうか、困つたやうみ見た。

『吉いのですか』と言つて語を促すためよ、『それとも凶いので。』

『凶い、』せの返事。

『すっかり不可あいんですか。』

『いや、まだ望があるよ。』

『あの人の氣が挫けるなら、』と女房は言つて驚いたやうよ『若しうんな不思議が起つたら、望みがあいでも無いでせうよ。』

『氣が挫け過ぎた。彼の男、死んだのだ。』

看板に詐欺無いから女房は氣の優しい、辛乏性の女であつたが、けれども死んだと聞いて胸の中では感謝したのである。又口に出しても手を拍つて其の感情を表したのである。と、直ぐ又其の過誤を詫びて、氣の毒も思つた。併し最初のが胸を割つて包み隠さぬ正眞の情であつた。

九二一—24 She prayed forgiveness. 前條(本貫入行以下)の解釋を見た。九二一—27 What the halfdrunken woman etc. 己があの男(メタル)に達つて(借金の)一週間の猶豫をして

た。

『(313)己があの男も逢つて一週間の猶豫をして貰ふとした時、昨宵ね前ふ話したあの生酔の女が言つたとは己も逢ふまい口實と思つたのだが、それが全く眞物も變つた。大病ばかりか、あの時あの男は目を落しかけてゐたのだ。』

『あの人の後を續いで自家の借金を強請るのは誰でせう。』

『誰だか知るものか、けれどももうれ迄には金を調へる、よしんば調へられんぞころが。あの男のやうな強突張の情け知らずが二人とある筈は無い。今夜は枕を高くして寝られるよ、カロリン!』

左様、兎も角に夫婦は心も軽くなつたのである。其の話はまるで解らぬ乍ら黙つて取りすがつてゐた小供も嬉しさうな顔をしてゐる。げに此の一家は此の男の死んだために幸福であつた。(314)この人の死も關して幽靈の彼も示し得たのは唯此の喜びの情のみであつた。

貰ふとしたとき昨夜お前に話した女(讀者は少しも知らぬ女)が(メタル)が病氣だと(從つて)めづらうとは思はれた。九三—5 Soften it as they would. at any rate (兎も角)九三—6 The only emotion. 九十一頁二十五行の註の如くメタルは悲哀の情を見んとを欲したるに實際其死を哀れなりと思ふ者一人もなかりしかばゴウストは死に關せし感情の唯一ツ歡喜をのみ示し得たり。(314)

そこで斯固陋爺はとうも飽き足らず、

『幽霊<sup>スプリット</sup>の、あの人の死んだのを氣の毒と思ふ温情<sup>やさしい</sup>ところを見せて下さりませ。でありませぬと今し方見せて戴いた暗い部屋が是れから絶えず私の目についてありませぬ、幽霊<sup>スプリット</sup>の。』

幽霊は斯固陋爺に馴染の町々を案内して通り行くとき彼は若し我身の見にもするかと彼地此地見回したが何處にも見當らぬのであつた。二人は貧しいボブ、クラチット——以前訪づれたクラチットの住居入りこんだ。すると母と小供たちが爐の周りに居るのが目ふ入つた。(315) 静である、非常な静である。例の小豆に立ち騒ぐ二人の幼子も室の隅の立像其の儘静坐して、一冊の書物を前ふした兄のビイタアを見上げてゐる。

それから母と娘とは縫物をしてゐたが、併し全く非常な寂寞<sup>しづか</sup>なので。『イエヌ即ち幼子を取りて弟子たちのうちに立たしめぬ。』

九三—20 Quiet very quiet. 此場面は、彼のクラチットの家にして其の不具の愛子チムが終に死せし(と斯固陋爺の夢に見し)なり誠は死さること最後にある如し(を一家の非常に悲哀せる所なり故に静か、甚だ静かなりと書き初む。(315))

九三—25 And he took a child etc. 新約全書路可傳四十七章九節の句。ビイタアがこれを讀みしなり。

九三—33 The colour hurts etc. クラチットの妻は愛子の死を悲みて泣き居れり。されど其泣きはらしたる眼を子供等に咎められんことを恐れて色が光つて目が痛しとかこつけしなり。(316)

九四—4 for the world. この句は前行の I wouldn't show に接して解すべし。

何處で斯固陋爺は是れを聞いたか。彼は夢にも見なかつたのである。

斯固陋爺と幽霊<sup>スプリット</sup>が此の戸口を過つたとき恐らくビイタアがこれを高らかに讀んだのは相違ない。何故彼は續いて讀まぬのであつたか。

母は針仕事をそこに横たへて其の手で顔を匿した。うして、『(316)色が光つて目ふさわつて不可なり。』

色が光る！あゝ、可哀さうに、チムちゃん！

『もう快くなつた、』とクラチットの女房が言つて『燈火<sup>あかり</sup>はどうも目によくない。ね父さんがお歸んますつたとき、泣き脹らした目を見せるはそんなことがあつても可厭。もうおツつけね歸りの時だらう。』

『過ぎてゐるくらゐです。』と我が前の書物を閉ぢながら『けれどお母さん、私、ね父さんは此の五六日、これ迄よりか少しもつくられ歩きだと思ふのです。』

再び非常な寂寞<sup>しづか</sup>してしまつた。

やがて又母は確かりした、喜ばしい聲で口を利いた——而かも一たびは確かに震へたのである。

『私はお父さんが肩に……お父さんが肩に、チムちゃんを乗せて駆けてお歩きの間を見ましたよ。』

『僕も見ました、たびく。』ピイタアが大声で云ふと、

『あたしも見てよ』と又一人が言つた。皆さう言つた。

母は縫物に凝然と目を付けながら、『けれどもお父さんは大層軽さうに連れ歩いてたんで、ちつとも邪魔とは、邪魔物おととは思はないで可愛がつてたいでたつたね。そらお父さんが戸口へ。』

女房が忙いで迎ひに立つと小男のポプは頸巻をして——是をしないと寒くてたまらぬのだ、可哀相ふ——入つてきた。茶が鐵網の上のせてポプの夕飯の用意が出来てゐる。誰れが一番能く給仕するかと衆ンなでやつて見た。うれから二人の幼子は父の膝に乗つて左右から父

九四—*It Sunday, etc.* 日曜日は死者のため寺参りするなり。此一家は貧しき故、日曜にあらざれば女房は外出するの隙な

し。上に眞人が日曜迄には其仕事済まん(故に日曜には女房も寺参りし得ん)と言ひし故女房は少しも早くチムの墓所に行き見てたく而かも隙なくて眞人のみ今日チムに逢ひに行きしを羨みて斯く言ふなり。(317)

九五—*If he could have helped it.....* 若し泣き出さずには堪へ得たらはクラチットは情にもろく無き証據にして即ち精神的に(今あるも)チムと隔り居るわけなりしなり(されど泣くことを禁じ得ざりき)(318) 九五—*I thought a little.* 今の大きに while を入れ「しを」を解すべし

の顔に我が可愛らしい頬をすりつけて、さる『父ちゃん心配しあいんだよ、泣いちやいやあ』といふ風。

ポプは大層の機嫌で皆の者と快さうに話してゐたが、そこにある針仕事に目をつけて妻と娘たちの出精すること、手早いことを賞めて、日曜まで十分出来上るであらうと言つたのである。妻は怨ずるやうに、

『(317)日曜でも貴郎はもうけふいらしたではありませんか。』

『うむ行つてきた。お前も安心したとであらう。けれども又たびく見るとが出来るよ。お前も安心したとであらう。けれども又たびく見るとが出来るよ。』

私は日曜は逢ひに来やうと彼兒に約束をした。あの、あの小さな坊子、どポプは聲を潤ませて、『あのチムの坊子め!』

こらへくゝてゐたポプの胸は一時に張り裂けたのである。とても泣かずおはゐられなかつた。(318)若し喰ひ縛つて涕噉らぬなら、彼と愛子とは心の仲垣一層堅く結ばれたのであるが。

九五—<sup>o</sup> seeing that he looked a little. スクルージの甥はクラチットが悲しさをな面してありしを見たり。作者「悲しさうな面」云々と言ひかけて急に筆を替へて直接にクラチットの言葉を引用せり。ポブは自ら「悲し」といふことを明言するを欲せず、己が少し悩んでゐた」と言ひし也。Sad or dejected といふ代りに新く little down といふは普通のことなり。(319)

父は座ふ得堪はず立ち上つて二階の間ふ行くと、其處には燈火耿々どともつて基督の像が掛けてある。ありし愛兒の直ぐ傍ふ一脚の椅子があつて、此の日頃誰か其所ふ、どうもぬたらしい。哀れやポブはそれゝ腰を下ろして暫しは思ひふくづをれてゐたが、氣を落ちつけて可愛兒の顔ふ接吻した。これも定業とあきらめて氣を替へ所々しく下りて行く。

皆の者は爐の周りふ膝を寄せて話してゐる——娘二人と妻は相變らず針の運びに忙がしく。ポブは妻子ふ、唯一度逢つたきりの斯固陋爺の甥の無類至極ふ親切なことを話しきかせて、けふ町で出逢ふと、自分少し(319)——

『ほんの少し己が悩んだようにしてゐた、あ、さうだ。』

それを見て、如何したのかと尋ねてくれたので、

『其の尋ねに己は包まらず事譯を話したのよ。——』

それは、もう滅法界も無い極々親切な人であ、誰だつてあんな方を見たとは無さよ。それはどうもクラチットさんほんどうにお氣の毒のとでございますね」と言つてな、貴方の可いお内儀さんにもお氣の毒でたまりません。だがあ、どうして夫れを知つてゐるか分らないことだ。

『何を、貴方?』

『なに、其の、ね前が可いお内儀さんだといふとよ。』

『それは誰だつて知つてます、』とビイターが大聲を出す。

『うむ、善く云つた、ビイター、さう言はれたいな、衆ンある。』可いお内儀さんふ、ほんどに氣の毒だつてあ、で、名札を己お渡しをがら、

『何でもお世話して上げるとが出来ますあら、此處ふ私は住居ます。さうかおいで下さい。』うむ、己の全く嬉しかつたのは其のいかにも親切な物言ひぶりな、世話をしてくれるの何のと言ふわけでは無かつ

九六一— Now, it wasn't etc. スクルージの甥の親切な言葉がほんどに嬉しかつた、何も金を借りやうの、品物を貰ふのといふためではなし、

其親切な仕方、同情をよせた方法が確しかったのだ、とボブが言ふ。

た。それは全くチムちゃんを知つてこゝろと涙をわけてくれるかと思はれた。』

『ほんとにた優しい方でございますね、』と女房が云ふと、ボブが返答した。

『逢つて話をして見なさい、お前にも合点が行くよ。それであなた方は——  
——聞きな、いゝから——ビイタアに佳い職を見つけて下さるゝ相違無し。』

『ビイタア、まあね聞きよ！』と妻が。すると一人の娘は口を出して、

『そしたら兄さんは嫁さんを貰つて、自分で家持するのね。』

ビイタアは齒をむき出して、やり返した。

『可厭だ、お止し！』

『それは何れ、何日か其中、さうなるかも知れない、何も急ぐわけでは無いが、のう、ビイタア。けれど兎も角にた互ひが分れ〜にあつたと

九六一〇 Set up = begin house-keeping.

九六一五 It's just as likely etc. He is as likely to marry as he is likely not to marry.

九六一六 though there's plenty of time. 急ぐ理由は無いが。  
九六一七 and for get Tiny Tim etc. 不具なるチムは(不具なるため)子供たちのケンカするさき之を和らげて互に仲よくする仲人なり。故に若し他の小供にして軽々しく此後ケンカなどせんか、そはチムを忘るゝものなり。(329)

しても誰も可哀さうなチムちゃんを忘れはしな——な、忘れはしない——又誰も此の死別れを忘れてしまふものは無いと己は思つてゐる。』

『それはた父さん、決して』と、皆が異口同音。

『それであ、又己は思ふのだ、(330)衆兒、チムちゃんは那樣な不具者で、うれだから大層温順しかつたと思ふなら、ほんの小供ではあつたが、皆んあに互に喧嘩口論を仕はすまい、喧嘩口論をして、可愛らしかつたチムを忘れることは仕はすまい、な。』

『さておれ父さん、決して、』又異口同音ふ子供たちが言つた。

『お、よし〜、満足〜、』と小男のボブは叫ぶ。

女房も娘たちも幼い二人も彼に親吻し、又ビイタアは父と握手した。

チムちゃんの亡魂よ、汝が神髓は御神の賜ある「無邪氣」なるぞや！

斯固陋爺——『幽霊どの、お別れの時が近いやうに何となく思はれ



九七一〇 to the end just now desired. 彼の望んである目的の場所(彼の死屍は何人か) スクルージが尋ねた其間に答へんとするため。(321)

まする。思はれはしまするが何故かはわかりませぬ。私が見ました彼の死骸は何人でござるかお話し下されませ。』  
『ビゴレスト、アフラクスマス、エット、ツロカム。』  
『當來の祝日の幽霊は以前の如く彼を——時は相違しておるが、實際今迄我が前に示現したいろくのもの、唯未來に關した、といふはか更なる順序が無いと斯固陋爺は考へた——商業取引所に連れ立つたのであるが、併し我が身の影は示してくれぬ。實際幽霊は何物をも見んと立ち寄る所なく、(322)丁度今斯固陋爺に望まれた目的の場所に急ぎ行くかのやうに只管真直に進んだが、又彼は一寸立留りたいと懇願した。』

『只今急ぎ通り参つた此の内庭は私商賣の場處でござりまして、又永い間さうでござりました。事務所が見えます。私の行末は如何でござりませうか、見せて下さりませ。』  
『幽霊は立留まつたが其手は、あらぬ方を指してゐるので斯固陋爺は、』

『私の家は彼所でござりまするよ、何故方角違ひをお指しおされまする?』

いつかお聴かぬ指さきは何の變化をも受けぬ。  
事務室の窓より急ぎ行つて内を覗きこむと、やはり事務室は相違ないが自分では無い。室の飾りも違つてゐて、椅子に腰下した姿は自分で無い。幽霊の指端は以前の通り。

再び彼は連れ立つて、何故であるか、何處へ行くのかとも訝りながらも、どある鐵門に達した。入りこむ前に立ちどまつて見回すと、——  
墓場である。では此所にこそ彼の慘(あはれ)の人が埋められてゐて、今や其名の知れねばならぬ、荒廢した場所である。(323)周圍は屋並で壁垣を成した上、雑草雜木生ひ茂り又鉄を入れぬ廢寺の庭は落葉朽木が年々堆くまつて生命のある草木は見らるべき影さへなく、滿庭死屍に塞がれて、それを飽食した墓地の肥り様——荒廢した場所である!

九七一〇 worthy Place. つちらぬ場所。荒廢した場所。  
九七一〇 31 the growth of vegetation's death etc. 意味不明の句なれ共下の如くならん即ち此の訪ふ人もなき墓所には堆き落葉他に移さること

なく次第に堆積して、死葉枝葉を以て掩はれたる場所が生命ある樹木よりも大なりき。filled with repleted appetite. 墓地を掘り入して死屍を併せせる悪鬼としたり。此墓所は其地城の小なるに比して餘りに多く死人を埋めありと。(322)

九八—8 Mens courses will etc. 吾人の終局は其以前の行為に因て豫知し得らる。若し其(善悪の)行為を繼續すれば其善悪の結果に達す。

幽霊は墓碕壘々の間に立つて其の一つを指さしたので彼は打震ひつゝ其の方ふ足を向けた。幽霊は精密に以前の形であるが、其の嚴格の躰度に何か新しい意味が籠るやうふ思はれて斯固陋爺は恐ろしさやる方無い。

『貴方がお示しのあの墓ふ近寄りしますが、其の前ふ先づ一つお尋ねして答へを願いたいことがござります。お見せお預る是等のものは起つてゐますると決まつたものでござりますか、それとも起るらしいといふはどのとでござりませうか。』

やはり幽霊は我が立つ側の墓石に指を向けてゐる。

斯固陋爺——『人の成行は其の常の行狀で大低知られまするもので、それを押し通してしまへば、其の果に行きつかねばありません。が、若し行狀を改めれば其成行も變りませう。貴方のお見せ下されることは、いかゞでござりまする、やはり左様でござりまするでな?』

けれども幽霊は例の不動の姿。

彼は震へながら指さす方ふ匂ひ寄つて、忘れ果てた墓石の銘を讀めば我が名の——エ・ヘ・テ・ザ・ア、斯固陋爺!

『この下に埋められて居りまするは私でござりまするか!』と膝行して叫喚の聲をあげた。

例の指ささを斯固陋爺に指し返して再び其の墓に向けた。

『れ、いや、幽霊殿! いや、いや、何として!』指頭依然。

確かと例の長衣にすがりついて斯固陋爺、

『幽霊殿お聞き下され、私最早是れ迄での私ではござりませぬ。此所に御案内下されあなたら未來はどのやうな者にあるやら知れませなんだに、もう其のやうな私ではござりませぬ。全く望みが無い私ならばこれをお見せ下されはなさるのでござりませう。』

九八—28 For the first time etc. 初めて手を振つた(即ち今スクールシが望がないなら此を見せはすまいと言ひしを、望みなきにあらず、望みあ

りと言ふ意にて手を振りしなり。(323)

(323) 初めて手を振つたやうに見えた。

斯固陋爺は其の前の地上に平伏して、

『貴方さまは私を仲裁して憐れな者と思し召して下されます。たしかに私は生れ代つて、お示しふなつた現像を替へることが出来ませうで?』  
親切な手が振動した。

九九一 3 shall  
strive within me. 三  
のユーメツトが常に  
我心中に在りて我  
を警戒注意して善  
を爲し惡を爲さし  
めざらん。

『私、心からクリスマスを信仰して年中守るやうにいたします。過去、現世、未來を通してさやういたします。三つの幽霊殿が私の内心に抗争ふて下さります。其のお教訓は閉め出すことではござりませぬ。あゝ、私、この墓の銘を拭き消しても宜うござりませうか。』  
苦痛を得堪はず彼は幽霊の手を捕へると、手は自由を利かさうとしたのであるが斯固陋爺の願ひの方が強くてそれを阻んだ。而かも尙ほ強力フワントムの幽霊は彼を跳ね返したのである。  
我運命を取り返さんものと最後の祈願に手を上げて見れば幽霊の被り

物も衣服も變つてゐて、其姿は縮まつて、崩れて臥臺ねたいの柱の下に沈みこんだのである。



第五齣 大團圓

左様！臥臺の柱は自身のであつた。臥臺も自身のであつた、部屋も我が部屋であつた。就中最も幸ひなとよは我改心懺悔すべき自身の「時」が目の前ふ在つた！

斯固陋爺は寢所から匂ひ出して繰り返した——「過去、現世、未來を通してやういたします。三つの幽霊スプリットの私が私の内心に抗争うて下さります。おこぞーゴツプ、マアレー殿、クリスマス様、このやうよして下さるとは有りがたうござりまする、お禮申上げまする、ぞーゴツプ、マアレー殿！」

斯固陋爺は上機嫌で跳ね上つて眞紅にあつて、皺枯聲を立てんとしても容易く其の催促ふ應じぬほど。幽霊スプリットと抗争して列しく啜り泣したので顔が洗つたやうである。

百一 mislaying  
衣物を取らうして  
置き忘れる。

百二 making a  
Perfect Laocoon. 其  
二兒ともむに蛇に  
纏はれて無惨の最  
後を遂げしナライ  
アの息(羅馬の  
詩聖ヴァシルの  
ヘイニアド中に在  
り)。此の事は昔よ  
り彫刻物に塵々用  
ひられてあり。ス  
クルーシは常時の  
習俗により長い長  
いクツシタを穿か  
んとて精神揚揚せ  
る場合故足に巻き  
ついて甘く穿かれ  
ぬなり、故に作者  
此のをかき比喩  
を用ひたり。(324)

彼は寢間掛の一を手の中に摺りこみつと喚いた。——「引き裂けてはねらぬ、剥ぎ取つては無い、銀も何も在る。皆此ふ在る——私も此に居る——いろ／＼の物影があつても消えて宜しい。消ねるであらう。消ねるとも——」

此の間彼は絶えず忙がしく衣服を手おかけて、裡反したり、顛倒反したり、抓裂いたり、置き忘れたりして、あらゆる無法狼籍の仲間に入れてゐる。

『私どうしたら可いのだかわからぬ』と笑ふやら喚くやら、そして例の長靴襪を穿かうとして(325)ヲオコウシ宜しくといふ風に藻掻きながら、——  
『鳥の羽のやうに軽うなつた、天使エンジェルのやうに幸福シヤワセにあつた、學校生徒のやうに面白うなつた。泥酔漢のんだんのやうに眩暈めまひがしてきたぞ。何誰もクリスマスおめでたう！世の中の皆さん、結構な新年！やあ／＼！はう